
流星の軌道

散らし屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星の軌道

【Nコード】

N5791K

【作者名】

散らし屋

【あらすじ】

常しえに噛み合い続ける歯車。歯車に噛み砕かれた光と光とが、徐々に一つのラインへと「収束」していく。『設計者』により下された、『人類への試練』。『限界』を問う試練に対し、スバル達はどのような答えを差し出すのか。……今ここに、流星のロククマン史上最大の戦いが幕を開ける！

人物紹介

星河スバル

世界に知られている範囲では三度、知られていない範囲を合わせる
と五度も世界を救った少年。

ウォーロックと電波変換する事によって、シューティングスターロ
ックマンとなる事が出来る。

マスメディアなどに正体を嗅ぎ回されているが、WAXAやサテラ
ポリスの圧力によって、スバルがロックマンだという事は隠されて
いる。

ウォーロック

元AM星人、現在はウィザードである。

FM星でもかなり名前が知られていた乱暴者であるが、その腕は確
かな物である。

スバルの良き理解者。

運河オゼルうかわ

TKシティ内に設立された、サテラポリスTK支部の三人の内の一
人のエース。
実力はエースというだけあって、相当な物。
何やら秘密があるようだが。

レイニー

オゼルに使えるウィザード。
オゼルと電波変換した姿は。

白金ルナ

星河スバルと同じ小学校に通う少女。
お嬢様気質で、リーダーシップがある。

モード

ルナのウィザード。
ウサギのような外見をしている。

最小院キザマロ

星河スバルと同じ小学校に通う少年。
背が小さい事を気にしている。自作のマロ辞典なる物を所持している。

ペディア

キザマロのウィザード。

ロボットのような外見をしている。

牛島ゴン太

星河スバルと同じ小学校に通う少年。

電波変換が可能で、オックスと電波変換する事によってオックス・ファイアへと変身する。

オックス（ウィザード）

かつてゴン太と電波変換したFM星人・オックスの残留電波が具現化した存在。

残留電波が具現化した存在なので、オックス本人では無い。

オックス（本体）

ロックマンにデリートされ、外宇宙のウェーブロードを彷徨っている

たのだが、とある者達によって復活した。ウォーロックへの復讐を目的としている。

双葉ツカサ

親に捨てられた過去を持つ少年。

現在は第二人格である『ヒカル』をコントロールする為の旅に出ている。

双葉ヒカル

ツカサの第二人格。

暴力的で好戦的な性格をしている。

ジェミニ（ウィザード）

ツカサの中にあつたFM星人・ジェミニの残留電波が具現化した姿。自我は無く、喋る事も不可能。

ジェミニ（本体）

かつてはFM王の右腕とも呼ばれていた、FM星の戦士。
ロククマンにデリートされ、宇宙を彷徨っていたが、とある者達に
よって復活させられる。
目的は宇宙の王者となる事。

クエーツ

アメロツパ人の科学者。
肌は青白く、クマも大きい。金髪はかなり痛んでいる。
常に白衣を纏っている。
かつてはAM三賢者と共に『サテライト』を作り上げた。その後、
数年間に渡って行方不明になっていたのだが。

用語集

【ワイザード】

人工生命体の事。正確には、人工電波生命体である。

科学の発展により、一人につき一体持つような時代になってきている。

特徴としては、電波生命体と比べて金属的なアーマーが多い。

【電波生命体】

その名の通り、体が電波で構成された生物の事。

主に『電波星域』の各惑星に生息している。

星人によっては、『電波星域』より外に出ると、『電波変換』しないと本領が発揮できないのも。(例・FM星人。AM星人の場合は、『電波星域』外だと電波変換しないと本領を發揮できない者と、『電波星域』外でも電波変換しなくとも本領が發揮できる者がいる。MH星人はこれには含まれない。MH星人の場合は『電波取身』というものが行えるが、電波変換とは無関係であるし、本領を發揮できるかどうかにも関係ない。)

【アカシックレコード】

宇宙のどこかに存在されるとされる、『この世界での全ての出来事を記録した』物。

科学者・クエーツの『目的』にこれが関わっているらしいが……？

【電波星域】

強い電磁波を放つ惑星が多く集まっている区域の事。
FM星、AM星、MH星がこれに含まれる。

【MH星】

赤い輝きを放つ星。
『電波星域』最強とされる『MH星人』が住んでいる星でもある。

【MH星人】

『MH星』に住む電波生命体。
『MH星』の特異な電波環境で育ったせいか、彼らは他の星の電波生命体と比べてかなり強い。
また、『電波取身』という特殊能力を所持しており、『人間の体を無理やり乗っ取り、擬似電波変換状態になる』という事が可能。
乗っ取るので周波数同調の問題などは丸つきり無視できる。

【FM電波星団】

第一一代目FM王が作り上げた、『FM王の側近戦闘部隊』。FM星最強の者達がここに集まる。

よっぽどの事が無い限り使用されない。

アンドロメダなどが含まれる『最終兵器ランク』より一個下の階級・『緊急手段ランク』に位置するほど強力な部隊である。

【星間戦争】

惑星と惑星の間で行われる戦争。

主に『電波星域』で行われる事が多い。……というより、『星間戦争』のほとんどが『電波星域』内での争いだ。

【ムーメタル】

古代のムー文明が作り上げた不思議な鉄。

その正体は、『ラプラス』という名の『破壊兵器』の能力の封印を解除していく為の物である。

1 起動

WAXAアメリopp本部。

ニホン支部とは比べ物にならない程の規模を誇るこの場所に、一つの情報が入っていた。
小さいが、重大な意味を持つ情報が、だ。

『四月三日

「例の研究」が完成した』

そして、コダマタウン在住の星河スバルは頭を抱えていた。
理由は簡単だ。

六年生になったばかりだというのに、宿題をやり忘れていたのだ。
提出期限日は今日。

春休み中に出された宿題を完遂していなければいけない日付だ。

「あああああああ！！　どうしよう！　ねえ、どうしよう！？
ロツク！？」

『珍しく早起したと思ったらピーピー騒ぎやがって……言ってお
くが、オレは一切関与しねえからな！』

「そんなあ〜！？」

失礼な言い方だが、これが世界を五度に渡って救ったヒーロだとは思えない。

二二〇X年。

科学技術は大いなる発展を遂げていた。

が、進化すればデメリットが付くのは何時の時だって、当然の事だ。
そのデメリットが、五度に渡る世界の危機。
説明は省かせてもらうが、実はこの五度に渡る危機……一つだけ共通点がある。

そう、……危機の全てが、『ロックマン蒼き流星』と呼ばれる者によって解決されている。
そして、その『ロックマン蒼き流星』がここに居る、星河スバルなのだ。

アメリッパ、ニューヨーツ。
世界的に有名なこの土地の一角に、『危機』が迫っていた。
いや……正確に言うと、危機が襲っていた。

電波と思わしきモノで作られた、緑一色の人　人かどうかも分からないが　が、突如としてニューヨークを襲ったのだ。

現場からはFM星人と同質の電波が感知されており、事態の重大さが伺える。

FM星人の電波というのは人間によって作られたウィザード等とは違う。

質が違いすぎる　　正確に言うと、強力なのだ。

それらが、街を襲っている……。

アメリッパのライトポリスが駆け付けようにも、街の周囲に張り巡らされたバリアによって内部に入る事が出来なかった。

事態は刻々と悪化していく　　。

崩壊した民家の中から、金髪の男性が現れた。

痩せ細っており、目の下にはクマが出来ていた。

出会ったらまずは相手の事を心配してしまいそうな体格をしている。

男性は小型の通信機を耳に当て、不健康そうな姿とは裏腹に、ハキハキとした口調で語る。

「ああ、無かった……。だが、ニューヨークにある事は間違い無いんだ。引き続き捜索を続ける。ああ、各WAXA支部やサテラポリスが攻撃準備を開始している、か……。それについてはコチラも把握している。だから迎撃体制を整えているんだろう。ああ、アレを使用する」

1 起動（後書き）

自分が他に連載している小説のネタも散りばめてあったりするので、知っている方はニヤリと出来るかもしれません。

執筆速度はどうなるかわかりませんが、とある無能力者と超能力者よりは速いと思います。

2 動作は緩やかに

コダマ小学校。

その一室 6 - A に星河スバルは居た。

既に席替えは済ませており、スバルの席は最小院キザマロの隣となつた。

前に座るのは牛島ゴン太。そしてゴン太の隣に座るのが白金ルナだ。

星河の席は壁際であり、クラスで飼育している動物や休み時間に使うボールを眺める事が出来た。

結局、宿題の件については怒られなかった。
新学期だから、だそうだ。

そこで、星河の視線が一つの席に注がれた。

白金ルナの右席である。

そこには、誰も座っていなかった。

新学期に必要な道具が置いてあるだけで、誰もいないのだ。

(ジャック……)

星河は、自然と脳裏にかつての友達の名前を思い浮かべていた。

現在は第一級犯罪者として、姉のクインティアと共に離島の刑務所で服役中の少年だ。

世界にとって、四度目の危機　メテオG事件を引き起こした姉弟だ。

厳密に言つと引き起こした訳では無いのだが、最終的に彼ら二人が地球上に最大の混乱をもたらした事は確実である。

チャイムが鳴り、担任の育田道徳が教室に入ってくると同時、星河は視線を前方のディスプレイへと戻した。

ニューヨーク上空。

そこに、白と青で構成されたWAXA二ホン支部の飛翔体が浮かんでいた。

巨大な戦闘機にも見える。

そして、その中には数人のサテラポリス隊員が乗り込んでいた。それぞれが脇に電波体を従えており、窓際に設置された椅子に腰掛けている。

サテラポリスのエースもやはり、その中に居た。

サテラポリスといっても、様々な支部がある。

フジ山頂にある、WAXAと共同体の本部だけでなく、ニホン各地にサテラポリスの支部がある。

その中の一つのエースが、この少年だった。

「……、暁シドウは欠席か」

彼は前の空席を見つめ、静かに呟く。

それに対し、作戦総指揮を務める男は目を細めた。

「……知らない、みたいだな……。暁シドウは死んだよ、数ヶ月前にな」

第三級から第一級の犯罪者を閉じ込めておく刑務所が、小さな離島に設立されてある。

その中の一つの独房に、彼女は眠っていた。

名はクインティア。

かつて、メテオGを用いてテクノロジーを滅ぼそうとした少女である。

「……………、ッ！」

ガバツ！ と、勢い良く彼女は上半身を起こした。

体中に、嫌な汗がべつとりと付いている。

先程まで、夢を見ていた。

悪い夢では無い。

かと言って、良い夢でもない。

どういった風に表現すれば良いのか分からない。

『データー』内で感情を偽ってきた彼女は、いつの間にか感情が乏しくなっていたのだ。

……………だが、これだけは断言できる。

何故だか知らないが、夢を見ている間は心地よかった。

『アノヒト』が帰ってきて、横で博士が騒いで。

「バカバカしい……」

静かに首を振り、クインティアはその思いを否定する。
いくら願った所で、彼は帰ってこない。

と、そこで独房の外の通路から足音が響いた。

点呼の時間だ。

2 動作は緩やかに（後書き）

スバルを作中で星河と表示しているのには理由があります。すんごくくだらないですが（笑）

他の作品じゃスバルを星河と書いているのはほとんど無いんですね。

という訳で、自分はスバルでは無く星河と書いてみました。

他の作品と違う事やってみたかったっただけです。

マジでくだらないですね……。

では、これからも宜しくお願いします！

3 地上へ

WAXAの飛翔体がガクン！！と、斜めに揺らぐ。
出撃の合図だ。

「よし、……みんな、覚悟は良いな。これから、ニューヨーク防衛戦を開始する！ 街を襲った緑の人間 WAXAの名付けでは、『グリーンマン』だな。ヤツらを全てデリートし、街を救う事が我々の目標だ！！ バリアによって街から出られなくなった人達も保護しろ！ 我々、『ニホン部隊』は各サテラポリス支部のエースを掻き集めて作った部隊だ その名に恥じぬ行動をするように！」
マイク機能をOFFにし、作戦総指揮は壁にもたれかかる。
彼も、サテラポリスのエースであった。

ガクン！！ と、今までで一番大きな揺れが機内を襲う。
が、これを境にして揺れは止んだ。

今度こそ、本当に出撃だ。

それぞれがハンターを構え、音を立てて立ち上がっていく。
飛翔体の扉が開け放たれ、一人目のエースからそこから飛び出した。

空中で電波変換をするのだ。

この中で最年少である、一五程の少年も立ち上がった。

暁シドウが死んだ。

彼の噂は良く聞いていただけに、ショックはそれなりにあった。少年が立ち上がったのを見ると、隣の黒髪の男性が語りかけた。

「……じゃあ、頑張ろうぜ。今回の作戦はかなり重大だからな相手の戦力も分からないし、慎重に行くとしようぜ。ロックマン」

男性の言葉に、少年は暫しの間沈黙していた。

男性と目を合わせた彼の言葉は、単純な物だった。

「その名前で呼ぶな」

「……前から思ってたんだけどさ。何でオマエはこの呼び名を嫌うんだよ。ホントの事だっというのにさ」

二人が話している間にも、三〇人近くのエース達が順番通りに飛び降りていく。

既に、グリーンマン達と戦闘を繰り返している者も居るはずだ。

「……、僕はその名に相応しくない。僕は、あの英雄ほど立派な人間でも無いし、誰かを護れる人間でも無い。だから、その名で呼ぶな」

「……お前……」

呟いた男を片腕で制し、少年は窓の方を見る。

それから、小さく言った。

「どつやら、出番みたいだ」

少年の言葉を聞き、男性は口を閉じる。

最後に飛び降りるのが男性で、その前に飛び降りるのがこの少年なのだ。

灰色のハンターを右腕に装着し、少年は扉の前に立つ。

風の音が耳に入るが、彼はそれを無視した。

「……行くぞ、レイニー」

『了解した』

脇のウィザードが告げ、その姿が消える。

同時、少年は扉から一歩踏み出す。

ビュオツ！！ と、体全体が撫で上げられた。

その状態で、彼は叫ぶ。

「トランスコード……！！」

凄まじい勢いで、灰色の光が彼を包んだ。

そして、彼は最後の言葉を告げる。

「ファールレイン」

「ロックマン!!!」

3 地上へ（後書き）

ファールレインロックマン……これが意味する物は何でしょうか…
…？
…ふふっ、ふふっふ…（

今回はグリーンマン連中とのバトルを予定しています！
上手く行けば、他の場面も描写できるかと。

ってか、この作品は一話一話が短いな……。

4 もう一人のロックマン

ニューヨーク。
非常に狭い範囲だが、ニューヨークの一角はグリーンマンに覆われていた。

各国の戦闘部隊が集まり、グリーンマン達を倒す事となった。
ニューヨークの周囲を覆っていたバリアを突破できた理由は簡単だ。

ニホンWAXA支部がライトポリスから送られたバリアのデータを基に、それを破る為の『グリーンバリアキャンセル』を作り上げた。
『グリーンバリアキャンセル』はかつての『ノイズキャンセラー』のデータをグリーンバリアを突破する為に必要な物に変えて作られた。

何故ニホンだけが作成に成功したのか……、という疑問に対しては簡単に答えられる。

技術ではニホンがトップなのだ。
それに次ぐ形、もしくは追いつくような科学力を持つのがアメロツパとR国である。

ただし、ニホンにも苦手分野が多々ある。
軍事では最下位、その他の分野でも他国に負けている部分がある。

そうだった部分が重なり、やはりアメリッパは世界一の大国だ……と再認識される。

とにかく、これでバリアは突破できた。

サテラポリス、ライトポリス、その他の部隊の目的は単純だ。

グリーンマンの魔の手に晒されている、ニューヨークの三分の一を救う　それだけである。

ファールレイン・ロックマン。
トランスコード003、シューティングスター・ロックマンの戦闘データを基にして作られたウィザード、『レイニー』と『運河オゼル』が電波変換する事によって生まれた、いわばもう一人のロックマンだ。

戦闘能力はロックマン以上であり、常時サテライトサーバーへのアクセスポートを開く事によって莫大な力を得ている。

『project | hero reincarnation』。
人類初の人工電波変換を成功させた『project | tc』を土台としたプロジェクトだ。

『サテライトPGM』を装備する事によって、体に掛かる負担を消す事にも成功している。

そして、そんなファールレイン・ロックマンはニューヨークの一角に居た。
グリーンマンの集団によって、ニューヨークの三文の一が襲撃された。

という訳でファールレイン・ロックマンは呼び出されていたのだが……。

彼は右腕に『ブラストバスター』と呼ばれる、太い銃のようなモノを構えている。

アシッド・エースが扱っていた『アシッドブラスター』を強化したモノだ。

ロックオン機能もかなり強化されており、
それ故に、ファール
レイン・ロックマンは攻撃を外す事が無い。

ロックオン完了から攻撃に移るまでの時間、僅か0・02秒。
詳しく説明すると、

ブラストバスターの機能により、ファールレイン・ロックマンのバ
イザーに表示されるロックオンマークの性能が五倍程に上がる。
当然、それがあればどんな状況だろうとロックオンが正確に働く。

そして、
正確すぎるロックオンが相手を捉え、ファールレイン・
ロックマンが攻撃に移ろうとした瞬間、彼の体が自動的にブースト
状態となる。

一歩踏み込めばそれだけで数メートルの移動が可能なのだ。

それと同時に、自動的に背中にバーニアが展開される。

そのバーニアがブーストを起こす為の電波を噴射する為、ファール
レイン・ロックマンはロックオンから0・02秒で相手の前に移動
する事が出来るのだ。

簡単に現状を説明してしまおう。

ファールレイン・ロックマンが目に見えない程の速さで、グリーン
マンの集団を斬り刻んでいるのである。

一見すると、グリーンマンが何の前触れも無く次々と消滅している
ようだ。

斬り付けながらも、ファールレイン・ロックマンはバイザーに次々と表示される情報に目を向ける。

情報の発信源はニホンWAXA支部だけでなく、アメリoppWAXA本部やライトポリスからでもある。

「…………敵の総数は五〇〇〇〇〜六〇〇〇、か。…………思ったよりもメンドーな事になりそうだ…………！」

5 シルバーマン

学校内に設置されている『ウェーブステーション』にハンターをかきし、星河は隣の売店から漂う売り物の匂いに鼻を躍らせる。

いつも思うのだが、どうしてこうもこの売店からは良い匂いが漂ってくるのだろうか。

が、星河は絶対に売店へは視線を向けない。

思い出してしまうからだ。『戦友』の事を。

さて、何故星河がここにいるかを説明しよう。

ハンターV Gを開発した会社 『system・future・tec』がハンターV Gのバージョンアップデータの配信を開始したのだ。

一般的に社会に出回っているのは『version・14』なのだが、今回の配信によって『version・16』へ切り替わるのである。

ちなみに、『system・future・tec』がハンターV Gのプロト版を作り、それを見たアメロツパのライトポリスが、技術力では最も優れているニホンへ協力を要請。

ニホンのWAXA、サテラポリスの協力によってかなりのスペックを誇る、現在のハンターが出来上がったのである。

当然、『system・future・tec』はかなりの発展を遂げた訳だが、これによって経済状況や情勢が一気に変わった。

これを世間は『情勢大変革』と呼んでいる。

まあ、余計な世間話は置いておきましょう。

さて、その『version・16』が全世界のウェーブステーションにて、本日から配信されているのだ。ダウンロードは異常なまでに簡単だ。

ウェーブステーションのハンター置き場にハンターを設置し、ウェーブステーションを操作して『配信ダウンロード』を選ぶ。そうすると、『ホワイトカード』や『マップデータ』の配信データが出るので、そこから『バージョンアップ』を選べば良いだけなのだ。

勿論、ゼニーは掛かる。

金額は僅か六〇〇ゼニーだ。

ゼニーはハンター内にデータとして保存されているので、ダウンロードが終わると同時に自動的にデータから差し引かれる。

ちなみに、ダウンロード時間は五分程度である。

やはり容量が大きいのだろう。

そうこうしている内に、ウェーブステーションがピピッと小さく鳴

った。

ダウンロード完了の合図だ。

星河はハンターを手にとると、腰に入れた。

本当はじっくりと弄りたいのだが、そろそろ授業開始だ。

その日、ある女性がコダマシティに訪れていた。
彼女の名はオリヒメ「ヴェーグル」タナである。

つい最近まで離島の刑務所に閉じ込められていた訳だが、別に釈放されたという訳では無い。

世界を混乱に陥れる程の大混乱を起こしたのだから、そんな短期間で釈放される筈が無い。

何者かが、オリヒメを仮釈放するように……とかなりの額を刑務所側に引き渡したのだ。

勿論、オリヒメはそんな人物に心当たりは無い。

その前に、知り合いなど頭のイカれたマッドサイエンティストしかない。残念ながら、普通の科学者や研究者とは巡り合えなかった。原因は言わなくても分かるだろう……彼女もイカれたマッドサイエンティストの一人だからだ。

オリヒメは警戒心を強める。

「……一体、この世界に何が起きているのだ……？」

一見、表から見れば平穩そのものな世界だろう。

が、最近、世界の歯車が狂い始めているようにしか思えない。

まずはFM星事件だ。

結局はFM王ケフェウスと和解できたが、何かが引っ掛かる。

次にムー事件。

これは自身が起こした物だが、やはり引っ掛かる。

マテリアライズの仕組みを一晩で考え付いた事、どうしてあんなにも簡単にムーの遺産を巡れたのだろうか……。

そして、何であんなにも簡単に……誰も見つける事が出来なかった、ムーの秘密を次々と暴けたのだろうか。

次にメテオG事件。

何故、宇宙空間のノイズが集まる……等という奇妙な事態が発生した？

第一、何故隕石の形となる？

それに、何故地球の軌道に乗った？

……やはり、何かが府に落ちない。

そして、極め付けはここ最近の情勢だ。

グリーンマン事件、宇宙空間で凄まじいエネルギーを感知した事

コチラはシリウスという電波体が原因だったらしいが、。

何かがおかしい、とオリヒメは思う。

一体誰が自分を仮釈放させたのか、そしてこのわだかまりは何なのか……。

調べてみる必要がある、とオリヒメは考える。

そしてまた、ソツテム＝ロゲフ ソロも同じ疑問を抱いていた。彼が今居るのは、アメロツパWAXA本部だ。脇にラプラスを従えた彼は、苛立たしげに眉を動かす。

やがて、本部内から出てきた茶髪の青年を見ると腕組を解いた。

「……………用とは何だ？」

苛立っているのを隠し、あくまで冷静に問いかけるソロ。それに対し、茶髪の青年は陽気な声で語った。

「いやー、ゴメンゴメン。確か君がサテラポリスに『ムー』のコードで管理されている、ソツテム＝ロゲフでしょ？」

「……………ソロでいい」

「ああ、じゃあソロ君。君に協力してもらいたい事がある」

「……………残念だったな。俺は馴れ合うのは」

「……………君の悩みに関連したお願いだよ。ムーにも関係しているね」

ピクリ、とソロの眉が動いた。

その反応に手応えを感じたのか、茶髪の青年は続ける。

「いいかい？ 君の思っている通り、やはり一連の事件には裏がある筈なんだ。ムーの末裔である君は、ムー大陸やムーの遺産に違和感を覚えたんだろう？ ムーの末裔である君なら、ムーの力を敏感に感じられる筈だ。だからこそ、疑問を感じた」

「……、」

「ムーに違和感を覚え始めた君は、それだけでなく……今までの事件に疑問を覚えた。 そうだね？ 僕も同じなんだ。 とは言っても、僕は科学者だからメテオG事件に違和感を覚えた事から始まったんだけどね。 だから、僕も原因説明をしようとしたんだけど……ウチのお偉いさんが、「その研究をただちに止めないとクビだ……」ってさ。 だから、僕はこうしてここに居る。 こっそり抜け出してきたんだよ。 頼む、君の協力が必要だ」

それを聞いたソロは、静かにムーキャリアを取り出した。

揉め事を起こしたせいでサテラポリスに捕まり、改造されたモノだ。 ちなみに、これのお陰でラプラスはウィザードになれているのだが……同時に、トランスコードとかいう変な物で管理される事となってしまった。

ラプラスをその中に収め、ソロは静かに歩き出す。 それを見た青年は目を見開き、こっ問いかけた。

「きよ、協力してくれるのかい!？」

「……勘違いをするな。俺はお前を利用するだけだ。 もたもたするな、早くしろ」

「そ、そっか……じゃあまずは……グリーンマンの所に向かってくれないか？」

「……何のつもりだ」

眉を顰め、問いかけるソロ。
言動の一つ一つに殺意が籠っている気がするが、青年は見ぬ振りをしている。

「やっぱり、この事件にも違和感を感じる。……行けば、何かの手掛かりを得られるかもしれない」

「……そうか。」

「ここはニューヨークだ。グリーンマンが暴動を起こしているのもニューヨークだから、僕は車を使えば君に追いつける。君は電波変換して行ってくれ」

「チツ。……メンドーな事になりそうだな」

事件はグリーンマンだけでは無い。
フレンプ上空でもまた、混乱が起きていた。

戦闘機に乗り込むフレンプ人の青年は、冷や汗を掻く。

技術的には全部の戦闘機を無人に出来るのだが、今回の作戦だけは
そうはいかなかった。

無人のマニユアルに載っていない事態なのだ……という事は、無人
にするとエラーが発生して事態に対応できない。

『こちら作戦本部！！ 12、聞こえるか！？ 状況を説明しろ！』

「聞こえてます！！ くそっ、あれは何なんだ！？」

青年が乗る戦闘機の窓から見えるのは、常識を超越した光景だった。
海のド真ん中に、太い金属製の木のような物が生えている。

戦闘機の解析情報から、それが高濃度の電磁波を放っている事は理
解できた。

が、光景が理解できない。

雲を突き破る程巨大なのではないか、と思わせる大きさは勿論。

金属製の棒の側面に窓のような物が設置されており、それが開くと
同時に奇妙な物が飛び出してくるのだ。

全身を白いアーマーで覆い、背中には飛空する為の巨大バーニアを

付け、手には二メートルはあるつかという巨大な銃器を持ち。

　アーマーを纏うそいつらは、地球上では考えられない程の高濃度の電波を持った生命体なのだ。

「くそっ!!!　意味が分からない!!!　何がどうなっているんだ!!!」

戦闘機に備えられた、高性能のミサイルを連続で発射する。狙いは手前の生命体である。

青年は専用のゴーグルで確かに、ミサイルが生命体に向かったのを見た筈だ。
だが、。

白い生命体はミサイルを確認すると、銃器を操作した。
同時、背中のバーニアが白ざめた紫のような光を噴射する。
まるで、翼のようだった。

だが、見惚れている場合ではない。
彼が持つ銃器が、ロボットアニメよろしく変形をし、巨大な剣へと変わったのだ。

それを振り回し　考えられない事に、ミサイルを叩き割ったのだ!

ミサイルが真っ二つに割れ、凄まじい爆発を起こす。

が、白い生命体はアーマーのお陰で傷一つ無かった。

白い生命体はミサイルの源がどこなのか、を探索する。

そして。

無機質なバイザーが、その姿を捉えた。

遠くに浮遊する、青年の戦闘機を。

「ひ、あ……ひいあああつ……」

それに気付いた青年は無茶苦茶に戦闘機を振り回し、生命体から逃れようとする。

もはや、特訓時代の時に養った状況判断の為のマニュアルなどは、一切役に立たなかった。

『……………ウヴ』

白い生命体の翼が極限にまで膨張し、彼の速度が音速に達する。

視認できない程のスピードで動いた彼は、剣から銃へ戻した巨大な兵器を逃げる戦闘機へ向けた。

ドゥーン！！ と、大砲のような音が響き渡る。

戦闘機は大破し、炎が宙に舞った。

フレンプ上空で力を振るう白い生命体らは、今後シルバーマンと呼ばれる事になる。

5 シルバーマン(後書き)

ちなみに、

ニューヨーク⇨ニューヨーク
フレンチ⇨フランス

です

6 FM星

一週間ほど前。星河家やWAXAとも因縁がある、遙か宇宙。多くのロマンを人に与え、同時に多くの絶望を与えてきた未知の空間。

二〇〇年経った今では、大分解明できた所があるが、それでも、まだまだ残された謎は多い。

だからこそ、こうして多くの者を魅了してきたのだろう。

そして、我らの地球から少しばかり、あくまでも、宇宙的なスケールで言うと、だ。人間からすれば少し所では無い、離れたFM星にて、宴が始まっていた。

殺し合い、という名の宴が。

FM星付近にはAM星等、電波生命体が多く暮らす星が並んでいる。地球人はそれを『電波星域』と呼んでいるのだが、それは置いておこう。

今重要なのは、FM星が、別の惑星から攻撃を受けている事だ。

FM星付近では多数の電波兵器が飛び交い、鮮やかな閃光を宇宙に

輝かせている。

そして、有り得ない事に、電波生命体がFM星の兵器群と戦っているのだ。

通常なら、兵士よりも兵器が強いのに同じように、電波生命体よりも電波兵器が強いのだ。

だが、こいつらは違う。

生身で電波兵器と戦うほどのイカれっぷりだ。

FM星に進軍しようとする電波生命体。

それに対抗するFM星の電波兵器。

簡単に言ってしまうと、人間の集団が軍用兵器の群れと戦っているようなモノだ。

普通なら有り得ない光景。

そして、普通なら電波生命体達が挽肉になるべき場面。

だが、逆に電波兵器が次々と潰されていくのだ。

FM星の政治を担う中枢 『FM王室』は混沌に包まれていた。

『ケフェウス様っ!! 一体どうすれば!?!?』

『くそっ！！ Aランク級の電波兵器でも歯が立たない！！ Sランク級の電波兵器の出動準備にはまだまだ時間が掛かる！！ エネルギーが足りないんだッ！ どうすれば……ッ！？』

部下達の声聞き、玉座に座る幼きFM王、ケフェウスは頭を抱えた。

自責と自分への怒りが湧き上がる。

自分は何も出来ない、こんな事態に対応する事も出来ないのか……と。

『……相手は恐らく、MH星人だ……ッ。このままでは、我々は敗北する！！ AM星の方にも応援を要請しましたが、MH星人がFM星へのウェーブロードを封鎖し、AM星人と交戦している模様です！』

部下からの報告を聞き、ケフェウスは絶望に落とされた。

MH星人。

電波星域では最強と呼ばれる星だ。

それ故に、疑心暗鬼に陥っていた頃のケフェウスは彼らに手出し出来なかった。

非常に恥ずかしい事だが、当時の自分とはかく勝ちを誇りたかったのだ。

確実に敗北するような相手には挑まなかった。

そう、MH星はFM星が確実に敗北してしまうような相手なのだ。

昔の自分の行いに対する、罰なのかもしれない……とケフェウスは自虐気味に思った。

が、そんな感傷に浸っている場合ではない。こうしている間にも、FM星外周防壁が攻撃されているのだ。そして、確実に崩壊へと突き進んでいる。

……ケフェウスが下した決断は。

『……余が出る』

立ち上がり、ケフェウスは静かにそう言った。

その言葉を聞いた部下達はケフェウスの言葉を反芻すると、目を剥く。

『なっ』

『いけませんッ！！』

『やめてください！！』

それに対し、ケフェウスは薄く笑った。

楽しんでる様子は無い。

むしろ、その表情は苦しんでいるようであった。

未だに虚勢を張る幼き王。

約一年前と、何も変わっていなかった。

ある少年に対して、無駄な虚勢を張ったあの頃と変わっていなかった。

そう、虚勢を張る『理由』以外は。

『大丈夫だ。必ず、余は帰ってみせる。皆を不安に陥れるような事は、絶対にしない。……』

『しかし……、』

『ケフェウス様……！』

『認めません……！』

部下達はそれぞれに言い、ケフェウスの前に立ち塞がった。

決して、妨害では無い。

ケフェウスを想っての行動だ。

心を打たれそうになったケフェウスだが、彼は首を振って続ける。

『やるしか無い……頼む、聞き入れてくれ。余はやるしか無いのだ……』

それを聞き、未だに反抗しようとする部下達だったが、

『……そうだな。ケフェウス、お前は絶対に星の皆を不安に陥れたりはしない』

『ッ！ AM三賢者……！……！』

F M星王室内部に設置された、優に人間の五倍はあろうかという巨大モニターに、三体の電波体の姿が映った。

ペガサス、ドラゴン、レオ……。かの有名なA M三賢者だ。

『こちら側はもうすぐでそちらへ行けそうだが、それも確約は出来ない。その間にF M星が攻め落とされた場合、どうする？　そういつた事を踏まえると、私はケフェウスを行かせた方が良いと思うぞ』

『……私もそう思う。一星の王を行かせれば、経験的にも判断能力的にも有利だ。それに　ケフェウスの気持ちが一番だろう』

『考えてみよ、F M星の民よ　ケフェウスを行かせるべきか、行かせないべきか』

ペガサス、レオ、ドラゴンの順に、モニター越しのF M王室側近に問いかける。

側近達は僅かに逡巡した後、言葉ではなく行動で答えを示した。

さっ、と道を作るように、彼らは脇に退いたのだ。

それを見たケフェウスは頭を下げると、静かに……しかし、威圧感を以って開かれた道を進む。
進みながら、彼は言った。

『住民を『民指揮官』の指定したポイントへ避難させ、Sランク級兵器準備に労力を集中してくれ』

『了解しましたッ！！ ケフェウス様！！！！』

それと、とケフェウスは繋ぐ。

『…………… FM電波星団』を使用する』

言った途端、部下の目が見開かれる。
それから、小さく頷いた。

『…………… あの、最強の部隊を…………… ですか』
『…………… 使うしか無い……………。皆も、頑張^{みな}ってくれ。絶対に勝とう』

これより、反撃が始まる。

『FM電波星団』。

FM星の奥にある、最強の部隊だ。

FM星の軍師や防衛指揮官もそこに属している、というトンデモな部隊である。

連絡を受けた各々は待ってました、と言わんばかりに待機していた施設から出ると、FM中枢前の広場に集う。

面子は、

FM軍師長、ギユプト。

FM守護部隊指揮冠、カイオス。

FM兵器管理所長、ピネウス。

FM警備最高長、アウゲー。

FM艦長、ステロ。

軍師長はFM星戦闘部隊・『ボンバー』の長。

守護部隊指揮冠は、FM星を守護する部隊・『バリア』の長。

兵器管理所長は、FM星の兵器を管理・製造する機関の長。

警備最高長はFM星の治安維持を勤める、いわば警察のような組織の最高責任者。

艦長はFM星周囲を監視し続ける群艦の長である。

面子は彼ら五人だ。

『……全員揃いました』

警備最高長、アウゲーが告げる。

濃い青の体に、白いアーマーと所々に施された黄色い飾りで構成されている。

電波が濃い為、やはり形状は人間に近い物だ。

『よし。……これより、我々はMH星との戦いに臨む。 全員、心して掛かるように』

ケフェウスが告げると同時、喧嘩がしたくてウズウズしていたギユプト、ステロが飛び去っていく。

普段なら注意していたケフェウスだが、この日に限っては注意しなかった。

他の者も飛び去っていく中、唯一指令を仰ごうとアウゲーが留まる。こちらとしても好都合だ、とケフェウスはアウゲーに向き直った。

『……『ヤツ』を使いたい』

たったその一言だけで、ベテランのアウゲーは何の事が分かったのだろう。

口を開くと、こう返した。

『……フェンリールを、ですか。危険だと思えますが？ ヤツはコヴァスやヴァルゴ以上のSランク犯罪者ですよ』

『それでも構わん……ヤツとは余が交渉する 誰にも迷惑を掛けない』

それを聞いたアウゲーは暫く黙った後、無言で何かをケフェウスに差し出した。

不安定な形を保ち続けるそれは、紛れもなくFM星最高のランクを誇る留置所の鍵だった。

警備最高長であるアウゲーだからこそ所持できる代物だ。

『……、ありがとう。アウゲー』

『……貴方様に仕えるのが私の仕事ですから』

一方、場所は大きく変わってコダマタウン。FM星が深夜なのに対して 実はFM星付近にも太陽のような強烈な光を放つガスの塊は存在する。付近、とはいえ人間や電波体からすればとてつもない距離があるので、星河がシリウス討伐の際にFM星の近くに行った時はその存在を認識出来なかったが、ニホンは昼方だ。

そして、まだ学校が始まってから二日目だという事もあり、コダマ小学校は既に放課後を迎えていた。

昼食は家で食べる事になっているので、勿論、育ち盛りで空腹な星河は速攻ダッシュで家に飛び帰る。
当然の事だが、一番最初に教室から出たのはゴン太だ。

ついでに加えておくと、既にゴン太は自室の冷蔵庫に収納されている牛丼に手を付けている。

更に加えておくと、オックスも手を付けている。

更に更に加えておくと、ゴン太の口から大量に漏れたご飯粒やら何やらが床にダイビングしている。

更に更に加えておくと、牛丼の味付けは中々辛い。

更に更に更に加えておくと、オックスもゴン太もこの味付けは大好きだ。

更に更に更に更に加えておくと、ゴン太はたった今牛丼を食べ終わった。

更に更に更に更に更に加えておくと、この二人が牛丼を食べ始めたのは五〇秒ジャスト前だ。

更に更に更に更に更に更に加えておくと、二人が教室を出てから牛丼を食べ始めるまでに掛かった時間は僅か一〇秒。

まだまだ加えたい事はあるが、さすがに止めておこう。

……ついでに一つだけ加えておくと、二人は帰りに電波変換を使っ

ていない。

そう、電波変換を使わずにこの記録を叩き出しているのだ。

さて、本題の星河だ。

彼は玄関を開けるなり、速攻で白い鞆を放り投げた。

あかねからの注意が飛ぶが、育ち盛りの子供は勉強ではなく、食べ物の方に興味が向く物である。

なので、あかねからの注意を星河は聞き流し、否、聞き流す所かスルーしてしまう始末だ さっさと飯をよこせ、と言わんばかりに椅子に付く。

無言で飯をよこせと脅しているのだ。

昔懐かしみの893ですら脱帽物の高等テクニクである。

星河の目に 否、猛獣の目と向き合ってしまったあかねは無意味に戦慄。シャキッと背を伸ばす。

逃げ出すように調理台へと向かい、そそくさと調理を開始した。

恐るべし、猛獣星河である。

百獣の王ですら、彼の目と向き合った日には尻尾を巻いて逃げてしまふ事である。

さて、平和な日常とは遠く掛け離れた、ニューヨークの一角。
依然と、グリーンマンとの熾烈を極めた戦いは続いていた。

混沌が続く中で、ソツテム「ロゲフ　ブライはラプラスブレード
を振るう。

スライムのような奇妙な液体をばら撒き、呻いた上でグリーンマン
は破裂した。

ビチャツ、と先程の液体が思いつ切り噴射される。

もはやホラーなのだが、ブライは電波障壁で液体を防ぐので無問題
だ。

いや、常人ならあの光景を見たら絶叫物だが。

だが、この場には常人が一人も居ないので仕方が無い。

「チツ、……想像以上の数だな。」

『あつ、もしもし！！　聞こえるかい！？　僕だよ、トーマスだよ
！！』

突然、ブライの耳部分からそんな声が聞こえてきた。

勿論、声はブライにしか届いていないが。

「キサマか……。何の用だ？」

『こつちも、グリーンマン暴動地にいるよ。ここからなら、君への通信も届くだろう？ ちょっと所じゃないぐらい危ないけどね。』

じゃあ、本題と行こう。グリーンマンの数は、WAXAのデータによれば一万を超しているそうだよ。何時間か前までは、五〇〇〇体程度だったみたいだけどね……。どこからともなく、馬鹿みたいに増えているみたいなんだ』

「チツ、本当に気味が悪いな」

『で……。一つ、分かった事がある。』

「……。？」

ブライはトーマス 茶髪の青年からの通信に耳を傾ける。

そして、飛び込んできたのは思いがけない言葉だった。

ブライにとって、最悪の言葉だった。

『……。彼らは、ムーのテクノロジーを用いて造られている……。いや、ムーの技術そのものだ』

「……そうか」

ブライは逡巡する事無く、
心の内には怒りを持って。 そして、迷い無く答える。

「……なら、黒幕を叩き潰す。絶対にだ……!!」

孤高の戦士の行動理由は実に単純だ。

ファールレイン・ロックマンは舌打ちする。

彼のバイザーには、各WAXA支部からのデータが表示されていた。

「敵がドンドン増えているな……。キリが無い!!」

憂鬱そうに言いながら、彼はプラスターでグリーンマンを撃ち抜く。

どころから、まだまだ混沌は続きそつだ。

7 怪物とレインの苛立ちとブライの舌打ち

離島の刑務所。

二ホンの中でもトップクラスであり、情報が全くと言っていい程漏洩しないこの刑務所は、周囲の人間から奇怪な目を向けられている。それもその筈だ。

不気味すぎる外見に 霧に包まれた小さな島に、ポツンとある巨大な刑務所……怪しすぎる 一切の詳細が掴めない、不透明さ。

情報社会な現代において、正にこの刑務所は『異常』そのものだ。

実際、その認識は間違っていない。

…… 本当に奇怪で不気味で異常な刑務所なのだから。

この刑務所の地下、暗くく暗くく苦いこの場所に、嚴重にロックを掛けられた独房が何個か存在している。

この刑務所に勤めている警官達も地下に立ち入る事は禁じられており、独房に入っているのが誰なのか……というのは知らされていない。

知っているのは、上層部の更にその一部のみだ。

そして当然、独房に食べ物や水を届ける者は居る。

ただし、独房のロックは外さない。

不思議な事に、独房の扉の前に置いておき、その場から離れると……食べ物が消えた、食器だけがあるのだ。

警官達はこの光景に怯え、食料を置くとき全力疾走で上へと戻っていく。

上層部は何のつもりか知らないが、絶対に独房の扉は開けさせない。最も、それは警官達にとっても都合だった。

扉を開ければ、何が起こるか分からない。

しかし、勿論……そういった事を気に掛ける者も居る。

人間とはそういう物だ。

ダメと言われれば、禁じられた行為をしたくなる。開けるな、と言われれば開けたくなくなってしまふ。

そして、この男もそうだった。

……残念な事に、この男は新人だった。

更に残念な事に、この男はこの独房に関する『噂』を知らなかった。

一番残念なのは、この男が『独房』の扉を開けようとしている事だ。

ニヤニヤと、ニタニタと……人間にしか作れないような、意地汚い笑みを浮かべて彼は歩く。

カツ、カツとわざとらしく靴底を鳴らす彼の頭の中は、『不気味な独房』の事で一杯だ。

元々、この刑務所に来たのも怪しげな刑務所を知りたかったから……だ。

とにかく、彼は不透明な事を知りたがる人間だった。

だからこそ、起こってしまった。

こんな不幸な事が。

(ハハッ……上のヤツらに独房の扉を開けるな、なんて言われてる

けどよ……これで、ヤツらの命令に従うのは終わりだ。　この中に何かがあるかは知らないが、俺は知らせてもらっぞ！　中身を！！）
解除キーの役割を果たすポップアップを起動し、警官はハンターを扉に翳す。

扉が開いた時、上に居た者達は確かに絶叫を聞いた。

「あ、あああ……う、あああああああああああああああ
あああああッッッ！！！！！！」

骨を噛み砕くような、胸が悪くなる音を掻き消すように　男は絶叫する。

その場に残されたのは、鉄臭い骨だった。

一つの噂がある。

『独房』の中には、ハングリーという名の怪物が閉じ込められている……と。

アメリッパ、ニューヨーツ。

各国の戦闘部隊とグリーンマンが依然と戦う中、男は廃墟の中に居た。

目に隈を縁取った、不健康そうな男性だ。

彼はハンターを操作すると、満足げに笑ってみせる。

「あつた……フフッ、……ようやく見つけたぞ……。さて、迎撃部隊は『レプリカ』と戦っているようだな。このままでは面倒だからな。『アレ』を起動させるとしようか」

不敵に、そして狂々と笑いながら　男はその場に背を向ける。

ブラスターから赤一色の弾丸が発射され、グリーンマンの体が弾けた。

ネバネバした液体を、うんざりした様子でバリアで防ぎながら、ファールレイン・ロックマンは次の標的へと銃口を向ける。

辺りは酷い有様で、煙幕と閃光が飛び交っている。

戦争でもしているんじゃないか、という錯覚に陥るファールレイン・ロックマンだが、この時代の戦争はもっと酷い光景だと気付き、その考えを改める。

住民はバリアが剥がれた時に自力で逃げ出した者も居るようだが、まだ避難していない者も居る。

そういった者を逃がす人員も必要な為、必然的に対グリーンマンの人数が少なくなってしまうのだ。

数で言えば、あちら側の方が圧倒的である。

その事にファールレイン・ロックマンはイラつきながらも、ブラスターの引き金を引いた。遠く離れた場所に立っていたグリーンマンが液体をばら撒き、命を散らした。

そのグリーンマンと相対していた、アメロツパ人と思わしき電波人間はこちらにウィンクするのだが、ファールレイン・ロックマン自身は無視する。

アメロツパ人が電波変換出来ているのは、ニホンが開発したサテライトPGMとアシッドの記録のお陰だろう。

……理由は単純であった。

二つの理由が存在する。

その二つともが『イラつき』なのだが、『イラつき』の原因が違う。

一つはグリーンマンが殺しても殺しても沸いて出てくる事。
二つは 。

この光景が、自分の過去を思い出させるからだ。

ブライは冷静に、殺伐と、ラプラスブレードによる殺戮を繰り返す。
あまりの素早さにグリーンマン達は対処できず、絶叫しながら散っていった。

そうしながら、ブライは通信機越しの青年に問う。

「オイ、キサマ……。ムーの力が使われている、と言ったな。それについての詳しい情報はるか？」

『いや、無いよ。僕がこの情報を見つけたのは、ついさっきだからさ、一応、頑張ってみるけど……。情報を得られるかは分からないよ。』

「構わん」

『無茶言つね。……結構厳しいんだよ？ 一丁いつデータ得るのって』

「フン……キサマに比べれば、遙かにマシだ。俺を強引に連れて行ったキサマよりかはな」

時期は数時間前に遡る。

ブライはコスモウェーブを駆けていた。

勿論、コスモウェーブに入る為の資格は持っていない。

無理やりゲートを壊して侵入したのだ。

少しばかり、コスモウェーブに用事があった。

ディーラーのアジトの一つ、オービタルベース　そこに、ムーの遺産が残されているかもしれない。

そう、ブライはオービタルベースへ向かう為にコスモウェーブを必

要としている。
だが、。

『聞こえるかな？ ブライで良いよね？』

「ッ！？」

突如として、オービタルベースへ向かおうとしていたブライの耳に、そんな声が聞こえてきた。

通信をされている　つまり、こちらの情報を得られてしまっている。

警戒心を覚えるのは当然だろう。

『えーと……そうだなあ。　僕に協力してもらいたいんだ。』

「……大人しく言う事を聞くとでも思っているのか？　どこの誰かは知らないが、随分とご立派な頭を持っているみたいだな」

『　そうかい。　君は自分のやっている事が分からないみたいだね。　関係者以外は立ち入り禁止なコスモウエーブに入っている。』

その他にも、ニホンのサテラポリス隊員を攻撃したり……ね。

あ、まだあるね……コダマ小学校の壁を破壊したり、だとか。　いいのかい？……こちらとしては、捕まえてやってもいいんだよ？』

8 宇宙での喜劇と刑務所での笑み

一週間前。

F M星、最高刑務所。

立場的に、階級的に、そして人格的にそこに訪れるべきで無い者が、そこに居た。

若きF M王、ケフェウスだ。

罪人達の在り処であるこの場所に、王が訪れるべきでは無い。だというのに、ケフェウスはこの場所へやって来た。罪人達が苦しみ続ける、この場所へ。

ケフェウスの足が止まり、視線が一箇所に注がれる。

何重にも張られた、壁のような赤い電波。

電波生命体なら、絶対にこれを突破する事は出来ない。

そう、牢獄だ。

壁の向こう側に居るのは、紫色の電波体だった。

彼が呼吸する度に黒い瘴気が漏れ、彼の電波濃度の強さを語っている。

F M星の中でも三本指に入る程の重罪人、フェンリール。

フェンリールはケフェウスに気付いたのか、静かに顔を上げた。

『ケケツ、王族様がこんな底辺な場所に何の用だあ？……んんう？
冷やかしですかー？』

この厳しい環境の中でも、お気楽な姿勢を崩さないフェンリール。
ケフェウスは彼の言葉には答えず、自分の用件を口に出す。

『……協力してもらいたい、フェンリール』

『ヒヤツヒヤヒヤツハー！！！こりゃあ、面白エツ！面白
エゾ！あ？、王族さんよオ。犯罪者に泣き付くつてよお、プライ
ド捨ててんのかあー？んんう？第一よお、俺は天下のフェン
リール様だぜ。極悪犯罪者なんだぜえ？FM星人を五〇〇人食
殺した、凄まじい極悪人。ヒヤヒヤツ！そのオレサマが、平和
なんていう虫唾が走るようなモノに手を貸すと』

『協力してくれれば、余がオマエを……暫くの間だけ開放して
やる』

パチン、と話を聞くなりフェンリールは指を鳴らした。
それからブチブチと引き裂くような笑みを浮かべると、ゆっくりと立ち上がる。

赤い壁 絶対に破る事の出来ない、自分を閉じ込める封印へと近付いていく。

『いいねエ……いいじゃねえの。俺を頼るっつーコトは……侵略者がナニかかあ？』

『……侵略者の周波数は、FM星人やAM星人よりも遥かに強力。簡単に見分けが付く筈だろう……オマエが侵略者以外をデリートした場合は……分かっておるな？』

『ヒヒヤツ！ FMとAMよりも強力、ねエ……ひよっとしてヨ、MHだったりするの？』

『ッ！っ！』

『うっひゃー……分かりやすい反応アリガトよ。ーりゃあ、食い殺し甲斐があるな』

ケフェウスはその言葉を聞くと、僅かに溜息を漏らした。
フェンリールとはこういう電波体だ　殺しを快感と感ずるだけなら、まだマシだろう。

コイツは……殺した相手を腹の中に入れる。正に狂気の化身だ。

『さて、と。　んじゃあヨ……オレもここから出ますかね。　久々に外の世界に出れるぜエ……！』

『分かった。今開け　』

言い掛けたケフェウスを、フェンリールは片腕だけで制した。遅しく、紫色の電波を周囲に放つその腕で。

ケフェウスは眉を顰める。

次の瞬間、フェンリールは予想外の行動に出た。

バギー！　という凄まじい音に続き、赤色の壁に亀裂が入る。

ケフェウスが目丸くしながらフェンリールを見ると、彼はその腕だけで　突破不能な筈である、壁を攻撃していた。

『さっすがにかてエな……オラよお！！！！』

言うなり、フェンリールは口を大きく開けた。

『ん？……へえ、その様子だと、ビビッてるのを隠してるつもりだったのねエ……あア、ヴァツカじゃねえーの！？ どれだけ恐怖を隠そうが、恐怖つてのは絶対に出ちまうモンなんだぜ！ 隠せると思ってる方がおツかしいツツーのッ！』

それを聞くと、ケフェウスはガクガクする左腕を押さえながら、精一杯威厳を保ってこう言う。

『ここから出て、FM星の外に行け。……つまり、MH星人が現在も侵攻している、宇宙に行け』

『キヒヤヒヤッ！ 言われなくても行つてやるぜエ……ひっそしぶりのご馳走だ！……！』

FM星最強の部隊にして、FM王を守る最終ライン 『FM電波星団』の一人であり、FM防衛指揮冠であるカイオスは己の部下である『FM防衛団』と共に戦っていた。

凄まじい烈風が吹き荒れ、眩い閃光が霞め、必殺の光線が飛び交う中、カイオスはその実力を存分に振るう。

彼と相對するのは、MH星の一部隊だ。

コチラが掴んだ情報によれば、侵攻軍はMH星の各部隊によって構成されているらしい。

が、侵攻軍が一つのまとまりとして戦っているのではなく、一部隊が各々に戦っている感じだ。

カイオスは手元の『ウィットウエーブシューター』という名の、高ランク銃器を連続発射しながら叫ぶ。

『皆、防衛に集中しろ！ MH星の軍に特攻するのは他の者に任せておけばいい！ 僕たちは、防衛に集中するんだ！！！』

言いながら、カイオスは再び引き金を引いた。

光の尾を引きながら、流星のように黄色い閃光が飛ぶ。

閃光は途中で凄まじい爆発を引き起こし、MH星の軍を巻き込んでいく。

カイオス達はFM星に近付こうとするMH星の者を遠距離射撃で潰しており、今の所はMH側が現位置からコチラへ迫った事は無い。

遠距離射撃の弾幕を作りながら、カイオス達は慎重に敵の動きを見極める。

と、そこでカイオスは不自然な動きを捉えた。
MH星の部隊の者が、何やら一箇所に集まっているのだ。
訝しげにそれを見つめながら、カイオスは銃器を握り締める。

《……何だ……？ 集団で特攻してくるつもりか……？》

そう考えたカイオスは、ウォットウェーブシューターを構えて高らかに叫ぶ。

『全員、あの集団へ射撃するよ！！』

ミサイル音に匹敵する程の音が鳴り、一斉に閃光が尾を引いて飛ぶ。
確実に、集団に落ちる筈だ。

これで、あの集団はバラバラになる筈だ。

そう、その筈だった。

弾幕による煙幕が消えた後、集団はそこに居た。
確かにそこに居た。

だが、バラバラにもならず、そして傷一つも付けられていない。

彼ら全員は脇に退き、その中から一体の電波体が現れる。

『全く、部隊の隊長っていうのは良い仕事だよ。大してダメージの無い攻撃だって、こうして庇ってくれるんだから』

そこに居たのは、見知った顔だった。

約一年前、有能なFM星人としてしょっちゅう仕事に駆り出されていた者だった。

カイオスは、思わずその名を口にする。

『キグ、ナス……ッ!?!』

『おっ、分かってくれた?……姿が変わったから、気付いてもらえるかどうか心配だったよ』

確かに、キグナスの体は以前と違う。

形自体は以前と同じなのだが、体全体が白を混ぜたような薄紫色、そして首周りに青色の輪が浮遊している。

そしてまた、FM星付近で戦う者がいた。

名はギユプト　FM星の軍を束ねる軍師長であり、それと同時にFM星最強の部隊、『FM電波星団』の一員である彼は、全長三メートルを越す程の巨大な電波剣を振るい、MH星の軍と交戦を繰り返していった。

ギユプトの姿は、やや獣形をした猫背の人型。所々に黒とオレンジのアーマーが装着されており、そのアーマーが、炎のように動く、赤色の電波で構成された体を防御している。

そして、彼の握る剣　『ドレッドバトルブレード』は山を包む程の大きな火の如く、常に蠢いている。

彼ほどのレベルの者で無ければ扱えない、FM星の聖剣を振るいなから彼は叫ぶ。

『オラオラアッ！ とつとと本気を出してくれよ！！ これじゃあ、面白くねえぜ！』

残念な事に、彼は戦闘狂であつた。それも、戦闘狂の中の戦闘狂である。

ウォーロックと並んでFM星のやんちゃ者リストに入れられていたほどだ。相方のウォーロックがいなくなったので少し寂しいらしいが。

そして、戦闘狂である彼は自分と相対するMH星の者達が、本気を出していない事に気付いていた。

そして、同時に憤つてもいた。FM星侵攻には全力を出すクセに、何故自分には全力を出してくれないのか……、と。

更に、ギユプトはドレッドバトルブレードを振りながら叫んだ。

『何で本気を出さねえんだあ！？ ああ！？』

もはや脅し口調へと完全に変わってしまったギユプトの叫び声に、何やらMH星の者達はコソコソと語り出す。『何だろうか』(大分綺麗な口調に変えています。フィルターってやつですよ。はっはっは)と思つたギユプトは、こっそりと耳を傾ける事にした。

『(何だアレ……)』

『(何かコツチ睨んでるよ……ひいっ！？ こ、怖いよお！)』

『(え？ えっ？ FM星ってこの一年で大分変わったって聞いてたんだが……えっ、何？ あんなのまだ残ってたの……うわっ、怖え)』

『(やべえよ、マジやべえよ。怖すぎてしょんべん漏らしそうだし……うわっ、トイレどこだ!?)』

『(ここにある訳ねーだろ……つか、アレをどうにかしないとトイレ行けないどころか帰れねえよ……気付いたらデリートされてました、アハハハ。ってレベルだぜ……あれ……ひい、怖えええええ)』

『(マジでヤバイぜ。とつとつとここを突破しないとヤバイぜ。天国のバアちゃんがそう言ってるぜ。あ、そういえばバアちゃんの手料理美味しかったなあ……ぜ)』

『(あの剣何だよ!？ マジやべえ、ヤバすぎるだろ!？ なに？ 分析した結果じゃあ、あれは何の補助も無い素手で持つてるって……?、……もしかして、電波体なら誰でも出来るとかそういう事は OK、早速あれを奪って使ってみるぜ!)』

『(オイ、やめろ、オイ! カッコイイから使ってみるぜ! とか冗談でもやめろ! 押しつぶされるぞ! その前にアイツに殺される!……!)』

『(ああ、神よ……何故、嗚呼も恐ろしい怪物が……)』

『(なにあれこわい)』

ブチッ、とギユプトの中で何かが切れた。
顔に影を作ったまま、両手でドレッドバトルブレードを構える。
それから、跳躍。

『テメエエエらあああああッ！！ 真面目に戦えやあああああ
！！！！！！』

『ひひひひひひひひひッ！？ お、お許してくださいひひひひひひひひひッ！』

『今まで色んな星を侵略してきた罰がこれか……もつと良い事やつておくんだつたな……』

『神よ、万物の神よ……災厄を拭いたまえ……史上最悪の災厄と悪魔を、その手を持って拭いたまえ……！』

『うひょー、これでバアちゃんに会えるぜ……また、手料理食べさせてもらえるぜ……嬉しいぜ……』

『うは、剣だろつが素手だろつが撲殺確定』

『じよばばばばばばー……』

『汚ねえっ！ 漏らしやがった！』

叫び続けるMH星人と笑みを持って剣を振り下ろそうとするギユプト。

だが、ギユプトとMH星人達の間、不健康な青白い電撃が落ちる。

『 ツー!? 』

辛うじて剣を上空のウェーブロードに突き刺し、ギユプトはその動きを止める。

僅か一メートル先では、先程の電撃が火を焼くような鋭い音を立てていた。

思わず冷や汗を流すギユプトだったが、この電撃から放たれる周波数と、特徴に違和感を覚えた。

そして、思い起こされるのは。

『 ……嘘だろ 』

電撃のカーテンの向こうでは、MH星人達の歓声が上がっていた。恐らく、この電撃を放った人物は彼らの隊長なのだろう。だが、ギユプトにとってそれはどうでも良い事だった。

果たして、電撃の中を平然と進んできた隊長はこう言う。

『 ……久しぶりだな。まったく、お前は変わっていないな 』

死んだはずの存在。

かつては、『FM電波星団』の中でも最強と呼ばれた存在。

FM王の右腕と呼ばれるほどの実力者。

ギユプトは戸惑いと動揺と共に、MH星人達は歓喜と感動と共に、その名を叫ぶ。

『ジエミニ様ー!!!!』
『ジエ、ミニ ツ!?』

外宇宙のコスモウエーブ。

F M星に駆け付けようとするA M星人と、それを妨害するM H星人の戦いは続いていた。

やはり、M H星の優位は変わらない。

それを遠くから眺める二体の電波体は、それぞれの思いを抱きながら語る。

『ブルルル……そろそろ、オレ達も出たらどうなんだ!?』

『落ち着きなさい、オックス……。フフフ……。そう、焦る必要は無い……。お前だって、いつまでもここに居るつもりは無いだろう?』

『当たり前だ! 地球に行って、ウォーロックのヤツをギタギタに

してやる……クソッ！　アイツさえいなければ……ブルルルルッ
！！！！！！』

オックスは息巻くと、闘牛が威嚇するように、深く息を吐き出した。それを見ていたオヒユカスは呆れ混じりに、いつも通りの威圧を持った声で言う。

『……そう、そうだ。……私もお前も、目的がある。私の場合はジエミニとケフェウスへの復讐、お前の場合はウォーロックへの復讐……そう、互いにやる事がある。なら、ここは互いに協力し合い、慎重に行動するべきだ。MH星のヤツらには気の毒だな私達を再生させたというのに、裏切られてしまうのだからな。さあ、オックス……早く行動を開始しようじゃないか』

オービタルベース。

かつては『ディーラー』が使用し、世界に恐怖を与える中心源となつた、『キング財団』所有の人工衛星である。

そして、サテラポリスに全機能を停止され、宇宙空間に浮遊する事しか出来なくなったこの場所に　何故か、明かりが灯っていた。

灯りの源はメテオGの様子を映し出していた、大型モニターである。ハンターV.Gを通し、モニターを操作する白コートの男か女かも分からない人物は、黙々とデータ解析を行う。

そして、『complete』の文字と共に画面が切り替わり、見るだけで頭痛がするような文字がズラッと並んだ。

そして、その中で最も目立っているのが。

『Corvus』、『Virgo』、『restoration』
という三つの単語だった。

離島の刑務所。

その中でも特に暗く、狂い場所に、彼は居た。

サソリ座のFM星人、スカーグ。

闇に潜む彼は、ひっそりとした笑みを浮かべていた。

『……ハングリー、か。』 『ヤツの正体』 が世間に知れ渡った場合、
どうなるのだろうか……？ 面白そうだが、絶対に無い事なので諦
めよう。 代わりに……。 ジャック……。 コーヴアスをウィザードと
して従えていたお前の活躍、見せてもらおうぞ。』

とある事情で刑務所の中にいるスカーグは、ひたすら闇に潜む。

9 刑務所でのゴツチャゴツチャ、ニューヨークでの異常

トーマスの言葉に、ブライは押し黙る。

確かに、トーマスが言っている事に間違いは無い。

しかし、いくらなんでも、無茶苦茶過ぎでは無いだろうか。

『お、黙ったって事は……君は自分のやった事を自覚しているみたいだね。よかった、君にもまだ更正出来るチャンスは おっと、無駄話じゃなくて用件を話さないと。……じゃあ、単刀直入に言うよ？ 今から僕が言う場所に来てくれ。話があるんだ。』

「…………断ったらどうするつもりだ？」

『分かってるよね？ 僕は君の周波数データを手に入れている。つまり、そのデータを使って君に対する一撃必殺な電波を流してやってもいいんだ』

そして、今に至る。
スカイウェーブでの出来事を思い出しながらも、ブライは的確にグリーンマンを潰していく。

かつてはサテラポリスニホン本部から必死に勧誘された、というだけはある実力だ。

あのロックマンと渡り合う、と言われても違和感を感じない。

離島の刑務所。

午前四時半、リアルウェーブの防壁によって作られた部屋の中で、自然とジャックは目を覚ましていた。

真っ白な囚人服はくちやくちやになっており、ジャックの寝相がいかに悪いのかを物語っている。

ジャックが起きた理由は『物音』だ。

人権保護が行き過ぎたこの世界、刑務所は人権保護団体に弾圧され、その影響で囚人達の生活も大分楽な物へと変わっている。

その為、午前四時半という早い時間に起きる事は無い筈なのだが

。

外から聞こえる騒々しい物音によって、ジャックは自然と目覚めていた。

ポツリポツリと聞こえる言葉から読み取れるのは、「看守の一人が消えた」、「囚人が数人消えた」という事である。

暫く、寝起き特有の朦朧とした感覚に身を任せていたが、独房の前で足音が止まったのを確認してジャックは眠い瞼を覚醒させる。

それとほぼ同時に、独房の扉が小さく二回ノックされた。

そして、独房の扉を開けるポップアップが認証され、自動的に扉が開く。

通路からコチラを睨む看守は、こう言った。

「……クインティアが消えた。」

ファールレイン・ロックマンはバイザーに表示されたデータを暫く読んだ後、眉を顰^{ひそ}めた。
先程から周波数に異常を感じていたのだが、データで確認してみると確かにその違和感は映し出されていた。

周波数環境に異常が起きている。

ウェーブロードやファールレイン・ロックマンの周波数だけでなく、リアルウェーブの周波数までもが異常を起こしている。

リアルウェーブは周波数を少ししか持たない。

その少量の周波数に異常が起こるのは、あまり無い事なのだ。

明らかな異常にファールレイン・ロックマンは警戒を続けていたのだが、次の瞬間、更なる異変が起きる。

体に響くような音と共に、地面から何かが構成されていく。

全長五〇メートル。赤紫色。状態は安定しておらず、常にガガガツ、とノイズでも走っているような動きを見せる。そして、半透明。

このような特徴を持ったいくつかのタワーが出現し、それと同時にグリーンマンがネバネバした液体をばら撒いて潰れていく。

バイザーに表示されるデータの異常値が、タワーの出現と同時に大幅に跳ね上がった。

そして、タワーが出現したのと同時に、……ここら一帯の電波環境が、確実におかしくなった。

朝食の時間がやって来た。

混乱する頭を無理やり収め、ジャックは列の中に加わった。

数個の列となり、囚人達は食堂へ向かうようになっていた。

一人でも怪しい動きを見せた者がいれば……問答無用で、その者は処罰を受ける。

最も、先程も言った通り、人権保護が進んでいるのでそこまで酷い物では無いが。

二人組みの看守が扉にハンターを掲げ、キー解除のポップアップを読み込ませる。

ポップアップが認証され、扉が空中に溶けて消えていく。

それを確認すると、看守は囚人の列を連れて食堂の中へと入ってい

った。

勿論、囚人達はその後に付いて行く。

指定された席に座ったジャックは、食事開始の合図を待つ。決められた時刻になると、アラーム音のような物が鳴るのだ。それが食事開始の合図である。

テーブルの上に並べられた料理は非常に質素な物で、人権過保護なこの時代からは外れている気もする。

と、そんな事をジャックが考えている内に喧やかましいアラーム音が鳴った。

一斉に囚人達が食事に手を付け始める。

勿論、ジャックも食事に手を伸ばしていた。食パンを千切ると、スープの中に浸す。それを口に持って行こうとしたのだが、。

「オイ、お前……ジャックだろ？」

言葉に、ジャックは口まで持って行きかけた手を止めた。そして顔を上げる。

見れば、目の前の男が笑みを浮かべてこちらを見つめていた。

通常、刑務所では私語は禁止だ。

だというのに、この刑務所では会話が可能となっている。別に、この刑務所だけが会話可能な訳では無い。

この時代では、全ての刑務所が人権保護団体の影響を受け、会話が可能となっているのだ。

「……ああ、そうだが」

「そつかそつか。……お前の姉、クインティアとかいったか？ 良
い女だよな」

その言葉に少々ムカツとしながら、ジャックは口の中にパンを放り
込んだ。

同時に、冷たく言い放つ。

「残念だったな。 姉ちゃんには、既に恋人がいるんだよ」

……正確には、今まで居た、だが。

ジャックの言葉に、男はゲラゲラ笑いながら答えた。

「ハハツ、勘違いさせちまったみたいだな。 別にお前の姉に気が
ある訳じゃあ無えよ。……お前の姉、消えたんだろ？」

最後の一言だけ小さく告げた男の言葉に、ジャックの背筋が凍った。
そうだ。

姉が消えた。

看守からそれを聞いた時、実感が沸かなかった物だ。
しかし、混乱はした。

そんな訳の分からないゴツチャゴツチャな感覚を抱えていたのだが、
今ここで、ようやく姉が消えた事が現実だと認められ、そして

ゴチャゴチャだった感情が一つにまとまった。

「……看守達が大騒ぎしたせいで、俺はかなりの朝っぱらに起きちゃまってよ。……で、そこで聞いたんだよ。お前の姉を含めた、色んな奴が消えた……、つてのをな。そして、更に分かった事があるぜ。……消えたのは囚人だけじゃない」

「、ッ？」

「看守も、消えてるんだよ。昨日の夜にな」

そして、次の言葉によってジャックの動きは完全に止まる事となる。

「骨だけ残して、な。お前の姉も、そうなってるかもしれないぜ？」

グリーンマンが一齐に消えた。

そして、代わりに半透明な赤紫色のタワーが出現した。

目まぐるしく変わる状況に、混乱している暇は無い。

今も、戦いは続いているのだから。

冷や汗を掻きながらも、ファールレイン・ロックマンはブラスターを構え、電波の調子を整える。

あのタワーのせいで自分の周波数も狂い始めているが、一々そんな事を気にしているだけの余裕も無い。

背中に小型のバーニアを展開し、驚異的な速度でファールレイン・ロックマンは前に飛び出した。

コンマの世界に踏み込む程の高速移動をしながら、ファールレイン・ロックマンは自身の解析能力を用いて周囲の電波環境、タワーの情報等を探る。

サテライトサーバーに常時アクセスしているお陰で解析能力もかなりの物となっているが、やはり未知の事態への対応は難しい。

と、そこでバイザーの端に何かが映った。

確か、あれはリアルウェーブで作られていた建物の瓦礫だ。

瓦礫も当然、リアルウェーブな訳だが……。

そこで、ハッとファールレイン・ロックマンは気付く。

あのタワーが出現した時から、電波環境に異常が起きた。

そして、リアルウェーブの周波数にも、確かに異常が起こっていた。

つまり、あのタワーがリアルウェーブに作用し、リアルウェー

ブが動いてしまっているのだ。

コチラヘミサイルのように突っ込んできた瓦礫をブラスターで撃ち抜くと、ファールレイン・ロックマンは真っ直ぐにタワーを直指す。

とにかく、あのタワーを潰す以外、道は無い。

10 本格始動（前書き）

【アルティメット・ウィザード計画】

『サテライトサーバー』には様々なデータが収容されている。あらゆる電波人間・電波体の戦闘データ、バトルカードはもちろん、違法データまで収容されている。

そこで、『サテライトサーバー』内に収容されている膨大なデータを使い、『究極のウィザード』を作ろうとしたのだが、ウィザードの体に搭載するには容量が大きすぎた為、計画は凍結された。

なお、この計画のデータはWAXAアメリッパ本部内に残っている。

同時刻、WAXA日本支部内に混乱が広がっていた。

モニター画面に表示された赤文字の羅列、WAXA内に響くサイレンの音、そして、。

「こ、これは　！？」

「……どうやら、サテライトサーバーに異常が起きたみたいだ」

隊員の言葉に対し、長官は苦々しく答える。

異常事態だった。

WAXA日本支部の一部が崩れ、上空へと吸収されていく。

次々と崩れていくWAXA日本支部だが、原因が分からない為、対策の仕様が無い。

「アメリッパのWAXA本部は、ニューヨークの騒動に巻き込まれたせいで、ほぼ壊滅状態だ。……本部に頼る事は出来ないだろう」

「……、」

その言葉に、隊員は唇を小さく噛んだ。わなわなと震える腕を抑え、隊員は上空を見上げる。

天井は浮遊しており、徐々に上へ上へと向かい始めている。

「しかし、」

長官はそう切り出す。

「まだ諦めるのは早い……。あの少年が見せてくれた『奇跡』の

ように、諦めなければ必ず勝機は見えてくるはずだ！ 行くぞ、何としてでもこの事態を解決してみせる！」

全世界に混乱が広がる中、宇宙空間には歪な形をした人工衛星が浮遊していた。

ガラクタを集めて作った……そんな印象を受けてしまうような外見をしている。

『キサマ……ッ！』

人工衛星内のモニターには、一体の電波体が映し出されていた。どうやら、遠方からの通信を受け取ったらしい。

ハンターV Gを操作する金髪の男はそちらへは目を向けず、冷たい口調でこう言い放った。

「騒ぐなよ、AM三賢者。あなた達から通信が送られてくる事は想定済み。つまり、あなた達が何をしようとも、その対策は出ているという事だ」

『……何をするつもりだ……！？』

「そうだな、ドラゴン・スカイ……。簡単に言ってしまうと、『サテライト・レオ』、『サテライト・ペガサス』、『サテライト・ドラゴン』の『再作成』だ」

『なつ　！？　いや、そんなはずは……サテライトの部品、データは地上へ降ろし、WAXA施設内へ収容されている。サテライトの作り方はお前にも教えていない。なら、再作成は不可能なはずだぞ』

「ああ、そうさ。だが、『遠隔操作』をすればサテライトの『欠片』を拾い出す事は出来るだろう？……私はその装置を作る事に成功した。サテライトサーバーをハッキングし、全て手中に収める装置だ。それを使えば、サテライトサーバーを操作し、WAXA施設内にある『サテライトの欠片』を宇宙空間へ持って来る事が出来る。元々、サテライトサーバーはサテライトの主要コンピュータだったんだ。機能を少しいじくれば、元の状態に戻せる」

『何が目的だ？』

ペガサス・マジックの言葉に、金髪の男性はハンターV.Gを操作する腕を止めた。

それから、ゆっくりと口を開く。

「……私は絶望した。世界の可能性に対して、絶望してしまったんだ」

『……変わったな』

『昔のお前はどこに行ったのだ？　我々と共にサテライトを作成した、地球の科学者・クエーツよ』

10 本格始動（後書き）

ちよつとだけ連載再開です。

11 激闘と屈辱

そしてまた、ブライもWAXAと同じような動きを見せていた。やはり、あのタワーに乱れの原因があると考えたのである。

片手にはラプラスブレードを、片手にはムーキューブを装着し、ブライは地面を蹴る。

それだけで数メートルもの距離を進み、途中途中で、襲い来るリアルウエーブを粉碎していった。

異常な戦闘スペックにも驚くが、それよりも その状況判断能力が恐ろしい。

ほとんど一瞬でタワーに原因があると考え、おまけに襲い来るリアルウエーブに対しての最も効率が良い戦法を弾き出す。

そして、弾き出した答えを何のズレも無く、忠実にこなしているのだ。

WAXAが作り出した、アシッドやレイニーといった高性能ウィザード並か、それ以上の解析・判断能力である。

純粹に、ブライは強い。

改めて、通信機越しのトーマスはそれを認識した。

凄まじい音を立て、砲撃が連続してタワーに降り注ぐ。
ファールレイン・ロックマンを含めた、ニューヨーク防衛部隊の攻
撃だ。

攻撃を受ける度に、タワーは欠陥していく。
それも、凄い勢いでだ。

流石はエース達、といった所か。

だが、タワー側の動きが何も無い、というのが不気味ではある。

力を試されているような気さえする。

ゴトツ、と分厚い本を落とすでもしたかのような、鈍い音が鳴った。最も、この時代では本どころか、紙媒体すらほとんど使われていないが。

あるはぐれウィザードが倒れた事により、鈍い音が鳴った。

彼はかつて、メテオG事件の際に、ノイズによって暴走したヒールウィザードだ。

一度でも暴走してしまったウィザードは、サテラポリスに目を付けられる。

それだけならまだ良いのだが、『持ち主にすら見捨てられる』という事すら起きてしまうのだ。

このヒールウィザードは暴走した事により、持ち主に捨てられてしまったウィザードなのだ。

歪む視界。

ノイズウェーブへと繋がる入り口が見える。

『ク、ソ……こ、こまで……か……』

データの断片である紫色の粒子が、徐々にヒールウィザードの体から空中へと消えていく。ダメージが酷すぎるのだ。

このヒールウィザードは戦闘目的で作成された物では無い。つまり、一度持ち主に捨てられてしまうと、ウイルスや他のウィザードに対して身を守る術が無くなってしまふのだ。

そして、その結果が、今の姿である。

『チ、クシヨウ……』

今あるのは、自分を捨てた持ち主に対する思い出のみ。捨てられた
とはいえ、やはり未練は断ち切れないのだ。
視界が暗闇に包まれていく。次々と蘇る記憶データに溺れていく。
そして、。

『が、アあああああああああッ!!!!!!!!!!』

絶叫がその場に響いた。

ヒールウィザードの中に、赤い球体が入っていく。

「……………これで三〇体目ですねー」

そして、物陰からその様子を見る者が一人。

12 孤高の戦士は凶星を突かれると怒る

空を灰色の雲が覆う中、NYでの交戦は続いていた。

赤紫色の奇妙なタワーが複数個出現すると同時に、辺りのリアルウェーブが突如として爆発・暴走を開始した。

これらから推測出来る事は、『あのタワーは周囲の電波環境を歪ませる』……という事。

タワーが現れたと同時にグリーンマン達が消えたという事は、グリーンマンは電波で構成された生物だったという事。そして、グリーンマンを構成する電波は非常に脆かったという事だ。

「レイニー、サテライトサーバーへアクセスしてくれ」

『……分かった。アクセスを開始する』

ファールレイン・ロックマンはブラスターを握り締め、警戒を続ける。

レイニーがサテライトサーバーにアクセスすれば、後は簡単に決着が付く筈だ。

しかし、

『ガッ　ぐあああああああッ!?!?』

「!?!?　レイニー、どうした!?!?」

突然、レイニーが叫び声を上げ、ファールレイン・ロックマンにも僅かに痛みが走る。

慌ててバイザーを確認すると、そこに表示されていたのは『ERR ROR』という文字。

ファールレイン・ロックマンは思わず舌打ちしたが、頭の中には動揺が広がっていた。

(どういう事だ……？ サテライトサーバー自体の『反応』が無
いなんておかしいぞ……)

つまり、レイニーがサテライトサーバーにアクセスしたら、『サ
テライトサーバーはありません』という結果と共に、激痛が走った
のだ。

この異常な電波環境だ。こんなバグが起こっても不思議では無い。
そう思い、ファールレイン・ロックマンは呟く。

「……どちらにせよ、やる事は変わらない。行くぞ！」

ファールレイン・ロックマンは知る由も無いが、あの結果はバグ
などでは無く、真実だ。

かつては『サテライト』を作り上げた程の科学者・クエーツが製
作した装置により、サテライトサーバーが乗っ取られ、WAXAの
施設すらも無くなるうとしているのだ。

多数の危機が世界中を襲っているのだ。

電波環境の異常によって襲い掛かってくるリアルウェーブ。そ
れらをブラスターで撃ち抜きながら、ファールレイン・ロックマン
は大きく加速して前進していく。

目指す先は、あの赤紫色のタワー。この騒動を治める事。それが
今回のサテラポリスの目的でもあり、レイニーが目指す目的にも繋が
るのだ。

ファールレイン・ロックマンは足を止めた。

目の前には巨大なタワーが聳え立っている。

ノイズが走ったかのような、不安定な揺らめきを繰り返している、

赤紫色のタワーだ。

未だにレイニーのダメージは癒えない。その分、ファールレイン・ロクマンの動きも鈍るが、それは些細な問題だ。サテラポリスのエースである彼は、その程度では止まらない。

ブラスターを構え、深く息を吸う。そして。

「シグマレーザー!!」

WAXA特製の『ノイズPGM』 『ノイズキャンセラー』のデータを使い、更に性能を向上させたノイズ対策PGMだ。を使い、辺りのノイズを一点に集中させ、それを極太のレーザーとして発射する。

赤紫色のタワーが出現した事により、辺りの電波環境が恐ろしく変動した。電波が多ければ多いほど、ノイズも多い。電波環境の変動により、ノイズも大量発生しているのだ。それらを集め、レーザーを放つ。かなりのダメージを与える事は間違いない。

「傷が付いている……なるほど。やはり、この塔は特殊な電磁波と電波で構成されているようだ」

ファールレイン・ロクマンはエネルギーを通信へと集中させ、何とか通信を安定させる。電波環境が乱れた事によって通信が不安定となり、他の隊員との連絡が今まで途絶えていたのだ。

そして、ファールレイン・ロクマンはこう告げた。

「あのタワーは特殊な電波や電磁波で構成されているようです。ノイズによる攻撃が最も効果的だと判明しました」

『ガガッ……了、解……し、た……ガガッ』

やはり、まだ通信は安定していないようだ。音声にノイズが走っている。

通信を切ると、ファールレイン・ロックマンはブラスターを強く握った。

これで、他の隊員達もタワーへの攻撃を開始するはずだ。

ノイズを一点に集中させ、ファールレイン・ロックマンは深く呼吸する。

『……オゼル。タワーの下の方を狙うと効率良く攻撃が行えるぞ』
「分かった」

痛みを堪え、レイニーが伝える。

ファールレイン・ロックマンとしてはレイニーの心配をしているのだが、今は任務中 私情を挟んではならない。なので、ファールレイン・ロックマンとレイニーの会話は少ない。

狙いを定め、ブラスターを構える。

そして、シグマレーザーが発射された。

『どうやら、あのタワーは電磁波と電波で構成されているみたいだね。ノイズを使えば簡単に攻撃できるよ』

サテラポリスの通信電波を盗み聞きしたトーマスが言う。ブライは淡々とした作業のような動きでリアルウェーブを粉碎しながら、トーマスの声に耳を傾けていた。

「そうか。……なら、話は簡単だ」

ブライはノイズの力を入れた。それでも『ヤツ』には敵わなかったが、電波人間の平均的な強さと比べると、ノイズを手に入れたブライの強さは恐ろしい数値を弾き出しているのだ。

『ムーは高度な文明を持っていた。となると、最大の敵はノイズだ。だってそうだろう？ 電波に頼りっぱなしのムーにとって、ノイズは天敵だ。だけど、流石はムーだね……ノイズを制御する特殊なシステムを作り上げたようだね。天敵を己の力とする……この逆転の発想こそが、ムーの強さなのかもしれない』

「チツ……どこまでムーの事を知っている……」

『歴史とか考古学に興味があつてね。一時期はムーの研究もしていたんだよ』

「フン……集中しろ」

『キミが質問してきたんだろ』

「黙れ」

『大体孤高とか、いわゆる『勝ち組』に対するただの負け惜しみな気がするんだけど、その辺りどうなんだろうね？』

「黙れ……！」

いよいよブライの口調が殺意を帯びてきたので黙るトーマス。そして、手元のハンターにこう打ち込んだ。

『観察記録：ブライは凶星を突かれると殺意を抱くほどに怒る』

……と。

『ダ……』
ターゲット
「……目的地に到着だ」

ラプラスの言葉に反応したブライが言うと、そこにあつたのは赤紫色のタワーだ。ノイズが走ったかのような不安定な揺れを、一秒ごとに行っている。

『……確か、そのラプラスって生命体……。ムーの破壊兵器だったか。一見電波生命体にも見えるが、正確には、電波生命体じゃない……。だから電波変換不可能なんだっけか。そして、ラプラスの機能の一つには』

「……ノイズを操る機能がある。……この機能を覚醒させ、俺自身の中に取り込むまでにかなり時間が掛かったがな」

『なるほど。ラプラスのノイズ制御機能は、持ち主が取り込む事も出来るのか』

「……いや、違う。……ラプラスにはいくつか破壊兵器としての機能がある。そして、それらの機能はムーが滅びたと同時に、情報漏れを防ぐ為に自動的に封印された。……それもラプラスの機能の一つだ。俺がムーの遺跡の一つを訪れた時、突然石碑からこのラプラスが出て来てな。どうやら、『ムーの血』に反応して目覚めるような仕掛けが施されていたらしい。情報や技術の漏洩を防ぐ為なのだから当たり前だな。……だが、ラプラスの機能のいくつかは封印されたままだ。それらを解き放つ為に必要なのが『ムーメタル』」

『なるほどねー。……キミは既にいくつかの「ムーメタル」を見

つけていて、それでラプラスの機能のいくつかの封印を解除している訳だ。そして、その一つがノイズ制御機能であり、ラプラスの持ち主に自動的にそれが取り込まれると』

「それも違うな。……自動的に取り込まれるのでは無い。ディーラーという組織は知っているな……？ 俺は以前、奴らのアジトに忍び込んだのだが……その時に、大量のノイズを浴びてしまった。電波障害も役に立たなかった。そこでラプラスと俺の周波数が乱された。……どうやら、そのせいで俺にもノイズ制御機能が伝染^{うつ}たらしい」

『多分それは、ブライが常にラプラスを所持しているからだろうねー。キミとラプラスはノイズによって周波数を乱された。常にお互いがお互いに触れているのだから、その乱れによって一瞬だけ周波数が完全に合致した……』という事も有り得る。その合致によって、ラプラスとキミのデータがお互いに一瞬だけやり取りされた……その一瞬のデータのやり取りによって、ラプラスのノイズ制御機能がブライに流れ込んだんだろうさ』

「……フン。とにかく、このタワーの破壊に集中しろ」

『……キミも話にノッてたくせに……これだから孤高の戦士（笑）は……』

13 気持の悪い仮面

宇宙。

そこに、大量のガラクタを集めて作ったような、奇妙な人工衛星があった。

WAXAニホン支部の建物に使われている『サテライト・ペガサス』の材料を集めているのだ。

イメージとしては、大量の物体が宙に浮き、この人工衛星まで飛んでくる……といった感じだ。

「『サテライト・ペガサス』を地上に下ろし、解体して、その材料をWAXAの建物に使う……それは勝手だが、持ち主である私に返してもらわなければ困る」

『クエーツ、もう一度聞く。お前の目的は何だ？ 我々と共に『三つのサテライト』を作った時のお前の目は、もっと輝いていた……お前に何があったのだ』

「……私の目的の一部を教えてやる。地球上に存在するサテライトの欠片を宇宙空間に集め、巨大な人工衛星を作り上げる。要するに、『三つのサテライト』が一つに合わさるのだ。そして、私の『最終目的』に到達する為の手順。それが、『アカシックレコード』への接続だ」

『なっ ……！？』

『まさか……！？』

ペガサス・マジックとレオ・キングダムの叫び声に、金髪の科学者・クエーツは頷いてみせる。

青白い顔に涙みは無く、あるのは不気味さだ。

「 そうだ。『アカシックレコード』に接続し、『あの電波体』を引きずり出す。それによって引き起こされる『改革』こそが、私の最終目的だ」

それは恐ろしい意味を含んだ言葉だった。

そう、下手をすれば、宇宙のバランスそのものが崩れてしまいかねないほどの、だ。

「さあ、もうすぐで『サテライト・ペガサス』が復活するぞ……」

一週間前。

MH星の侵攻は依然と続いている。

『FM電波星団』の登場によって少しは巻き返したが、それでも劣勢なのは変わらない。

そこに、

『ギャツハー！ フェンリール様のお通りだ！』

FM星最大の犯罪者・フェンリールが現れた。

FM星人を五〇〇以上殺し、その全部を腹の中に入れて……という、イカれたFM星人だ。

FM星最高の牢獄に閉じ込められていたフェンリールだが、ケフ

エンリールが一分で喰らったMH星人は、約二〇〇。MH星の部隊二〇個ほどの人数を喰ったのだ。

『ジエ、ミニ！?』

『FM電波星団』の一員でもあり、FM軍師長でもある赤き電波体・ギユプトは目を見開いた。

彼と相對するのは、既に死んだはずの電波体だった。

『久しいな、ギユプト』

『何でアンタがここにいる　ッ!』

ジエミニは溜息を付く。

かつての部下を睨み付け、こう告げた。

『残念だったな、オレはまだ死んでいない。いや、「復活」したというべきか。宇宙を漂っていた所がある男によって復元させられ、MH星に協力させられている。どうやら、そいつは今からコーヴァスやヴァルゴも復元させようとしているらしいな。だが、そこは大して重要では無い　今重要なのは、このオレが「宇宙の覇者」となる権利を再び得た事！　そして、お前がここで死ぬという事だ、軍師長よ!』

瞬間、ズバアッ!!　という音と共に、不健康そうな色をした青白い雷撃が放たれた。

ギユプトは咄嗟はつとに近くのMH星人の首根くびねっこを掴み、電撃の前に放り出す。

『えっ、ちょ　　アあああああああああ！？』

哀れなMH星人。上司の電撃に打たれ、粒子となって消えていく。デリートされてしまったようだ。

ジェミニは表情を変えず、淡々と告げる。

『オレの部下を身代わりに使うとは……どうなっても知らんぞ。だが、その咄嗟の判断は流石だ、軍師長。オレの部下だっただけある』

『テ、メエ　　！』

悲しいが、FM王の右腕と軍師長ではかなりの実力差がある。

FM星の炎の聖剣を手にしているギユプトを、電撃だけで冷や汗を掻かせるほどのジェミニ。　　これだけで、実力差が分かるだろう。

『言うておくが、復元されたと同時にオレは『改造強化』を施されている。つまり、　　昔よりも更に強くなっているという事だ』

言うと同時に、オレンジ色の雷撃がギユプトへと真っ直ぐに放たれた。

『クソッ！　　不意打ちかよ！』

叫ぶが、もたもたしてられない。炎の聖剣を振り上げ、電撃を斬ろうとする。

だが、

『……バカめ。まるで成長していないな』

いきなりオレンジの電撃が折れ曲がり、聖剣の軌道から外れる。そして、カーブしてギユプトへと突き刺さった。

『ガアあああああああああああッ！！！！！！』

絶叫し、ロケットのような勢いで吹き飛ばすギユプト。更に追い討ちを掛けるべく、ジェミニは赤い電撃を生成する。

それを放とうとするジェミニだが、彼の前に複数の電波生命体が立ちはだかった。

『……FM軍の連中か。懐かしいな。お前たちもギユプトの下で働かされて可哀想だ』

『……黙れ。裏切り者に何が分かるッ！俺たちとギユプトさんの間には、確かな『絆』があるんだッ！お前如きにそれを邪魔されて堪るか！』

それを聞いたジェミニは苛ただしげに首を振る。

『チツ。……あのバカなFM王は随分と変わったようだな。そんな甘ったれな星にはウンザリだ！』

『黙れクソツタレが！その気持ち悪い仮面、ぶった斬ってやる』！

ジェミニが叫んだと同時に、それにギユプトが叫び返し、いきなりジェミニの目の前に現れた。

炎の聖剣を何とか電撃の剣で受け止め、ジェミニは舌打ちする。

会話をするギュプトとジェミニだが、今はそんな場合では無い。
お互いに慌てて離れると、フェンリールの暴走に巻き込まれない
ように周波数変換をしようとする。

そして、そこでジェミニは高らかに叫んだ。

『バカなMH星人共よ！ 「上」にこう伝えておけ！ 私は地球
に行く！ お前たちには付き合ってもらえないとな！』

叫び、ジェミニは黄色い閃光となって宇宙の彼方へ消えていく。
残されたMH星人は啞然とし、動きを止めた。そして、可哀想な
事に次々とフェンリールの餌食になっていくのであった。

13 気持ちの悪い仮面（後書き）

ジエミニ汚いな、さすがジエミニ汚い。

14 地獄の底からやって来た者

F M艦長でもあり、『F M電波星団』でもあるスロートは片腕をバスターに変え、宇宙空間で戦っていた。

自分が得意とする艦隊戦は出来ない。M H星の野朗共が戦艦の置いてある倉庫を封鎖してしまったからだ。

ドぎついピンク色の体を動かし、スロートはバスターを近くのM H星人の脳天に撃ち込んでやる。凄まじく酷い光景と共に、M H星人は消滅した。

『チツ、こいつら強いわね！ あたしの力を見せ付ける所かしらッ！』

ドオウム！ という砲撃音と共に、M H星人が一気に五体まとめて吹き飛ぶ。

スロートは歓喜の表情を浮かべ、舌なめずりをしてみせた。

『この感覚こそ最高ッ！ 砲撃音とその反動、そして相手が華麗に吹き飛ぶ姿 これこそ破壊の美学よッ！ そおら、どンドン行くわよ！ 死ねイッ！』

流石はF M艦長。ただの変態だ。破壊魔だ。

そうしている間にも、砲撃音と同時に爽快にM H星人の脳天が撃ち抜かれていく。まるで、シューティングゲームの達人のプレイ動画を見ているような感じだ。快感すら感じる。

部下達もそれに負けず、精一杯バスターやソードで戦うのだが、

流石に上司であるスロートの変態的破壊には敵わないようだ。

『ぶっひやはははッ！ もっとマシなのはいないのオ！？ そ
おら、吹き飛ばし飛ばしッ！』

だめだ、このひとの あたまは こわれているらしい。

『るっせえよクソ女ア！ 調子こいてんじゃねえぞ！』

『テムエこそ調子に乗ってんじゃねえぞ侵略者めがッ！ ほらよ、
あたしの攻撃を食らって脳味噌でもバラ撒いてろ！ ぶっひやひや
ひや！』

反論しようとするMH星人。だが、それよりも先に砲撃が飛んだ。
爽快にMH星人の頭が粉々になる。……このエリアは放っておい
てもスロートが何とかしてしまっただろう。

『FM電波星団』の一員でもあり、FM防衛指揮冠でもあるカイ
オスは、驚きのあまり静止していた。

どういふ事だ、こいつは死んだはずだ……？ と。

『フフフ、どうやら驚いてくれたみたいだね。そうさ、僕は「復
活」したのさ！』

『キ、グナス……！』

そこに居たのは、淡い紫色をしたキグナスだ。

周波数反応もかなり変わっており、恐らく今のキグナスは自分達と同格かそれ以上だ。FM王・ケフェウスなら何とか拮抗できる、というレベルの強さを持っている。

それ故に、カイオスは戦慄してしまう。

『何でお前がここにいるッ!』

『それには色々と事情があつてねー。まあ、その色々な事情のおかげでMH星の幹部になった訳だけだ』

カイオスは齒軋りする。このままではキグナスに勝てない。自分の部下までもが巻き込まれ、大量に命を落としてしまうだろう。

『さあ、とつとと死んでもらうよ! 僕の目的は君たちへの復讐なんだから!』

翼を大きく広げ、エネルギーを放とうとするキグナス。

紫色の閃光が放たれ、カイオスの反応が遅れる。

だが、

ガキン!!! という鋭い音と共に、紫色の閃光が消滅した。

カイオスは目を見開く。

そこに居たのは、

『すまない。……遅れてしまった』

『チツ、FM王か!!!』

キグナスの叫んだ通りだった。

そこに居たのは、FM星最強の聖剣・『FMフォースブレイド』

エウスが居た場所を綺麗に通っている。
そして、ケフェウスは見る。その場に現れた、新たな人影を。

『ステ、ロ　！？』

『久しいな、ケフェウス』

黒に近い青で構成された電波の体。白と金を基調としたアーマー。
赤い目。片手に握った黒い剣。

ケフェウスにとって見覚えのある人物だった。

ステロと呼ばれた新たな電波体はニヤリと笑みを浮かべると、片手に持った剣を掲げながらこう告げた。

『　　忌々しき我が弟よ。オマエをデリートする為に、地獄の底から来てやったぞ』

15 無慈悲な戦いの合図

ケフェウスは代々FM王を担ってきた家系に産まれた。

当時のFM星の政治は混沌としており、野望、陰謀、思想、暴力、抹殺といったマイナスの要素で満たされていた。

ケフェウスがこの世に生を授かった数日後、彼の父親は死亡。更にその数日後に母親、一つ上の兄も死亡した。

多くの者は現FM王室と対立関係にある者の仕業だと考えたが、証拠は無い為、表向きの死因は不明とされた。

さて、これでFM王家に残された者は、まだ赤子であるケフェウスと、長男であるステロだけだ。

ステロは必然的にFM王になり、まだ幼いというのに、FM星の政治の中に渦巻く『マイナスの要素』と向き合わなくてはならなくなった。

そういった『マイナスの要素』はFM王であるステロだけでなく、ケフェウスにも押し掛かった。

ステロとケフェウスは互いに信頼し、協力し合うが、それ以外には頼れる者も、助けてくれる者も居なかった。

唯一の救いは、孤独では無いという事か。

だが、『マイナスの要素』は一切の容赦をしない。
相手が子供だろうと、一切躊躇わない。

親が政治を行う様子を見てきたステロは多少なりとも、『マイナスの要素』に対抗する術を知っている。つまり、権力を手中に収めたい者達には騙されないのだ。

だが、ケフェウスは違う。親が政治を行う様子も見ておらず、そしてあまりにも幼い故に人を簡単に信用する。

これらの要素を並べた権力者達は、『ステロを抹殺し、ケフェウスをFM王とすれば、ケフェウスを介してこの星を自在に動かせる』と考えた。

そして、彼らはその考えを基に行動した。
つまり、ステロと彼を守る者を消し去ったのだ。

彼らはソレを非常に巧くやった為、またもや真相は闇の中に包まれた。

こうしてFM王にはケフェウスが就任した。
その後は、ご存知の通りだ。

家族は彼一人だった。
本物の両親は物心が付く前に死んでおり、親代わりであった人物は常に自分達へ殺意、憎悪を向けていた為、家族とは呼べない存在だったのだから。

その『唯一の家族』が、自分へ刃を向けている。

死んだはずの彼が目の前に居るといふ事実よりも、そちらの方が衝撃的だった。

その赤い瞳には、かつて自分へと向けられていた愛情は一切無い。
あるのは、ただ一つ。

ある時は自分の玉座を奪おうとし、ある時は自分を利用しようとした政治家達のような、憎悪と殺意だった。

『な、ぜ』

ようやく出た声は擦れていた。

FM第一王子 いや、『元』FM第一王子は、僅かに首を動かすと、口を開いた。

『オレが何故生きているか不思議なのか？ 簡単な事さ。愚弟よ、貴様を殺す^{データ}する為、オレは生き返った。……心配はするな。具体的な説明はしてやるう メテオGについては知っているだろう？ あのノイズの塊には、死んだ電波生命体などの残留電波も含まれていた』

冷徹な態度で言うステロの表情は、感情を映し出してはいない。

『メテオGの爆破によって、そのようなデータは宇宙全土に散らばった。MH星人共はそれらを回収し、片っ端から復元しているという訳さ。ここまで言えば分かるだろう？ オレはMH星人の手によって復活した。そう……貴様を殺す為にな』

『……そういう事を聞いているのでは無い』

静かに沈着に、ケフェウスはそう呟いた。

その言葉に籠っているのは、圧倒的な絶望だ。

ステロは怪訝な顔つきをしたが、大人しくケフェウスの言葉を待

つ事にしたようだ。

「……何故、兄上が余に刃を向ける？ 兄上は」

「お前の味方だった。……ああ、その通りだ。だが、オレはお前のせいで死んだ！ それほどの事があつたというのに、お前を憎むなという方が間違っている！ 政治家たちに疎まれ、憎まれたオレは奴らの手によって死んだ。そう、お前を政治家達の傀儡とする為の策略によって！ だが、今のお前はオレと違って、星の民たちと共にある！ 何故、オレにはそのような未来が訪れなかったのだ？ オレとお前は同じだろう！ 何が違うというのだ！ お前がオレの権利を全て奪った！ 未来を奪った！ オレは復讐をする愚弟だけでなく、オレの存在を全否定したFM星そのものに対してだ！」

高らかに叫び、ステロは電波で構成された剣を振り上げた。
それが、無慈悲な戦いの合図となった。

16 兄弟・師弟対決

蒼き剣が振り上げられ、巻き込まれたウェーブロードが粒子となつて消滅する。

ステロの身体は既にその場からは消えており、そちらに気を取られていたケフェウスは、剣から放たれた衝撃波への対処が遅れてしまった。

が、幼くとも、ケフェウスは星を総べる王だ。
政治的頭脳はもちろん、戦闘的センスも高い。

『ぐツ……！』

ギリギリの所で、ケフェウスは『FMフォースブレイド』を目の前に構え、衝撃波と拮抗する。

だが、忘れてはならない。

衝撃波を放ったステロ自身は、既に行動を起こしているのだ。

『まだまだだな、愚弟よツ！！ 戦闘において、あらゆる方面から攻撃が同時に襲い来る可能性を考慮しておくのは当然だろーが！』

！！！！

叫び声と共に、ケフェウスのすぐ隣に実体化するステロ。

恐らく、周囲の電波環境と自身の周波数を完全に同化させる事で、インビジブルのような状態になっていたのだろう。

目を見開くケフェウス。

が、ステロは既に行動している。

そして、ケフェウスは衝撃波に対する防御に全ての力を注いでし

まっっており、兄に対する攻撃には対処できない。

『消えろ、偽の王よ！！！！』

高らかに宣言し、右腕をバスターに変化させる。

無論、その狙いは自身の弟に向かっている。

ゴオオツ！！ という音と共に、周囲の電波環境を丸ごと変動させるほどの高威力を持った弾丸が射出される。

それは、正確にケフェウスの身体へと吸い込まれるはずだ。だが、そうはいかなかった。

鋼と鋼が衝突するような、耳障りな音が轟く。

弾丸が、打ち落とされた。

その答えに辿り着いたステロは瞬時に視線を移動させる。

そして、捉えた。

『FM電波星団』の一人、FM防衛指揮冠を。

『残念ですが、偽の王はアナタよりも人望があるようですね！』

淡い水色の電波で構成された体。

その手に握られているのは、『ウィットウエーブシューター』。

相手が元FM王室の一員である為か、一応は敬語を使うカイオス。

どうやら、カイオスは『ウィットウエーブシューター』の黄色の

弾丸によって、ステロが放った青色の弾丸を迎撃したようだ。

ステロはカイオスに言葉に反応し、思わずMH星人の軍勢へと目をやった。

『……流石だな』

呆れ気味に呟くステロ。

そこにあつたのは、紫色の光を先頭として、地球の方角に向かって流星となつて消えていくMH星人の軍勢だ。

圧倒的に不利な状況。

だというのに、カイオスの顔には、小さな笑みが浮かんでいた。

そう、満足げな笑みが。

そして、同時刻。

地球に向かって飛来する流星は、更にもう一つ増えた。

そう、『食波狂』であるフェンリールだ。

ギユプトと相対していた軍勢を喰らい尽くしたフェンリールは、ジエミニ達が逃亡したという地球に興味が沸き、ケフェウスとの契約を破つて地球に向かって逃避行してしまったのである。

『ゲヒヤヒヤヒヤハ

ッ!!!!!!!!!!!!!!』

実に楽しげな、それでいて狂々とした笑い声が響き渡る。

『クソッ!!! ジェミニだけではなく、フェンリールまで!!!
地球との友好関係に亀裂が走るぞ!!!』

軍師長である赤き電波体、ギユプトの絶叫が響き渡る。
その顔に浮かぶのは、焦燥だ。

『ギユプト様、それよりも大変な事態が　!』

『なんだよ、言ってみろ!　大した事じゃなかったら殺すぞ!』

どうやらこの軍師長、『殺す』が口癖になっているらしい。

仮にも『FM電波星団』の一員なのだから、これはいただけない。

『　FM王室の一員、ステロ様が現れ、現在ケフェウス様と交戦しております!』

『ボサツとしないでもらいたい、愚兄よ!!!』

『、ッ！』

弟の叫び声に反応し、全力で周波数を調整し、その場から離れようとするステロ。

殆ど本能的な回避行動なのだが、それが仇となった。

『先程兄上が言った言葉だ。　あらゆる方面から攻撃が同時に来る可能性を考慮せよ、と』

皮肉げに言うケフェウス。

そして、ステロは直後にその意味を身をもって知る事となる。

『が、ッ　　オあああああああああああああああああああああ
!?!』

ステロの絶叫。

原因は『複数方向からの攻撃』だ。

ケフェウスは初めに『FMフォースブレイド』を振る事で衝撃波を発生させ、それをステロに向かって射出した。

ステロの本能はそれを察知し、反射的に周波数を調整する事で攻撃を回避しようとしたのだが　その進行方向に、カイオスを初めとした軍勢が数百という数の弾丸の雨を降らせた。

結果として、待ち伏せ攻撃のような状態になってしまい、ステロはまんまと攻撃を喰らったのだ。

『兄上よ。これが今のFM星の姿だ。　余はこれに誇りを持っている。たとえ兄上であろうと、この星を侮辱する事は許さない』

雨の中心で、自身の体から電波情報が込められた粒子をばら撒くステロ。

シユパツ!!! と、炎が渦を巻き、内側から外側へと炸裂した。次の瞬間には膨大な炎は消え去っており、全身から電波情報が入った粒子が漏れ出す、満身創痕のステロが片手に剣を構え、無防備に立っていた。

が、その構えは明らかに戦闘態勢のそれであり、いつでも迎撃・攻撃できるという事を意味していた。

『なるほど。ケフェウス、オマエの真価は頭脳でも、技術でも、戦闘でもない。その人望だという事か。「きずな」とは良く言ったものだな。地球人の栄光は大きかったようだ。なあ、ケフェウス?』

『何が言いたい、兄上?』

ケフェウスのトラウマの一つにもなっている『きずな』の件を持ち出し、皮肉げに呟くステロ。

対し、ケフェウスはいつでも攻撃できるように『FMフォースブレイド』を慎重に構える。

凄まじい殺気と憎悪が渦を巻き、辺りに負の周波数を撒き散らす。

『別に。何でも無いさ』

『ツツ!!!! ケフェウス!!!!!!』

ステロの叫びと、ギユプトの絶叫。

二つの周波数が、同時にその数値を周囲に同調させ、座標移動を果たす。

ステロの剣がケフェウスの喉元に迫ると同時に、ギユプトがケフェウスの斜め上の虚空に出現する。

剣が突き出されるよりも前に、ギユプトの足がケフェウスを突き飛ばした。

『素晴らしい自己犠牲の精神だ。道徳のテストなら満点を取れるぞ』

皮肉を吐き出し、そのままの勢いでギユプトの目を貫くステロ。絶叫が、迸った。

凄まじい量の電波情報を撒き散らしながら、膝から崩れ落ちるギユプト。

その体に蹴りを入れ、立ち上がる力を完全に奪うと、ステロはギリリとケフェウスを睨んだ。

凄まじい迫力だ。彼が満身創痍であるという事実を忘れてしまうような程である。

『次はお前だ、愚弟よ。オレはここに今、革命を宣言する』

『裏切り者の癖に革命とは、中々面白い冗談を言いますね！』

カイオスの叫び声と共に、『ウィットウエーブシユーター』を初めとした遠距離攻撃が、多数飛んだ。

が、ケフェウスは目を剥く。

『まずい。 皆の者、伏せろ！！！！』

『 遅い。ケフェウス、やはりオマエは指導者失格だよ』

弾丸がステロの半径六メートル以内に入った瞬間、青色の閃光がステロを取り囲むようにして出現し、弾丸を正確に打ち消していく。だが、その量が圧倒的だ。

弾丸を相殺しながら進んでいるというのに、まったく減っているように見えない。

そして、無差別的な閃光の攻撃は勿論、カイオス達をも巻き込む。

ズドンッ！！！！！ と、あまりの衝撃に、宇宙空間が振動したような錯覚を覚えてしまうほどだった。

ステロはまったく表情を変えず、倒れ伏すFM星の者達を眺めた。

『……………流石だな』

『昔、……………地球人の少年が、……………『諦めない事の大切さ』を教えてください、くれたのだ……………兄上、貴方にはこれが分かるか……………？』

満身創痍だというのに、縊るように『FMフォースブレイド』を構えてケフェウスが立ち上がった。

その顔には、小さな笑みが。その瞳には、燃えるような決意が浮かんでいた。

『 ああ、知っているとも。ロックマンに教えられなくとも、遙か前から知っていた。だからこそ、オレはここにいます。ここに立ち、こうして剣を握っているのだ。愚弟よ、オマエはいつも答えに辿り着くのが遅い。今のオマエですら、今のオレにとっては既に通過した場所だ。……………そしてオレは今、更にその前を見ている。愚弟よ、考える。そして感じる』

ケフェウスとステロは、暫しの間無言で向き合った。

そして、ケフェウスが『FMフォースブレイド』を振り上げたのを合図として、ステロが動いた。

周波数を爆発的に変化させ、ケフェウスの前へと瞬時に移動する。

そして、 今度こそ、ケフェウスの胸をその剣が貫いた。

『……流石だよ。流石はオレの弟だ』

ステロは肩に突き刺さった『FMフォースブレイド』を抜き取り、
そう言った。

最後の力を振り絞り、ステロに剣を力を突き刺したのだろう。

『諦めない事の大切さ』。

そんなもの、既に通過している。

そう、そんなもの、何の意味もなかった。

そんなものは、オレを助けてはくれなかった……！！！！

『どこかで聞いているのだろうか？』

自分を復元させた『男』へと、ステロは告げる。

『MH星の者共に伝える。オレは今からFM星人だ。オマエらとの交渉は決裂。オレはFM星を制圧し、玉座を手に入れる』

三日後。宣言通り、ステロの圧倒的な力により、FM星の防衛線は壊滅。ステロが玉座を手に入れ、恐怖政治が始まる事となった。

そう、FM星は、以前までの状態に戻ってしまったのだ。
疑心と憎悪に取り憑かれた星へと。

電波生命体が居住する事の出来る惑星が集まる区域、通称『電波星域』。

そこには、地球製の宇宙船がいくつか浮かんでいた。

その内の一つ　十字型のような形をした、『きずな?』という名の宇宙船の中は、騒乱に包まれていた。

そんな騒乱の中で、一体の電波生命体が目を覚ます。

おぼろげだった意識が時間の経過と共に次第に確立されていく様子を感じ取りながら、その電波体は静かに呟いた。

『こ、こは……?』

『目が覚めたか、ケフェウス』

特殊な周波数を持った電波　恐らく、電波生命体の周波数を活性化させる事で治癒を促す為のモノだろう　が満たされたカプセルの中で浮遊しながら、ケフェウスはハッキリとその声を認識した。少しばかり不安定な視界を外へと向けてみれば、青色の球体が浮遊していた。球体が放つ淡い青色の光はどこか暖かい印象を受ける。声は、その球体から発せられていた。

『ペガサス、か。……　!?　余はFM星を守る為に戦っていたはずだ!　戦場は、どうなったのだ!?』

『落ち着け。あまり声を荒げるな、お前の傷はまだ完治していない。あの場で唯一意識のあった軍師長・ギユプトが地球の宇宙船に連絡を入れ、お前を初めとした負傷者を救出した。戦況についてだが……残念だが、お前の兄がFM星の玉座を奪ってしまった』

『どういう、事だ……？』

『お前の兄はFM星に攻め入ると、まずはFM星内の犯罪者や過激派組織、反政府組織に協力を呼びかけた。そうした上で、反抗する民衆や政治家を全て打ち倒し、牢獄に放り込んだ。独裁者という奴だな。今の状況は侵略と独裁が合わさっているのだから最悪だ。AM星がMH星の軍勢をなんとか回避してFM星の増援に行った時には、既にステロを中心とした恐怖政治が始まっていた。ステロをリーダーとしたFM星は現在、AM星とMH星を同時に相手取って戦っている。……お前の兄は、『電波星域』の支配者にでもなるつもりなのかもしれないな。三つ巴の争いになった結果、戦力がそれほど高くないAM星は甚大な被害を被った。AM星の多くの民は現在、この宇宙船に保護してもらっている状況だ』

やたらと長つたらしい状況説明だが、これはAM三賢者としての癖なのだろう。

ケフェウスはその説明を噛み砕いて理解すると、静かに呟いた。

『行かなければ……』

『やめろ、ケフェウス。AM三賢者として忠告する。今の状況は最悪だ。お前一人が動いた所で何一つ解決しない。この私ですら、凄まじい負傷を負い、そのせいで今ここにいるのだ。ケフェウス、自責の念を抱いているのはお前だけではない。私も含めて、たくさんいるだろう。だが、我々が今するべきなのは『休養』だ。負傷者が戦場に出ても余計に混乱を広げるだけなのだから』

ぐっ、とケフェウスは歯を食い縛った。

ペガサスの言う事はもつともだ。

今の自分は無力であり、戦場に行っても役立たずにしかならないだろう。

ケフェウスが自分の意見を呑み込んだのを見ると、ペガサスは更にこう付け加えた。

『今のお前に言うのは非常に申し訳無いのだが……更に悪い事が四つある。一つ目はジェミニの証言なのだが、どうやらコーヴァスとヴァルゴの『復元』が地球の犯罪者によつて進められているらしい。二つ目は、オックスやオヒュカスといった『裏切り者』がMH星側に付いている事。三つ目は、地球で何かが起こっているらしく、地球との通信が切断されてしまう。凄まじい量の妨害電磁波のせいだ。……かつての我々の仲間である、あのクエーツが首謀者のようだ。先程、奴と対話してきた。奴は我々から何らかのデータを抜き取ると、我々を宇宙へと放り出してしまった。そのせいで奴が何を企んでいるのかまでは掴めなかった。奴のせいで、FM星とAM星だけで事態に対処するハメになってしまった。四つ目は、フェンリールが地球へと向かった。私の傷も、フェンリールによる物だ』

そして、同時刻の地球へと舞台は移る。

ニューヨークでの惨劇は未だに決着が付かない。

だが、ノイズによるタワー破壊作戦は順調に進んでいた。

全体のタワー数が二四五個なのに対し、サテラポリスやライトポリスなどといった『ニューヨーク防衛共闘戦線』側は既に四〇個の破壊を成功させていた。

だが、リアルウェーブなどによる攻撃が激しく、思ったよりも上手く作戦が進んでいないのが悩み所だろう。

その状況を受けて、壊滅状態に陥ったWAXAニューヨーツ支部の下に、様々な人員が結集していた。

研究グループやライトポリスの部署など、サテライトサーバーを奪われ、更にタワーによる電波妨害を受けた事で弱体化したニューヨーツ支部の機能を回復させ、それによってこの事件に対する戦力を上げようという考えだ。

そんなWAXAニューヨーツ支部の一室 地下五三階に存在する、『新技術研究』という部門が実験用に使っている部屋だ。

そこに、複数の科学者が勢揃いしていた。

その内の一人、赤レンガのような色をした髪をボサボサに生やした二〇代後半の若い男が、凄まじい量のエアディスプレイと向き合っていた。

室内に居る全ての科学者の目が彼に注がれているが、彼はそれを気にする素振りをまったく見せない。

恐らく、極度の集中状態 『ゾーン』に突入しているのだろう。

彼はエアディスプレイを凄まじい勢いで操作しながら、ぶつぶつと呟いていた。

「……サテライトサーバーの復旧不可能。……タワーによる電磁波妨害、取り外し可能。手動で操作しない限り、このエアディスプレイですら妨害を受ける可能性あり……」

彼はそこでふっ、と顔を上げると、ニューヨーツ支部の最高責任者である長官へと目をやった。

そして、こつ言つたのだ。

「おい、お前。そうそう、そこのお前だよ。長官だろ？ なら、この支部の全システムがどうなってるか、っていう書類ぐらい持つてるんじゃないのか？ いいからそれくれよ」

「ま、待て。 どうするつもりだ？」

「決まってるだろ？ この支部のシステムを全てデリートし、一から再構築するのさ。分かったら持つて来い」

その言葉に目を見開く長官。

男が放った言葉はどうやら、凄まじい威力を持っていたようだ。

「そ、そんな事したら……」

「タワーに対するプロテクトが消えて、支部がやられるって？ 安心しろよ、攻撃が入る前に再構築してやる。システムデリートとシステム再構成の間には、僅かなロスタイムしか発生させねえよ。いいか、これは戦争だ。マニュアル通りの思考や戦法じゃやられちまう。考えを一新しろ」

暫く呆気にとられていた長官だったが、男が凄まじい目をしてい
る事に気付き、半ば圧される感じでその場に背を向けた。

この施設のシステムデータが全て記されている書類。 それを
持つてくる為に。

（国に対して仕掛けたハッキング攻撃などの犯罪行為により、S
級犯罪者に指定されたほどであり、その反面、技術者としては地球
一を争うほどの男・フレンベルグか……。噂には聞いていたが、こ
こまでとは……正直、彼の集中力と技術は人間のモノではない……。

）
長官はS級犯罪者でもあり、地球内でも有数の実力者である男・
フレンベルグの凄まじさに、思わず生唾を呑み込んだ。
そして、同時にこう思う。

だが。

何にせよ、長官としての私の仕事は変わらない。

この国を、そして民衆を守り抜く。

いかなる手段を使っても、必ず。

「す、すごい……！……！」

「まさか本当にやり遂げてみせるとは……！」

WAXA・ニューヨーク支部。

モニターに目を向けるフレンベルグの背へと、憧憬と驚愕の視線が注がれていた。

彼は面倒臭そうに手を止める。 驚いた事に、施設内の全システムが復旧していた。

フレンベルグは一度、支部のシステムを全て破壊し、その上でタワーからの特殊な電磁波による障害を取り除く為、システムに特殊なプログラムを組み込み、それだけでなく、システム全体の修繕と改善と機能向上を果たした後で システムを修復してみせた。

その間、僅か三分。

フレンベルグはその壮拳を誇るどころか、面倒そうな表情をしている。

彼は眠そうな目をしていたが、何かを思い立ったのか、自分の懐からハンターV.Gを複数個取り出し、それらを一斉に操作する。

そして、その内の一台の通信を”ある場所”に繋げた。 こう言った。

「聞こえているんだろう、クエーツ博士？」

『……君か。……我が弟子よ』

「なっ ……！？」

いきなりWAXAニューヨーク支部のコンピュータから聞こえてきた声に、その場に居た者達は吃驚した。

何せ 数年間も失踪している、あのサテライト設計者である男が不意打ち気味に登場したのだ。誰でも驚くだろう。

世界最高の科学者であり、技術者においても高ランクに位置するクエーツという男の声が支部の中に響き渡る。

『なるほど。……君からの通信シグナルを分析してみたが……素晴らしい。WAXAニューヨーク支部のシステムを改善し、それを用いて私の居場所を割り出したのか……いつから、私がニューヨーク騒動の元凶だと気付いていた？』

「大分前からだ。確証は持てなかったがな。……さて、言い訳を聞こうか、俺の師よ」

フレンベルグの言葉に、クエーツは暫く押し黙った。

沈黙の間、部屋の中に緊張の糸が張り巡らされる。

ただし、フレンベルグだけは例外だ。

偉大なる科学者であり、そして同時に極悪犯罪者である恩師との対話だというのに、まったく緊張の色を見せない。

『……私は、この世界が好きだ。好きで好きで堪らない』

「博士、大学時代の俺に『物事は分かり易く、それでいて簡潔に言うべきだ』と教えたのは貴方なのだが？ 今の言動はバカそのものぞぞ」

『それと同時に、私はキミに『人の話は黙って聞け』とも教えたはずだぞ？ 私はこの世界を、大きな実験場だと捉えている。だからこそ、……私は世界に絶望した。今の科学界は宇宙の大部分を

解き明かしてしまっている。科学というのは未知を探求するものだ。未知が減ってしまつては、魅力が大きく減退してしまう。だから私

は、人類を試す事にした。世界の大部分が解き明かされてしまったのならば、次は解き明かす側にあつた人類を解き明かそうと思つた訳だ』

「……それで、人類の可能性を試す為にサテライトの作成に協力したと？」

『いいや、あれは純粹な好奇心の下で行つたものだ。だが、数年後の私はそれにも絶望した。サテライトによつて莫大な科学力を与えられたというのに、人類はそれを使いこなせていない。人類の可能性は極微だ。という訳で、これは最終実験だ。宇宙の可能性と人類の可能性、その両方を実験する』

「宇宙を滅ぼすとも？」

『その通りだ。このグリーンマン・シルバーマンは実験の第一段階に過ぎない。……私は、この宇宙を滅ぼす』

最後の一言を強調して言うクエーツ 直後、ブツリと音を立てて通信が切断された。

フレンベルグは冷徹な調子を崩さずにハンターのキーを叩くが、暫くするとお手上げだ、とでも言うように手を止めた。

「くそっ、流石はサテライト設計者……コチラ側から仕掛けた、通信掌握プログラムを丸ごと解除してやがる。予想はしていたが、やはり俺に対する褒め言葉は皮肉だった訳か。つくづく嫌な博士だ」

ぶつぶつと呟くフレンベルグ。
と、その時だった。

フレンベルグが向き合っている巨大なモニターに『受信』という文字が躍り出る その直後、画面に眼鏡を掛けた一七歳ぐらいの少年が表示された。

「最小院だ。アメリカ全土の電波治安を守っているライトポ

リス。……その内部に存在する情報課の中でも、かなりの名を上げているようだ」

フレンベルグに対し、長官が耳打ちした。

『やーやー、皆さんドウモー！ 最小院マルカクさんのご登場ですぞー！ という訳で、皆さんにお知らせです！ アメロツパ政府から直々に我々ライトポリスへと、『例の兵器』を使用するようにという旨の情報が来ました！ という訳で人工衛星の使用許可とサポート願いますー！ あ、我々ライトポリスも『WB』と呼ばれる特殊部隊をニューヨークに送る予定なのでよろしくですー！』

ライトポリス内の部隊・『ASR』。
アメリッパ全土の防衛を目的とした組織の一つであり、主に直接的防衛　つまり、邀撃をする事を命としている。

だが、それはもはや昔の話だ。

榮譽を重ねることに『ASR』の地位は向上し、今ではかつて存在した州警察に軍的な戦力をプラスしたような存在と化している。
ライトポリスが司るのは、あくまで『電波を用いた犯罪・テロへの対応』であつて、それ以外は管轄外だ。だが、この『ASR』に限っては、電波以外の領域　犯罪者の要撃なども行っている。

今ではもう、ライトポリスの本体は『ASR』であると言っても過言ではない。

そんな『ASR』へと、一つの命令ミッシェンが下された。

それは、『ASR』本来の姿を思い出させるモノだった。

そう　電磁波で構成されたタワーを撃破し、ニューヨークを防御せよ。

というものが今回の任務の詳細だ。

未曾有の事態への対応をしなくてはならない。

『ASR』に突きつけられたのは、晦渋ではなく、むしろその逆の素朴な問題だった。

ただし、素朴ではあつても簡単ではない。

素朴かつ難解。

外觀的には、矛盾した二つの要素を抱えた問題と捉えられる。

だが、事実はずう。

難解であればあるほど、『ASR』の戦力は増長していく。それ

こそが彼らの精神性。『障害が大きければ大きいほど燃え上がる』、
という青春ドラマさながらの根性を見せ付けてくれる。

ニューヨーク内に存在する施設の中で、『ASR』のメンバーは
慌しく動き回っていた。

つい先ほど、WAXAとの通信が復旧し、命令とその概要を説明
されたばかりだ。

彼らはその『任務』に向けて、着々と準備を進める。

数々のデータやアイコンが表示されたモニターと向き合いながら、
ライトポリスの情報課のエースたる最小院マルカクはむむむむむ…
…と唸る。

近くには『ASR』一の技術者であるマーバスが立っている。
両者とも一〇代にして『凄腕』と称される人物だ。

マーバス オーストリア系の顔立ち。鼻に掛かるほどの髪は青
色に染められており、アーモンド形の碧眼は証明を受けてガラス玉
のように光り輝く。スラッとした長身で、長足だ。鼻は高く、大昔
の日本人が見たら『天狗じゃ！ 天狗じゃ！！』と騒ぎ始めそうで
ある。全体的に、『気高き鷹』といった風情だ。

最小院マルカク 日本系の顔立ち。前髪は二つに分けられてお
り、後ろ髪は肩に掛かるほど長い。艶を持った黒髪だ。肌は白い。
マーバスと比べると低身長…：…というか、同年代の日本人と比べて
も低い。鋭角的な眼鏡を掛けており、その奥にある茶色い瞳は知的
好奇心によって爛々と輝いている。だがそれでいて、どこか知性に
よる『落ち着き』の色を帯びてもいた。全体的に、『賢き鼻^{フクロ鼻}』とい
った風情だ。

二人とも服装はスーツの上に白衣という出で立ちで、白衣は皺くちゃである。

マーバスは画面の中に何かを見つけたようで、声を弾ませてこう言った。

「……おお！ やったよマルカク君！ 『電磁装甲』の稼働率が合格レベルに達したみたいだ。使用者と装甲の間で交わされるシンクロ率は……やっぱり、難しいみたいだね。何でだろう？」

やたらと親しげなマーバスの口調。それに対し、マルカクが落ち着きを持った声で応える。

「んー、私が思うには、電波人間と違って電波そのものと人間が直結する訳ですから、シンクロし難いんじゃないんですかね？」

「確かに、そうなのかもね」

電磁装甲。

二〇〇年前の世界で、とある兵器の実現が試されていた。そこそが、電磁装甲。戦車に対する攻撃を電磁シールドで防ぐ……というモノだ。

その兵器の実現へのチャレンジは、やはり現在の電波技術社会成立への架け橋の一つであった。電磁装甲の実現はかなり難航したが、

その途上で多くの新電波技術を生み出したのだ。

そして、現在。

電波人間を人間の手で再現する、という企画が持ち上がった。

『Project T-C』もその一つ。

だが、企画の実現手段はそれだけではなかった。

アメロツパのライトポリスは、かつての戦争に使用された電磁装甲に目を付け、そこからアイディアを得た。つまり、『リアルウェーブ』によって電波人間の外装^{アイマー}を作り上げ、それを人間に装備させてみてはどうだろうか？』、と。

そして、実現したのが電磁装甲だ。

名前と原理こそは戦車のガードマンとして使用された兵器と共にするが、その用途と形状は全くの別物である。

ピピッ、とモニターが『着信音』を告げた。

差出人はアメロツパ政府。そこに記されていた文章を読んだマーバスは、こう告げた。

「WAXAからの人工衛星サポートを確認。『電波^{ラッシュ}猟犬』の使用を決定。ライトポリスも即座にサポート体勢へと移れ、つてさ。いやあ、僕はワクワクしてきたよマルカク君！ キミはどうだい？」

「ええ、私もですよ。アメロツパ政府が密かに開発し、電波として分解して宇宙空間に保管していた秘密兵器だなんて……これぞ男のロマンって感じですね！」

ニユーヨーツ上空。

そこには、空母がそのまま宙へと飛んだような、恐ろしく巨大なサイズの飛行物があつた。その質量を飛ばすだけの浮力をどうやって作り出しているのかが不思議なのだが、その飛行物の腹に取り付けられた無数の機械を見れば、納得が行く。

円筒形の小さな機械が無数に並んでおり、それらからは磁力が放たれているのだ。その磁力とウェーブロードの放つ電磁波を作用させ合う事で反発力を起こし、飛んでいるのだろう。

そして、その飛行物のありとあらゆる方向に取り付けられた小さな扉のようなモノが一斉に開き、まるで蜂の巣のような外観になつた。

飛行物の内部、曇天と接する扉の前へと立つ、一人の少年が居た。彼は高所恐怖症とは正反対の位置にいるのだろう。これほどの高さだというのに、扉から下界を見下ろしても一切怯む様子を見せない。

だが、異常なのはそこではない。

この一六歳ほどの少年を異常たらしめている物。

それは、

少年の体を覆う、赤と黒の混じったリアルウェーブの装甲だ。
電磁装甲。

人型のアーマーはゴツゴツとしており、聳える山を連想させられる。だがそれでいて、体のラインはシュッと引き締まっていた。相反する要素が入り混じっている。

少年は眼下を見下ろすと、こう呟いた。

「こちら、コード15。隊員名はノータル。これより、ASRの公的任務を開始。『ニューヨーク共闘戦線』の一員となり、タワーの邀撃を目指す。！」

歯車のような音を立てて、少年・ノータルの背にあったパーツが持ち上がり、一對の翼と化す。その翼から電波の噴射が行われ、ウエアブロードとの反発力を利用して浮遊する。そして、ボッシュ!!! と音を立てて、ノータルの体が宙へと踊り出た。

宇宙空間。

『新生サテライト』の中に座するクエーツは、変わらぬ無機質な無表情を徹底していた。

「……地球の者達よ、いかにしてこの危機を乗り越えるかな？」

ぼつり、と。

静寂を保つ人工衛星の中で呟かれた言葉は、虚空へと消え去る。

21 電磁波制御技術

ニユーヨーツ。

電磁波タワーによる周波数の乱れは依然と続いており、人類に対する『挑戦』をその身を以って示す。

赤紫色のタワーの樹海。

その中に展開される、『ニユーヨーツ共闘戦線』は苦戦を強いられていた。

ノイズによる攻撃が有効だと判明した所で、タワーによる周波数の乱れは止まらないのだ。

破壊的な動きを見せるリアルウェーブの物質をブラスターで撃ち抜きながら、ファールレインロックマンは強き光を宿した双眸でタワーを見据える。

距離は大体、三〇〇メートルほど。

周波数変換を用いれば一瞬で越えられる距離だが、周波数が乱されている今の状況でそんな事をすれば、バラバラになってしまうかもしれない。

ならば、話は簡単だ。

背中に取り付けられたブラスターのエネルギーを爆発的に放出し、ファールレインロックマンの体が前方へと射出される。

『サテライトPGM』によって周波数強化を施されている為、移動の反動で自滅するという可能性も無い。

従って、彼の移動速度は亜音速程にもなる。

爆音を撒き散らしながら、ファールレインロックマンは手に握ったブラスター・バラストバスターを電磁波のタワーへと向け、ノイズの弾丸を、ガトリング砲のような勢いで連射した。

電磁波が揺らぐ、消える、断片データである粒子となる。
ファールレインロックマンは、周波数の乱れによって生じる僅かな頭痛へは一切の注意を向けず、ただひたすら、軍人のように冷徹と武器による掃射を行う。

『ターゲット 標的の損傷パーセンテージ、98……もうすぐだぞ、オゼ
ル』

「了解した。一気にケリを、ッ!？」

目を剥くファールレインロックマン。

それもそのはずだ。消え掛かっていたタワーがぐにやぐにやと歪んだかと思うと、次の瞬間には曇天の一点に向かって、掃除機に吸い上げられる塵のように『収束』を開始した。

他のタワーにも同じ現象が起きているようで、方々から赤紫色の嵐のようなモノがその一点に向かっていった。

雲を切り裂き、電磁波の嵐が十字架を描く。まるで、聖書にて描かれる奇跡の一場面だ。

思わず、動きを止めて圧迫感すら与える曇天を見上げる。
そして直感的に、こう呟いた。

「……………何かが、起ころうとしている……………」

そして、『ASR』のメンバーの一員であり、『ニューヨーク共闘戦線』に新たに加わった少年・ノータルも、その様子を目に入れていた。

背中から放出される、『調整された周波数を持つ電磁波』によってウェーブロードとの間に複雑な反発力を生み、彼は空高くに浮遊しているのである。

そんな彼のバイザーに表示されるデータの数々は、自身の付近で『収束』をする電磁波たちに対する警告と異常性を報せていた。

そして、ノータルは一つの結論を弾き出す。

「この電磁波の塊、何者かの手中にある……!?!」

ニューヨークの一角。

電磁波の十字架の真下に位置する場所。

様々な建物の瓦礫の上に『彼』は立っていた。

争いに勝利した英雄が、無数の屍の頂上に立った時のような光景

「……どういう、事だ……!?!」

思わず呟く、ファールレインロックマン。

驚愕の色が乗せられた言葉。しかし、その疑問に答えてくれる者はどこにもいない。

赤紫色の十字架は、先刻^{さしき}とは反対に地上に向かって竜巻のような
形象と化して堕ちていく。

先刻^{さしき}と違うのは、電磁波の向かう先が一点^{いっけん}である、という所だ。
つまり、竜巻の尾の方に向かって電磁波が流動して行っているの
である。

そして、その変動が起きてから数刻 唐突に、事は起きた。

竜巻の尾が爆破的な輝きを見せ、より一層周波数を乱す。そして、
煌々とした紫色の輝きの中で、拡大された声音がニューヨーク中に
轟いた。

《 周波数同調！ ジョン・エアード、オン・エア！ 》

輝きを貫き、電磁波で固められた人型の『ナニか』が出現した。

全身は揺らぐ赤紫色の電磁波で構成されており、顔面も電磁波で覆
われてしまっている。その為、顔のパーツなどは電磁波の凹凸^{おぼつとつ}で表
現されていた。

その体からは、周辺の電波環境を丸ごと手中に納めてしまいかねない程の、凄まじい周波数が放たれている。

その周波数の凄まじさに圧倒されたファールレインロックマンは、思わず恐怖を感じてしまったほどだ。まだ刃も拳も交えていない所か、目を合わせてすらいけないのにも関わらず、相手に恐怖を与えるほどの存在。

これが、世界最高の科学者から人類へ下された、『第一の試験』。

電磁波生命体との攻防。

「……、いや。怯んでいるような暇は、無い……！」

自身の怯えを否定すると、ファールレインロックマンは再びブースターからエネルギーを放出し、一気に電磁波の塊たる人型の『ナニカ』へと切迫していく。

そして、彼らからはまた離れた場所。

ノイズの剣士と化したブライもまた、電磁波の塊を認識していた。同時に、その周波数の凄まじさに戦慄していた所だ。

「チツ……、何だあれは……？」

『ソロさんソロさん！ ビッグニュースですよー！』

「……またオマエか。流石に鬱陶しいぞ」

『そんな事言わないでくれよ。哀しいじゃないか。このトーマス様は、ソロ君の親友なのだぞ？ それよりも、ビッグニュースがあるのだよソロくん。聞いて驚かないでくれよ？ ムーとグリーンマンに関する情報、掴んだよ』

鬱陶しそうに表情を歪めたブライの耳に、そんなトーマスの言葉が入って来た。

数時間前。確かにトーマスはブライに対して、『グリーンマンはムーの文明に関連している』と言った。またそれと同時に、『それについて調べてみる』とも言った。

だが……、

(……こんなにも早く、情報を得られるモノなのか……？ コイツの言っている事が正しいのなら、コイツはWAXAからのサポーターすら得られない状態にあるはずだぞ。……一体、コイツは何者だ？)

頭の中で疑問を浮かべるブライ。

が、トーマスはそんな事お構いなしに、ガトリング砲さながらの勢いでトークを飛ばし始める。

『オーパーツといいムー大陸といいそうなんだけど、ムーの文明っていうのは『電磁波の制御』に非常に長けてるんだよね。じゃあ、その技術の究極態は何だろうね？……モチロン、それはラ・ムーさ。この事件の裏で笑顔を浮かべている黒幕は、クンヤロー深海に埋もれたムー大陸の中からラ・ムーのボディを取り出し、そこから『電磁波の制御』という技術の究極態を手に入れた……という事さ』

つまり。

グリーンマンや、先ほどまで聳えていたタワーは、
アポロンやコンドルといったムーの電波生命体と同じく……、

だ。

ラ・ムーによって作られた、『ムーの電波生命体』そのもの

22 形態変化

空気を切り裂き、亜音速にも達するスピードで紫色の電磁波生命体へと切迫する。

もはや、風と空気が自身の体と一体化していた。

爽快とも不快とも取れる感覚と共に、己の目指すべき敵へと真っ直ぐに向かう。

そして、十分にターゲットへと近付いた所で、彼はこう叫んだ。

「レイニー!!!」
『モードチェンジ形態変化』だ!』

『了解だ、オゼル』
『モードチェンジ形態変化』、レインドロップ!』

レイニーの声。

それが発せられると同時に、『変化』は起きた。

ファールレインロックマンの周波数が劇的に変化し、その周囲に電磁波の場が形成される。

『場の制御を開始』 リアルウェーブを生成』

その言葉と共に、電磁波の波が制御下に置かれる。

そして ファールレインロックマンの周囲に、突如として青と黒のリアルウェーブが展開された。そのどれもが電磁波によって浮遊しており、ファールレインロックマンを中心として回転する。

それを見たファールレインロックマンは瞳を閉じて、一本の腕を翳す。

その手から電波が放出され、リアルウェーブを吸い寄せせる。

「 周波数同調！ 運河オゼル、オン・エア！」

藍色の光が辺り一面を満たし、煌々とした輝きを放つ。
それはまるで、光の爆発のようであった。
そして、爆煙たる輝きが収まった時、そこに立っていたのは

「 『モドチェンジ』、完了」

巨大な羽のようなパーツを装着した、ファールレインロックマンの姿だった。

羽は背中に取り付けられた、羽根たる部品から放たれている。つまり、背中に取り付けられた二つのパーツから、光のジェットが噴き出しているのだ。そのジェットが羽となり、ファールレインロックマンに浮力を与える。

『モドチェンジ』 形態変化』 それは、サテラポリスによって実現されたものだ。サテラポリスによって開発された『サテライトPGM』。それは、サテライトサーバーの中に存在する、クラークというウィザードの性質を研究して作り出されたものだ。

クラークというのは、クエーツ博士が行方不明になる前に残した設計書に記されていた、『電波生命体の生産』という項目の中にあつた名前だ。

その設計書はウィザードの実現を予言しており、設計書の通りに一体のウィザードを作ってみた所、クラークの生成に成功したのだ。その後で発覚した事なのだが、何と、クラークには『自身の周波数を自在に変化させる事が出来る』という性質があつたのだ。

周波数変換ではなく、周波数変転。

根幹から、自身を変えてしまうのだ。

その凄まじさは、クラークが究極変身を果たしたり、『クロック PGM』によって全く別の姿になった事から分かるはずだ。

サテラポリスはその『性質』を解析し、そのデータを基にして『サテライトPGM』を作り上げた。

『サテライトPGM』、その効能は、『サテライトサーバーと直結し、その戦力と解析力を用いて戦闘を有利に進める』というだけではない。クラークの『性質』の解析データ、それを基として作り上げた機能が……『使用者の周波数を調整する事で戦力を増幅し、更に電波環境に応じて周波数を変化させる』というものだ。完璧ではないが、クラークの『周波数変転』を再現しているのである。

そして、この『モードチェンジ形態変化』は『周波数変転』があるからこそ実現したモノだ。

自身の周波数を用いて電磁波の場を生成し、更にはその電磁波の『波』を操作する事で、『サテライトPGM』に予め組み込まれている、『装甲データ』の形をしたリアルウェーブを作り出す。

その後は、簡単だ。

そのリアルウェーブに合わせ、『サテライトPGM』が自動的に周波数を変化させる。そうすれば、使用者である電波人間が装甲たるリアルウェーブを受け入れる体勢が整う。そしてリアルウェーブの装甲と、電波人間が融合し、『モードチェンジ形態変化』が果たせられるのである。

現在の形態は、『モードレインドロップ』。『サテライトPGM』に登録されている限りでは、『空中戦に特化したモード』である。

新たに現れた者達に対し、何故信頼にも似た感情が沸いたかは分からない。

だがそれでも、ファールレインロックマンは本能的にそう感じたのだ。

宇宙空間。

歪な形をした人工衛星 『新生サテライト』の中で、クエーツは巨大なモニターと向き合っていた。

その顔に浮かぶのは、やはり無表情そのもの。

「……ムーの文明を利用して作り出された、人間と電磁波そのものの融合生命体。その名は『スタート』。人類に対する挑戦の始まりでもあり、私の実験の始まりでもある存在に相応しい名だ。

キミもそう思うだろう、フレンベルグ？」

クエーツが言うと同時に、モニターに明かりが点り、男・フレンベルグの顔が映し出される。その獰猛たる眼光はクエーツを真っ直ぐと見据えていた。

『気付いていたのか』

「まあ、ね。私はキミの教授だったんだ。それ故に、キミの人格

はある程度把握しているつもりだ。あの程度で退くような人間じゃないからね、キミは。だがしかし、まさか私が施した通信強制遮断プログラムを解除するとは、驚いたよ」

『あの程度のプログラムを解くなど、造作も無い。さて、ところでクエーツ教授　今からそこを人工衛星のレーザーで吹き飛ばすのだが、構わないな？』

フレンベルグの言葉の直後。

WAXAの管理下にある人工衛星の一つが動き出した。

丁度、『新生サテライト』の真上に位置する人工衛星だ。

そして、ズオオオオオ!!! と、光学兵器の一種であるレーザーが、サテライトに向かって射出された。

しかし、クエーツは表情を崩さない。

そして、ただ一言、こう言った。

「ワープを実行せよ」

レーザーの向かう座標　そこから、突如として新生サテライトの姿が消えた。あれほどの質量を持っていたサテライトが、突如として消滅したのだ。

そして、地球側には、クエーツの声だけが届く。

「ワープという単語ぐらい、聞いた事があるだろう？　私はそれを実現し、サテライトを設計する時には既に組み込んでいたのだよ。

いわばこのサテライトは、『自在に移動する要塞』と言えよう」

23 座標を自在に変化させる存在

ニューヨーツ、WAXA。

その地下施設にて、フレンベルグが盛大な舌打ちを響かせた。

施設内は再び騒乱に包まれ、驚愕の目がモニターへと向けられる。

ワープ。

クエーツは、確かにそう言い放った。

それは、とんでもない意味を持つ言葉だ。

ワープには様々な原理があるが、それらに共通しているのは『常識を超えた速度』で移動するという点だ。

ある原理では、船の後方に小規模なビッグバンを起こし、それと同時に前方では小規模なビッグクランチを起こす事で時空を波のように動かし、その波に船が乗る事で光よりも速く船が動き、ワープを果たすという。

ある原理では、亜空間の『泡』を介し、この世界の空間のある一点に船を移動させることでワープを果たすという。

様々な原理が言われているが、二二〇X年である今では『擬似ブラックホールを作り出し、そこを電波体が通過する事で任意の場所へとワープする』という実験にてワープの実現が成された。現在はすぐに崩壊してしまう擬似ブラックホールではなく、安定した『ワープゲート』のようなモノを作り出す事で宇宙のあちこちにワープする事を可能にしようとする研究が進んでおり、実現まであと一歩

だ。幸い、電波空間には『電波体が乗ると、別の場所へとその情報を転送する』という『光速情報送信装置』がある。恐らくアレは、高周波の電波が極限まで密集する事で時空に対して作用しているモノなのだろう。応用すれば、タイムマシンが作り出せるかもしれない。それはともかく、『光速情報送信装置』を巨大化・高性能化し、機能を少し弄るだけで『ワープゲート』の基礎理論は出来上がった。だが、それはつい最近の事であるし、それに電波体以外のワープは果たせていないのだ。

クエーツがサテライト設計当時にワープ技術を完成させていたと言うが、それは知られていない限りの科学界の歴史とは矛盾している。それに、クエーツと新生サテライトは電波体ではない。そうになると、『電波ワープゲート』とは別の方法で、しかも一般科学よりも何年も速くワープの技術を完成させていた事になる。

思わず、クラッド長官は頭を抱えた。

敵の底が知れない。

対策の立てようが無い。

それに、だ。

この事実によって、『クエーツを始末する事で人類への試練を根本から止める』という方策も取れなくなった。

人類は全ての試練に対して、馬鹿正直に立ち向かうしか無くなったのだ。人類の心理を知り尽くしたクエーツだからこそ、人類が悪知恵を働かせて『試練を受けずに合格しようとする』のを見通していたのだろう。だからこそ、サテライトのワープ機能を行使し、不正を禁止してしまったのだ。

相手は、宇宙のどこの座標にも自在に移動できる存在。

「……サテライトの設計者……」

その言葉の重みを、クラッド長官は強く実感した。

隣に立つフレンベルグは相変わらず？み所のない表情をしており、何かを思索しているようであった。

と、その時だった。

暗く重い雰囲気立ち込めるこの施設を活気付ける為の『朗報』が、モニターの画面に出現した。そう、それは二ホンに存在するWAXAの支部の一つ、その長官の顔であった。

彼は通信を繋げると同時に、こう言い放った。

『我々WAXAフジ支部から、WAXAニューヨーク支部へ！

双方のネットワークを完全に接続し、リンクする事への許可を求めらる！』

「了解した。我々は、コチラに出現した『電磁波の塊』の周波数の解析にネットワークを用いる。そちらは？」

『そちらと同じだ』

予想通りの答え。クラッド長官は、思わず心の中でガッポーズを作る。

「つまり、……ニューヨークの電波環境の解析を行うと？」

『その通りです。我々は、FM星への通信が途絶えた事と、サテ

ライトサーバー崩壊の手掛かりがそちらの電波環境変異にあると考
えています。 今ここに、ニューヨークとフジの共闘を宣言しま
す！』

既に、ニューヨーク騒動が発生してから数日が経過していた。

状況は改善するどころか、悪化していた。

ニューヨーク側からの報告によると、紫色の『電磁波生命体』が
出現したという。

ニホン側は長らく通信が途絶えていた事で状況が掴めていなかっ
たのだが、フレンベルグという技術者が通信障害を取り除いた事で、
ニューヨーク側との交信に成功し、それによって状況把握が可能と
なった。

だが、依然として地球外との通信には障害が発生しているし、サ
テライトサーバーは崩壊してしまった。

状況は最悪だが、それでも希望という名の道を切り開くしかない。

WAXAフジ支部 その長官は、食い入るようにモニターを見
つめていた。

そんな長官へと、部下の一人が声を掛ける。

「ダメです、……やはりスバル少年との連絡が通じません。大規模な通信障害が発生しているようです」

「ニユーヨーツの一件が原因かね？」

「いいえ、　　どうやら、スバル少年はバトルウィザードと交戦しているようです。ただ、そのバトルウィザードの周波数が明らかにウィザード単体のソレを超えていて……、通信障害は、その周波数のせいなのかもしれません。響ミソラは現在、生放送番組に出演しており、彼女を起用する場合は国民に『この世界の危機』を露呈する事になり、パニックは避けられなくなります。従って、響ミソラの使用も断念しました……」

「そうか……。くっ、ただでさえ戦力が足りていないというのに……。一体、我々人類はどうなってしまうのだ……？」

23 座標を自在に変化させる存在（後書き）

スバルの状況については、ニューヨーク事件と同時進行で物事が起きていくイメージです。ニューヨーク事件が終結したら、そちらの話へと移る予定です。

二ニューヨーツ、最激戦地。

突如として出現した電磁波生命体 『スタート』との戦いが繰り広げられている場所だ。

上空。

そこでは、三つの光が飛翔している。

光の羽を生やしたファールレインロックマン。

ノイズの羽を生やしたブライ。

電磁波の反発力によって浮遊するノータル。

彼らは立場と走り方こそ違えど、到達地点を同じにしている。

だからこそ、迷わない。

妥協も隙も一切見せず、敢然と脅威へと立ち向かっていく。

だが、『スタート』もそう簡単にやられはしない。

ブーストバスターの弾丸を電磁波シールドを張る事で弾き、ブライの背から噴き出すノイズの羽に対して電磁波を用いる事で逆行的にダメージを与える。ノータルの電磁波シールドに作用する性質を持った電磁波を使い、ノータルへとダメージを与える。

圧倒的な暴力を見せ付け、振り撒く『スタート』。

その姿は、ガキ大将さながらだった。

だがしかし、三人は大将へのクーデターをやめようとはしない。

大将の下にいるガキのままでは終わらないのだ。

例え周波数を乱されようと、傷を受けようと、彼らは決して失墜

しない。

その意思と意志を、己の武器として立ち向かっていく。

羽のエネルギーを用いて空気を一気に叩き、ファールレインロックマンは更に加速する。その速度が、超音速へと達する。

ブラストバスターの照準を『スタート』の肩へと向け、一気に引き金を引いた。

ノイズの弾丸が『スタート』の電磁波バリアを貫き、更にはその肩を破いた。

『スタート』の情報に乱れが生じ、その存在が根幹から揺るがされる。

そこへ、ブライとノータルが迫る。

「フン。ムーの紛い物め。」ホンモノを見せてやる……！

『……ダ、……』

ココウノヤミが腕を伝い、ラプラスソードを覆う。

紫色の炎と化した灰色の剣を電磁波シールドへと叩き付け、力押しでシールドを引き剥がす。高層ビルの窓ガラスが一斉に割れでもしたような、重たい響きが轟然と鳴動した。

ラプラスソードの振りに沿って羽からノイズが放たれ、赤き衝撃波が放たれた。

更に、そこへノータルが迫る。

電磁波を帯びた拳を前方へと向け、その拳から、電磁波のピームのようなモノを放った。空気を震わせ、ノイズによって存在を揺るがされた『スタート』の体へ、低周波の電波であるZ波の連立によって作られた『攻撃』が迫る。

弾丸を放つと同時に、ファールレインロックマンはその左手に白く細い電撃を束ねて作ったような剣を握った。白い持ち手から幾重にも束ねた電撃が噴射しているのだ。

そのままの勢いで一気に『スタート』へと切迫し、突き出す。

そして、乱れと電撃と電磁波の三位一体が実現し、

『スタート』の体へ、決定的なダメージが加わった。

宇宙空間。

そこにある一機の人工衛星はたった今、『準備』を終えた。

『電波獵犬』。

アメリッパ政府によって開発された、電波兵器の名だ。

先程まではバラバラに分解され、人工衛星に収納されていたのだが……たった今、組み立てが終了した。

地球のどこへでも、迅速に出動する為に人工衛星の中で眠っていたラッシュだったが、今ようやく目覚めの時を迎えたのだ。

人工衛星の尾がニューヨーツの方向へと一切の誤差なく向けられ、尾から、目に見えないレーザーが放たれた。つまり、電波の集合体がニューヨーツへと、光速で迫っているのだ。

その中には『情報』の単位にまで分解されたラッシュが収まっている。

アメリッパの秘密兵器が、いよいよ目覚める。

れはつまり、周囲の電波環境そのものと化すという事だ

掃除機がモノを吸い込むように、あるいはブラックホールへと物体が落ち込むように。

周囲のウェーブロードが絡め取られ、空気中のある一点へと『収束』を開始する。

リアルウェーブは空気に溶け込んだ『スタート』の周波数に操られ、分解を開始して電波へと戻り　そして、ウェーブロードと共に絡め取られ、空気中の一点へと『収束』する。目に見える現象だけでなく、周囲の微弱な電磁波などもそこへ『収束』する。

空気が、歪んだ。

電磁波が一点へと究極的に集中し、空気がびりびりと震える。

それを全身で感じ取ったファールレインロックマンは、頭の中で渦巻く『警告』を外へと放った。

「マズい、　　何かが起きるぞッ！」

彼が言うまでもなく、同じく戦闘のプロであったブライとノータルは既に危機を理解しており、己の内の警告に従って行動を起こしていた。

ノイズの翼と電磁波の反発力によって空気を叩き、大きく距離を取る。ファールレインロックマンも声を発しながら、距離を取っていた。

そして。

『収束点』にて、爆発が起きた。
信じられないほどの密度となった電磁波たちは膨張を開始し、空气中に高濃度の電磁波を撒き散らす。
電磁波たちは点から徐々に形を作り始める。
それはまるで、巨大な人間のようであった。
ただし、腰から下が存在せず、腰は直接地面と接続しているような状況である。

巨人の上半身。

周囲の電波環境を丸ごと取り込んで生まれ変わった『スタート』の姿を例えるならば、その言葉が適任だろうか。

半透明の片腕を振り上げ、『スタート』は再び叫び声を上げる。
それと同時に、片腕から膨大な量の電磁波が辺り一面へ撒き散らされる。中には電気へと変換された電磁波も存在し、それらは真直ぐに滞空するファールレインロックマンたちへと向かうのだった。

「　　ツツツ!？」

あまりの事態にファールレインロックマンは対応できず、ただがむしゃらに、向かってくる電撃と電磁波に対して純白の閃光を持った剣を振り回した。

無論、そんなモノで電磁波が防げる訳はない。

『スタート』の意思によって『その場に最も相応しい周波数』へと変換された電磁波が、ファールレインロックマンの体を貫いた。
その摩擦によってノイズが生じ、ファールレインロックマンの全身に走った。

「がッ、……あ……!」

僅かに呻く。

彼の背中で煌々とした輝きを放っていた光の羽が消え失せ、彼の体が地面と再会した。ただし、その再会は激烈なものだったようで、あまりにも強い再会の抱擁に少年の意識は断絶してしまった。

黒く。

墨のように、視界が塗りつぶされる。

そして記憶の領域へと、落ちていく。

蘇るのは心的外傷。『あの頃』の、忌わしい記憶。
軍人と銃撃、そして閃光……、

(やめ、てくれ……もう、嫌なんだ……)

少年の思いは、誰にも届かずに 彼自身の頭牢獄の中に留まり続ける。
悪夢を、ただただ映す為に。

ファールレインロックマンがノイズによって倒れた直後。

ブライはノイズの防壁を用いて、ノータルは電磁波シールドを用いて『スタート』から発せられる高周波の電磁波を防いでいたのだが、そんな彼らを揺るがす、ある出来事が起こる。ただそれは、彼らを好転させる出来事だった。

上空、雲を切り裂き、一筋の光が地上へと舞い降りた。そして、蒼く輝く光の柱の中から、凄まじい周波数を放つ電波兵器ワイザードが出現した。

その体からは光り輝く粒子が振り撒かれており、そしてワイザード自身の体も輝いていた。ワイザードの体表には電子基板にも似た、『棒の先端に丸が付いた』という形をした模様の膨大な『情報』が

走っており、そのウイザードから放たれる周波数がどれだけ強力なのかを物語っている。巨大な狼という風貌をしており、背中にあたる部分には巨大な砲が付いていた。蒼く光る目は、何を映し出しているのだろうか。

そして、そのウイザードの全身から、これまた電子声音のような音が発せられた。『スタート』と同じく、電磁波の振動を用いて声を再現しているのだ。ただ、それは通常の人間には聞こえない。惑星や恒星から発せられる電磁波と同じく、機械を通して音声化する事ではか、人間は聞く事の出来ない声だ。だが、電波体にはそのまま聞こえる。そんな奇妙な声である。

『 プレイドウイザード
電波兵器、 020型・ 『ラッシュ
電波獵犬』 ……ココに参上しまし

た』

電波の獵犬が、牙を剥く。

25 ノイズ 電磁波

WAXA、ニューヨーツ支部。

モニターには、アメロツパ軍から送られた『電波獵犬』^{ラッシュ}の視界データが表示されている。

『ブレドウィザード
電波兵器、020型・』^{ラッシュ}電波獵犬』……ココに参上しました』

この声は、ラッシュによって放たれたモノではない。
彼と接続しているアメロツパ軍の一隊員のものだ。

ラッシュのウィザードAIは寧ろ無口に徹底しており、口調もぶつきらばうだ。こんな丁寧な事は絶対に口にしない。

クラッド長官はアメロツパ軍からラッシュの操作権限を受け取ると、周囲の状況をただちに分析し、こう言った。

「……見た所、そこにいる電磁波のバケモノはそこまで高周波な電磁波で構成されている訳ではないようだ。周辺のウェーブロードなどを初めとした電波を主要コアとし、その周囲に太陽からの可視光や紫外線を展開しているだけに過ぎない。X線や線といったとんでもないクラスの高周波電磁波は観測されていない。電波によって構成された者にとっては自身の構成要素よりも高エネルギーの存在と戦うのは辛いだろうが、そこまで厳しい状況ではない。問題は、高周波の電磁波が『固まる』ことで生じる強力なノイズか。……電磁波が強力になればなるほど、ノイズも強力なモノになる。ちよつど、作用と反作用の関係のようなものだ」

決して、クラッド長官は独り言を呟いているのではない。

戦場へ向かって、　　ブライとノータルへ向かって、モニター越しに戦う戦士として言葉を向けているのだ。

「相手は電磁波の塊だ。ブライ君、キミのウィザード　ラプラスには、ムーの特色である『電磁波制御技術』が備わっている。それに……どうやら、その羽を見る限りキミはノイズの制御技術を手にしたようだね。それならば、戦えるはずだ。電磁波の何よりの弱点は、不要物^{ノイズ}なのだからね。そして、そちらは……『ASR』のノータル君……だったかな。君は少し厳しいが、何とか出来るだろう。君の使ってる型の『電磁装甲』は、電磁波の扱いに長けているようだしね。敵側の電磁波を奪いつつ、エネルギー源として使う戦法をオススメする。我々も全力でサポートする、　絶対生き残れ！」

一方的に言うと、クラッド長官は威厳を見せつつ、部下達へこう言った。

「彼ら以外の隊員には退避命令を出せ。　高周波電磁波の影響下で電波人間が戦うのは得策ではない。ノータル君以外の『電磁装甲』には性能の違いが存在する。ノータル君の機体の性能がこの状況に合致していたのは、もはや奇跡だ。……それ以外のメンバーは、この状況の中で戦えば滅してしまっだろう。……従って、『ASR』のメンバーにも撤退命令を出しておくべきだ」

そこまで言うと、クラッド長官はラッシュの視界データが表示されたモニターへと目を移し、自身のハンターをモニターの窪みへとめめた。

ガチリ、という無骨な音がし、ラッシュとクラッド長官のハンタ

ーが直結した。

そして、長官は笑みを浮かべてこう言う

「……さあ、ここからが我々人類の反撃だ！ 不正も何も無い、
真正面からの突破という、もう一つのの人類の得意技悪足掻きを見せてやる
う、クエーツ博士！」

ニユーヨーク、戦闘地。

突如として現れた電波の狼に一瞬だけ驚きの色を見せたブライと
ノータルだったが、狼の全身をスピーカーのようにして放たれた電
子声を聞いて、納得が行ったようだ。

「チツ、……あの男といい、この男といい、オレは命令されてば
かりだな……」

眩くブライ。

ちなみに、『スタート』の強力な電磁波によるノイズの影響なのか、トーマスとの通信は繋がらなくなっていた。

口調とは裏腹に、戦意を宿した彼の眼は『スタート』へと向けられており、彼の背中にあるノイズの羽の勢いが強くなる。ノータルの赤黒い装甲から放たれる電磁波の周波数がより鋭角な物となり、『スタート』に対する敵意をぎらぎらと漲らせる。

『ヴ、オアアアアアアアアア!!!』

猛る『スタート』。

空気が震え、『スタート』の電磁波が一気に体外へと放出された。周囲の電波環境が更に異常な物となり、意図的に生成されたノイズがブライとノータルへ牙を剥く。

だが、二人はその程度では怯まない。退かない。

反発力と浮力によって空気を切り裂きながら、二人はノイズと電磁波の嵐の中を駆ける。その姿はまるで、疾風のようにであった。

台風の目たる『スタート』目掛け、一直線に風となつて疾ける孤高の戦士と、電磁波の兵器。

そして。

『 大量のノイズヲ感知。…… 処理』ヲ開始スル』

紡がれる言葉。

起伏の無い、無感動な声の発信源は明確である。

ラッシュユ。

アメロツパの秘密兵器である、ウィザードの声だ。

彼の視界に映し出されるのは、可視化されたノイズの群。まるで陽炎のように漂うそれらに対し、ラッシュは超並列処理を施している。

彼の動作を見て、何かを連想しないだろうか？

そう、『ノイズキャンセラー』である。

ラッシュはノイズキャンセラーの発展版と言ってもいい兵器なのだ。

ノイズとはすなわち、『電磁波の保有する情報の質が変化し、害のある情報を含んだ』状態である。つまり、ノイズも元は電磁波だった訳だ。

これに対して適切な処理を加えてやれば、ノイズは電磁波へと還元される。ここまで言えば、もう分かるだろう。

ラッシュはノイズに超並列処理を施す事で電磁波へと変換し、その莫大な電磁波を取り込む事ではば無尽蔵のエネルギーを手に入れているのだ。

正に、無敵。

ノイズ空間など一瞬で消し去れるほどの、最強の電波兵器。猛犬。

それこそ、ラッシュに与えられるに相応しい称号だ。

莫大なエネルギーを纏い、ラッシュはそれらを一気に起爆させる。その背に設置された砲口から、電撃の柱が放たれた。

空気すら焼く、恐るべき高電圧の集合体が、ブライとノータルの速度すら超越して『スタート』の胸へと直撃した。

その衝撃はもはや、銀河と銀河のぶつかり合いに等しい。近くに居たブライとノータルは、ビッグバンが起こったのではないかと錯覚したほどだ。

だが、これで道は切り開かれた。
咆哮する『スタート』。だが、それは苦悶から来る悲鳴でしかない。

「「オオオオオオオオオオ！！！！！！」」

高磁圧の拳と、電磁波の宿敵たるノイズの刃が、流星を思わせるような速度で突き出された。

意識は明滅していた。視界は、もはや曇った窓ガラスを通して景色を見るよりも酷く霞んでいた。脳の処理が遅れるほどの激烈な痛みを感じながら、ファールレインロックマン　運河うかわオゼルは、口

から一筋の血を吐き出した。

彼の中に浮かぶのは、一つの想い。

(ふ、ざけるな……倒れて堪るか……！ 僕には、やらなければ行けない事がたくさんある……こんなところで、倒れていられるか……！)

少年の胸中に、一つの炎が点火する。

それは意識であり決意であり、想いだ。

そしてそれは、行動という形で表現化される。

ぐっ、と拳を握る。

そして、それを空に突き出す。

「 サテライト PGM、完全解放！ アメロツパのサテライト
サーバーへと強制アクセス！ 最終階層のポートを解放！ リアル
ウェーブと、我が周波数、そしてサテライト PGM を『制御装置』
とし、超並列処理を開始する 絶対変身ツツ！！！！」
オーバーフロー コア

凄まじい電磁波の奔流が少年を中心として巻き起こり、そして

その中から、ラッシュと同じ、煌々と青白く輝く体を持った
ファールレインロックマンが現れた。

26 オーバーレイン

暴君たる『スタート』へと、二つの流星が追突した。

二つもの流星を受けた『スタート』　だがしかし、それはむしろ暴君にとってプラスの要素であった。

彼は惑星ではなくブラックホールだったのだ。故に、流星の直撃を受けてもビクともしない　むしろ、ノイズと高磁圧を取り込んでしまう。

二つの攻撃が消え去り、『スタート』の纏う周波数がますます増長される。まったくバカげた話だ。攻撃をする度に腹を膨らませる暴食家など、相手にしていたらキリが無い。

『スタート』は高磁圧に対して自らの周波数をぶつけ、『干渉』という現象を引き起こしたのだ。結果、拳に纏われていた電磁波は『スタート』の周波数と同調してしまった。ノイズの刃は『スタート』の超並列処理によって電磁波へと還元され、これまた暴食家の胃袋に収まってしまった。

驚愕の色を隠せず、ブライとノータルは思わず空中で静止した。
直後、

『ぐ、オあああああああああ！！！！』

『スタート』の雄たけびと共に、コンクリートの柱を思わせるほどの太い腕が、二人の戦士へと横薙ぎに振るわれた。

まるで台風吹き飛ばされる哀れな木のように、二人の体は地面へと落ちていく。

やがて二人は、先ほどファールレインロックマンが味わったのと

同じように、強烈な勢いで地面に叩き付けられた。もはや、二人の意識は明滅しているだろう。

絶望的な暴君は、ただただ君臨し続ける。そう思われた、その時だった。

ブラックホールと流星の出遭いによって撒き散らされた高濃度のノイズを電磁波へと変換し、己のエネルギーとしたラッシュ。そのエネルギーを利用して彼から放たれたマイクロ波の柱が、レーザー空気を切り裂いて『スタート』へと向かったのだ。

量子のスピンも、光の指向性も完璧に揃った、正に破壊的な電磁波攻撃だ。

だが、ラッシュはそれだけでは攻撃を終えない。

マイクロレーザーによって生じた磁場を上手に電撃へと変化させ、電それを利用して近場の電子を加速度的に撃ち出した。見事に、電荷電粒子砲の完成だ。

だがしかし、それでもラッシュは満足しない。

貪欲な盗賊を思わせるような勢いで、彼は『スタート』への攻撃だけをひたすら望んでいるのだ。

今度は彼自身が高電磁圧を纏って駆け出し、ブラックホールたる『スタート』を破壊する隕石であるかのように振る舞おうとする。

二つの流星と、一つの隕石。

これだけあれば、『スタート』を圧倒するには充分であるかのよう
うに思われた。

だが、『スタート』の方が一枚上手だったのだ。

自身の体を即座に超並列処理する事でノイズへと変換し、ラッシュ

ユの計算処理機能すら凌ぐ勢いのノイズの塊と化したのだ。

これには、流石のラッシュもどうしようもない。

処理できない部分のノイズに関しては、まともにダメージを受けるしかないのだ。

そして、情報が緻密であればあるほど　つまり、体を構成する

電磁波の周波数が高ければ高いほど、ノイズのダメージは大きい。

従って、ラッシュは中枢部分にまでエラーが走るほどのダメージを受ける事となってしまうた。

『ガッ……！！』

思わず呻くラッシュ。

モニター越しに、遠く離れた場所でクラッド長官も舌打ちをした。

デリート寸前の所を彷徨いながら、何とかラッシュは自身の周波数を安定化させようと、即座に電磁波の組み換えを行う。

だが、『スタート』の方が速い　黒いノイズと化した全身から、ノイズの弾幕をラッシュへと浴びせたのだ。

光速で進むノイズの弾幕　ラッシュの命もここまでかと思われた、その時

同じく光速で、一つの青い光がノイズの弾幕へと激突した。

その衝撃でノイズの弾幕が霧散し、何者かの超並列処理によって即座に電磁波へと変換されていく。

そして、それだけの事を引き起こした人物は、オレンジ色の輝きを見せる六対の棒のような翼の力を借りて浮遊していた。

その名も、

「 オーバーレインロックマン、
推参……！^{すいさん}」

まるでその姿を変質させた、元・ファールレインロックマン
オーバーレインロックマンだった。

27 幕開けの予兆

より鋭角的で、シャープな外観となったファールレインロックマン改め、オーバーレインロックマン。

その体表はラッシュと同じように青白く輝いており、ノイズを電磁波へと超並列処理する事でエネルギーを得ているようであった。

左手の中で透明な電撃がループをしていた。透明なリングに沿って、電磁場が生じる。電磁場は強力な破壊兵器となり、真っ直ぐに『スタート』の右肩へと直撃した。

城砦を思わせるほど強固だったその体が、一気に弾ける。

個体情報が粒子となり、宙へと消えていく。

『スタート』の絶叫が、轟いた。

だが、オーバーレインロックマンはそれに対して同情の念を示さずとしない。

あくまで無慈悲な防衛隊員に徹し、その手に持った白く透明な電撃の剣を真っ直ぐに振り下ろす。と、同時に剣が一気に膨張し、天に届くか否かという程の大きさとなる。雲を切り裂き、天を駆け、裁きの雷剣が電磁波の怪物へと直撃した。

そして、絶叫。

ただしその叫びは、一つだけではなかった。

『スタート』の断末魔、そして　オーバーレインロックマンの口から放たれた苦しみの叫び。見れば、その青白い体が今にも消えようとしていた。

超大な負荷に、オーバーレインロックマンの肉体が耐え切れなかったのだ。

宇宙空間。

新生サテライトの中で、クエーツは瞳を閉じた。
それとは対照的に、口を開く。

「……絶対変身^{オーバーフロー}、か……私の予想を遥かに超える方策があるとはな
……」

ふふつ、とクエーツは冷たい顔に笑みを浮かべて見せた。
それはまるで、凍土の中に咲いた一輪の花のようである。

「……これだから、人間の可能性というものは面白い」

『第一の試練』である『スタート』の襲来を退けた人類へと、誰にも届かぬ祝辞を送るのであった。

数時間後。

運河オゼルの瞼が、ゆっくりと開いた。

視界が揺らいでおり、焦点がハッキリとしない。

まるで、ピントのズレた眼鏡越しに景色を見ているようだ。

視界と同様、ハッキリしない聴覚へ声が届く。

「ああ、よかった！ 目覚めたのね、オゼルちゃん！」

「ヨイ、リー……博士……？」

オゼルの疑問に答える間もなく、白髪の博士・ヨイリーは早口で捲くし立てる。

「もう、大変なのよ！ スバルちゃんが酷い事になっているみたいで……もう、本当に気の毒だけど……オゼルちゃん、スバルちゃんを助けに行つて欲しいの」

新たな物語が、始まるうとしていた。

それは、齒車に噛み砕かれた、光たちの軌跡が紡ぐ物語。

『それじゃあ、ソツテム・ロゲフくん』

「その名前で呼ぶな。虫唾が走る」
『じゃあ、ソロくん。君に頼みがある』

荒涼とした、灰色に包まれたニューヨークの中。

徐々に電波環境が回復しつつあるこの場所で、ブライは灰色の剣を持って立っていた。

彼の耳へと、遠隔通信が届く。

「俺がお前の言う事など聞くとでも？」

『いいや、思っていないよ。ただ、ね……今回はかりは、君は動かざるを得ないはずさ』

「どういうことだ……？」

『ムーだよ。ドクター・オリヒメが起こしたムー大陸事件……ムー大陸が沈んだ海洋から、おかしいな数値が検出された。どうやら、その辺りの時空が歪んでいるようなんだ。このままだと、ブラックホールが生じてしまうかもしれないレベルの、ね。どうだい、ソロくん。興味はあるかい？』

チツ、とブライは大きく舌打ちした。

そうした上で、瓦礫の山に背を向ける。

「……まったくもって世話の焼ける大陸だ」

皮肉げに吐き捨てるブライ。

と、その時だった。

「……どこへ、行く気だ……？」

「アメロツパの『犬』か」

彼の背に、倒れ伏すノータルが疑問を投げかけた。

『スタート』との戦いで傷付き、ボロボロになった赤黒い装甲は、もはや目も当てられないような状態となっている。

ブライはその少年に対し、冷たい目を向ける。

「俺には『目的』がある。その為に歩き続けるだけだ」

言い残すと、彼は再び前を向き、歩き始めた。

その足取りに迷いは感じられない。

それはまるで、ソロという男の生き様を無言で提示しているかのようであった。

「目的、か……」

その言葉を反芻しながら、ノートルは自嘲気味な笑みを小さく浮かべてみせる。

彼らもまた、新たな物語を演じる光の一つ。

その軌跡が交わるのは、まだ遠い未来の話……。

28 遠い地からの訪問者

First chapter 2nd Stage .

コダマ小学校。

学習の勤めを終えた学生達は、夕暮れの中を帰っていく。

ある者は見知った仲間たちと、ある者は生意気にも寄り道をしようとして一人。『放課後』とは言っても、個人個人で色の違う中身を持った時間を過ごしているのであった。

そんな中。

音良司おんりょうじカイキという少年は、展望台にいた。

コダマタウン唯一の観光名所でもあるこの場所で、彼は荒い呼吸を繰り返す。

恐怖にも似た色を帯びた彼の瞳は、震えていた。

『う、あ……………』

展望台に空いた、穴のような大きな黒い『歪み』。

その傍には、一体のウィザードが倒れていた。

赤茶色のボディを持ったヒールウィザードの体がポロボロに傷付いている。それに追い討ちを掛けるように、そのウィザードの体には赤い『乱れ』のようなモノが休まずに走っていた。カイキの知る由は無いが、それはノイズと呼ばれる、電波の持つ情報に変異したモノだ。

そして、黒い『歪み』の中から現れたばかりというような、奇怪な存在がカイキの前に立っていた。

不定形の蒼いボディは炎のように揺らいでいるようで、それでいて一定の秩序を保っていた。

『……ほう。オマエは、不可視領域の電磁波生命体を肉眼で見る事が出来るのか』

口を開く、不定形の生命体。

恐怖のあまり、カイキは口を開く事が出来なかった。まるで、舌が緊張という名の鎖によって磔にされてしまったようだ。

蒼い生命体は、冷たき炎を宿した大きな瞳を少年へと向ける。

『我が名はアンタレス。同名の恒星においては、王を司っている存在だ』

そう言って、アンタレスは人差し指 に当たる部分を立ててみせる。

すると、どうだろうか。

驚いた事に、黒い『歪み』……つまりノイズウェーブの入口が崩れ始めたのだ。

それらがあつという間に高エネルギー電磁波へと変換され、アンタレスの制御下へ置かれる。異国の地で、オーバレイインロックマンやラッシュが行ったモノと同じ、高度な作業である。それを一本の指だけでこなしてみせるのだから、相当恐ろしい。

更にその電波がリアルウェーブへと変異し、アンタレスの周波数シンクロと同調する。

電波変換。

眩い光が展望台を包み込んだ次の瞬間には、赤紫の艶めくボディを身に纏った、一人の電波人間がそこに立っていた。

そうした上で、アンタレスは押し潰すような重みを持った声で語り続ける。

『私は、デューオ様を初めとした銀河管理者たちの命により、地球の『査定』を行う事を目的としている。キサマには、それに協力してもらおう。そうだな、まず手始めに　その携帯端末をコチラへ向ける』

「は、ハンターV Gのこと……？」
『ハンモックだとかいう、名称には興味ない。その端末を腕から外し、こちらへ向ける』

恐怖心は拭えないが、だからこそこの奇怪な生物の言う事に従う事にした。

ハンターV Gを腕から取り外し、先端部分をアンタレスへと向ける。

ワイザードアダプターを挿し込むはずの部分には、何も挿し込まれていなかった。カイキは、ワイザードを所持していないのだ。

アンタレスはそれを見ると、ポロポロのヒールワイザードへと視線を移した。

そして、こう言う。

『こいつから、憎悪と諦めの周波数が伝わってくる。私はこういうものはあまり好まないが、この際都合が良いので利用させてもらおうか。　周波数から逆流し、記憶データを覗くでしょう……ふむ、なるほど。どうやらこのヒールワイザードは持ち主に捨てられ、彷徨っていた所を力尽き、何物かによるノイズの攻撃を受けたようだ』

その言葉を聞いたカイキは、思わず心配するような表情を浮かべた。

それを見たアンタレスは依然と無表情で、こう言う。

『心配には及ばない。その為にオレがここにいる』

くいつ、とアンタレスの指が折り曲げられた。

その途端 ヒールウィザードの周波数が一気に崩れ去り、そしてその直後に再構築が開始された。

並みの電波生命体には不可能な芸当だ。

それを息すら乱さずにやって退けたアンタレスは、新しく生まれ変わったヒールウィザードを指差して、こう言った。

『少年よ。コイツは今から、オマエの新たな力となり、助ける業務を負った。この力をオマエの使いたいように使え。いいか、少年よ。自分の欲望には正直に生きるのだ』

心臓が高鳴った。

ゾクゾクと。

歓喜とも恐怖とも取れる、複雑な感覚がカイキの背筋を振るわせた。

それは、背徳にも近い物があり、同時に不安に近い物でもあった。興味があるのに、恐くて手が出せない。

それに近い感覚が、カイキの中で渦巻いている。

そこへ。

決定的な一撃が加わる。

アンタレスの言葉という一撃が。

『恐れる必要は無い、少年よ。キミならばコイツを扱えるはずだ。その用途はキミに託す。キミの『やりたいと思う事』……それこそが、コイツの『引き金』となる。さあ、少年よ。選択しろ』

その言葉は、救いの手を差し伸べる天使の面と、魂の契約を迫る悪魔の面を内包しているように感じられた。

騙し絵を見ているような、奇妙な感覚にカイキが捉えられていくと、その時だった。

アンタレスの眉が、僅かに顰められた。

そして、その直後、アンタレスの体へと上空から光の球体が降り注いでいた。

だがそれはアンタレスに直撃する事は無く、彼が片手を翳したただけで透明な柔らかい壁に阻まれたかのように、光の球体の動きが止まった。

そこへ、声が飛ぶ。

「チツ！ あのヤロー、周波数変換だけでロックバスターを止めやがった！」

「えっ、それって」

「今のロックバスターは、アイツのモノになっちまったって事だよ！」

カイキには、確かにそれが見えた。肉眼にも関わらず、だ。

青いボディ、光を照り返す赤いバイザー、そして、片腕に付いたウィザードアダプター……今の時代ならば、誰でも知っている姿だった。

「……星河スバルに、ウォーロックか……。デューオ様にも気に入られ、シリウス様すら撃破した存在だと聞いていたがなるほど。確かにその通りだ。お前の周波数は『通常』のそれとは違うな」

今まで一ミリたりとも変わらなかったアンタレスの表情の筋肉が、初めて歪んだ。

その顔に浮かべられているのは、純粋な好奇心から来る微笑だ。

「シリ、ウス……今、キミは確かにそう言ったよね？ 彼について何か知っているのかい？……」

「スバル！ チンタラしてねえでコイツ」
「ロックは黙ってよ！」
「なんだと！」
「なんだと！」

質問しながら喧嘩を始める青き戦士。

アンタレスは呆れる様子も見せず、ただこう答えるのであった。

『いずれ、分かる。嫌でも、な……。さて、私の『任務』はこれで完遂された。そろそろ元の場所へと帰るとしようか』

『あつ、テメエ待ちやがれ!』

アンタレスの言葉を聞くと同時、ロックマンの左腕が思い切り前に突き出された。うわっ!という間の抜けた声と共に、ロックマンの体が左腕に引きずられて地上へと落ちていく。その光景はまるで流星のようであった。

ズドン! というこれまた間の抜けた音と共に、ロックマンは尻餅を付いた状態で展望台の地面へと降り立った。

アンタレスは踵を返しかけていた足を止め、ロックマンの眼を真正面から見据える。暫く、奥底が読めない機械的な無表情を徹底していたアンタレスだったが、こう口を開いた。

『……良いだろう。命令違反にはなるが、相手をしてやろう。地球の戦士・ロックマンよ。掛かって来い』

ロックバスターの弾丸を自身を起点として周回させながら、アンタレスは油断を許さない調子でそう言った。

ロックマンはその言葉を聞くと、立ち上がった。先ほどまでの、格好悪い姿はどこにもない。その眼光に宿るのは立派な戦士の色であり、腰は油断なく低く落ち着いている。

次の瞬間。

バトルカードのデータを入力しようと、ロックマンは左腕のディスプレイに触れた。

が、その肩に、激痛が走る。

見てみれば、先ほど自分が放ったはずのロックバスターの弾丸が今はアンタレスの支配下にあるモノだ、ロックマンの肩に綺麗に止まっていた。

アンタレスはその状態を演出しながら、こう言っ。

『オマエの弾丸は、周囲の電波をバスターの銃口へと吸収し、その内部の機構によって高密度圧縮する事で弾丸として利用しているよ。うだな。……いわば、その弾丸は電波が高密度に圧縮されたモノ。周波数も揃っているし、指向性もピッタリだ。だが、その用途は弾だけではない。たとえば、こんな使い方も出来るのだ』

パチン、と。

アンタレスの指が、鳴らされた。

次の瞬間、弾丸に圧縮されていた電波の周波数が突如としてバラになり、更に『外部』から何かしらの干渉をされた事で、内から外へと膨張した。

その結果、反動としてノイズを排出しながら、高エネルギーの爆発がロックマンの肩で炸裂した。

「ガッ、あああああああああああッ!？」

敵性電磁波の周波数、5100万メガヘルツ。

損傷レベル、A。

逃走を促す。

ロックマンのバイザーに、警告音と共にそのような文字が表示された。ハンターV.Gに内臓された戦闘補助システムが状況分析を行い、その上で避難を促してくれているのだ。

どう考えてもおかしい、とロックマンは思考する。

ロックバスター単体での攻撃力は、精々100メガヘルツが良い所だ。

使い方によってはそれ以上のダメージにも達するが、平均値はその程度である。

だが、このダメージはおかしい。それに、爆発などという現象はロックバスターの弾丸は引き起こせないはずなのだ。

『これが、『攻撃を上手く扱う』という事だ。地球の戦士よ、オマエの今までの勝利は、殆どがブラザーバンドによる内部補正のお陰だ。これからの戦いでは、そうも行かなくなる。このような戦術も心得ておく事だな』

『テメエ、さつきから訳の分からね事をべらべらと』

『おっと、そろそろ時間だ。悪いが、一気に終わらせてもらおうか。』

ブラックホールサーバー、アクセス!!!』

アンタレスは一切の隙を見せずに、そう叫んだ。

彼の背後　そこに、得体の知れない空気の『振動』のようなモノが走る。

電磁波が圧縮され、そこに何らかのゲートが出来ているのだ。

そこから放たれた膨大なエネルギーがアンタレスの周波数に更なる力を与える。

「ブラック、ホールサーバーだつて……!?!」

ロックマンは痛みを堪えながら、驚きを顕にした。

廃れた機関車の中に隠れるカイキを守るように位置するロックマンは、ただただ瞠目する。

アンタレスは何の事も無い調子で、両腕を大仰に広げる。

『終わりだ、ロックマン』

バイザーに表示された周波数がテラヘルツにも達する。

それを認識するより前に、景色が真っ白に塗りつぶされ、そして

凄まじい振動が、空間を揺らす。

先ほどまでの熾烈な戦いが収まったのだと、音良司おんりょうじカイキは悟った。

恐る恐る、震える足を廃機関車の外へと出していく。そこでカイキが捉えた光景は、想像通りの物だった。

倒れ伏す、青き戦士。

アンタレスは既にその場から居なくなっており、ただただ静かな緊張が空間に染み入っている。

最初はゆっくりとしたペースだったが、次第に駆け足気味にロツクマンへと近寄るカイキ。草原に膝を下ろし、敗北者であるロツクマンの顔を覗きこんだ。

その目は堅く閉じられており、表情には苦しげな色が浮かんでいる。

と、その時だった。

『がッ、ぐふ……オ、オマエ……そのオマエだ、聞こえているんだろ……？』

「う、うん……」

青き戦士の左腕　そこに取り付けられたディスプレイから、荒々しくも弱々しい声が聞こえてきた。

怯えの残る表情で頷きながら、カイキは怪物との会話を敢行する。

「ま、待ってて……今、助けるから」

『そう、してくれると助かるぜ……』

助ける方法。

そんなもの、一つしかない。

カイキは、展望台の隅へと視線を移した。

そこには、一体のワイザードがスリープ状態で浮遊しているのだ。ごくりと唾を呑み込むと、カイキはゆっくりと立ち上がる。

その足取りはおぼつかない。

右腕に装着したハンターを取り出し、そして

眩い光が、展望台を照らし出した。

離島の刑務所。

脱獄不可能とも呼ばれ、高圧電流の柵によって何十にも出入り口が保護されている、『鉄壁の要塞』。

世界各地からS級犯罪者が集められるこの場所で、一つの混乱が生じていた。

次々と、刑務所内の人間が『モンスター』に喰われていく。そのような状況は、内からも外からも攻撃されるといって、囚人たちにとって極悪な環境を演出してみせるのだった。

陰鬱な空気が漂う刑務所の中、ジャックという少年も混乱していた。その根底にあるのは、姉・クインティアの消失だ。

先日の報告からずっと落ち着けず、牢屋の中をぐるぐるぐるぐるすると、まるで犬のように駆け回るのがもはや呼吸となってしまうていた。

と、その時だ。

刑務所を貫くような、凄まじい悲鳴がどこからか上がった。

聞かせるだけで、相手の心臓を止められそうな声。

聞いただけで、恐怖に身を包まれてしまいそうな声。

まるで、地獄に焚きつけられた罪人の絶叫のようであった。

そして、そのおぞましい悲鳴は、ジャックにも聞こえていた。

だが、声に反応を示すよりも早く、更なる異常が追い討ちを掛けるように迫る。

電子ロックで管理されている牢屋が次々と故障を始めたのである。ガシャ！ ガシャ！ と、派手ではあるが間抜けな音があちこちで轟いた。灰色の壁、床、天井……刑務所内のありとあらゆる物質に反射され、間抜けな重奏が響き渡る。

異常という事態を超えている。この電子ロックが壊れる事など、あってはならない事なのだ。となると、何が起こるかは分かるだろう。囚人たちが悲鳴に追われるように、牢屋の外へと飛び出した。逃走の為ではなく、悲鳴による恐怖のせいだろう。

忽ち刑務所内はパニックに陥り、ジャックも流れに乗って牢屋か

ら飛び出す事にした。

人の波によつて強制的に足を動かされながらも、道に沿つて食堂へと流れていく。

未だに頭の中のぐちゃぐちゃはまとまっていない。だからこそ、何かしらの行動を起こさないとどうにかなつてしまふそうなのだ。

「おいおい、坊ちゃんよお」

「……あ？」

進み続けなければ押し潰されるであろう荒波の中、不意にジャックへと声が掛けられる。

重く、厚みのある声。そして、声の主も、同じような外見をしていた。

「オマエ、聞いたぜ。この前消えたヤツの弟なんだってな？ ゲハハハ！」

「、、」

「おーおー、そんな怖い顔で睨み付けるんじゃないやねえつての。さて、弟クン」

「弟クンじゃない、ジャック……、ジャック・カックヴァスだ」
「ゲハツ！ こりゃあ、驚いた。ノイ何とかを使つて世界を滅ぼそうとした大悪党が目の前にいるとはなあ！ 敬意を表して、オレも自己紹介するとするぜ。オレの名は五里門次郎……まあ、よろしくつて訳だ。クソチビ」

「そんな事どうでもいい。話しかけてきたんだから、用があるんじゃないのか？ クソゴリラ」

ゴリラという単語を軽く受け流し、五里という巨体の男　そもそも、この外見では人間なのかすら怪しいが　は『本題』を切り出す。

「さっきの声、誰のものか分かるか？」

「……ケツ、知るかよ」

「釣れねえガキだな。　　ありゃあ、オマエの姉のものさ。声が変質してたが、オレには分かるね。何せ……オマエの姉がやられる所を、囚人のハンター越しに見ちまったんだからよ」

紡ぎ出された、驚愕の事実。

その言葉に、ジャックの呼吸が一瞬止まる。

食堂から響く悲鳴や破壊音すら、彼の耳には届かなくなっていた。

歯車は、勢い良く回り出す事となる。

31 ゲヒヤヒヤ!

薄ぼんやりと開けられた瞳から、どこか曖昧な景色が覗く。

世界の全てが揺らいでいて、触れる所か、息を吹きかけただけで壊れてしまいそうだった。

ぴくり、と指先が動く。

「よ、良かった、……目覚めたんだね……!」

唐突に、耳へ飛び込んで来た声。どこか弱々しく、即座に折れてしまいそうな調子だ。

生後間もない小鹿の風情を見せる少年へと、星河スバルは掠れた声で尋ねる。

「き、みは……?」

「ボクの名前は音良司おんりょうじカイキ。ほら、随分前にキミがボクを助

けてくれた事を覚えていない?」

「ああ……覚えてるよ……何となく、だけどね……」

ハッキリしない意識を振り切るように、星河は上体を起こした。

既に空には星が瞬き始めていて、遠い遠い過去の光景を映し出しているのだった。

始まりの場所でもある天文台　ここでの戦いに敗れ、自分はずっと眠っていたようだ。

つい先ほど拳を交えた、地球外の存在と思われる電波体を思い出し、その強大さに慄く星河。

意識の中へと再び閉じ籠ろうとする星河へと、カイキが疑問を投げた。

「何で、キミはあの時、ボクを助けに来てくれたんだい？」
「ロックが、展望台から凄い周波数を感じるとか騒ぎ出して……それで、無理やり連れて来られた感じだよ……ハハハハ……」
『ほら見るスバル！ オレの言った事は本当だったんだ！』
「そのせいで酷い目に遭ったじゃないか！」
『知るか！』
「なんだと！」
『なんだと！』

「や、やめなよキミたち……」

不毛な争いの中に割って入るカイキ。

星河とウォーロックはその様子に顔を見合わせていたが、暫くすると溜息を零して脱力した。不毛な争いをこれ以上続けても意味は無い、と二人とも認めたとようだ。

カイキは安堵の念を抱きながら、とにかくこう言った。

「……そ、その……ボクを助けてくれて、ありがとう」

食堂に広がっていたのは、凄惨としか言いようのない光景だった。本来ならば味わい深く、骨董品の如き美しさを誇った料理の群が飾るはずだった、ボロボロの机の上には血が飛び散っており、ある意味『この場所』に相応しい光景を醸し出すのであった。ただし、それはこの場所に望まれた光景ではない。本来ならば、この主役は料理の群であり、囚人たちに『本来の居場所』を思い出させるような血の群では無かったはずなのだから。

いや、訂正しよう。

今この場所の主役は料理の群でも血の群でもなく、囚人、看守といった選り取り見取りな死体の群なのであった。選び放題ではあるが、誰も選択をしようなどとは思わない。全部あげると言われれば、全部いらないと返してしまう事間違いない。

そして。

ジャック・カックヴァスというS級犯罪者の少年の目は、とある一点に釘付けされていた。

部屋の奥。そこには、『バケモノ』と呼ぶに相応しい存在が立っていた。

不定形で、深紫色の体。荒々しいその骨格から連想されるのは、己の性癖を誇示する為に殺人を何度も何度も繰り返す、歯車の狂った殺人鬼だ。その骨格の良さに、健全な意味は一切含まれて居ない。それに含まれた意味は、ただただ貪欲に返り血を浴びるだけの、イカれた存在だ。

脚を包み込んでいる金属アーマーすら打ち砕きそうな、凶猛な両の脚はしっかりと地面に付けられ、あまりの力強さに地面が悲鳴を上げている。

左手を覆うように装着されている、十本の長い牙^{ツメ}。もはやそれはツメという領域を超えて、伝承上に登場する終焉の狼・フェンリルの牙すら思わせる。

その十本の長いツメは、手の甲の方と内側の手首の方から、五本ずつ飛び出している。まるで、銀色のハエトリグサだ。

口の奥底で獲物を蹂躪する舌の役目を担うのは、彼自身の太い紫色の手である。

老練なオオカミを思わせる、彫りの深い獰猛な顔立ちが、潰れた果実のように歪められた。そこに浮かぶのは、猟奇的な歓喜である。海賊傷の入った眼が細められ、闖入者たる囚人たちを絡め取る。

だが、ジャックは猟奇的なオオカミの化物などには、目もくれな

い。
彼の目が釘付けになっているのは、そのツメの先だ。
そこに接続されているのは

「姉、ちゃん……っ!？」

そう、ジャックの実の姉・クインティアである。

彼女の腹はツメに貫かれ、赤い染みを囚人服の上に作り出す。衰弱しているのか、その肌はとてとても青白い。体中に傷が走っており、痛みのシヨックからか、彼女の両目は閉じられていた。

意識が、落ちてしまっているのだ。

小さな小さな、ジャックの驚愕。

だが、化物はその言葉を拾い逃さなかった。

『あア……? ゲ、ツヒヤヒヤヒヤヒヤ!! こりゃあ、スゲエや

！ スゲエよマジで！ おいおいおいおい、このプラネットアースだとかいうド田舎の惑星は、ただだけオレを楽しませるつもりだよ！？ 引き裂かれた姉弟の絆、孤島の刑務所にて繰り広げられる、殺人劇 サイツコオだねエー！！ 正にオレ好みだぜ！ ん？ ああ、何だか喋りたそうな顔してんな、オマエ。 なに？ オレの言う事がおかしいって？ うっせえな、ちよつとくたばってる』

言うや否や、目の前に居た男の顔を、銀色のハエトリグサが捉えた。

ガリゴリバキボリガキ……と、不気味な音を立てて、ツメが男の顔を蹂躪していく。非常に残念である。この男は口を開くどころか、股間を黄色の液体で湿らせる程度には怯えており、到底喋れる状況ではなかったのである。

このバケモノ、相当ないちゃもん野郎と見た。

『とまあ、オレは素晴らしく感激した！ そのコウモリ少年そう、そのこのテメエさ！ オレはテメエに敬意を表して、名前を聞いてやる事にしてやる！ ほらテメエ、名前乗れよ』

「ジャ、ジャック……ジャック・カックヴァスだ……。テメエ……姉ちゃんを」

『どうも、しねえよ。いやいや、正しくは、気が変わったのさ。オマエを見て、このアマを殺さない事に決めた。その代わりに、もうちよいつと、オレを楽しませてみるや。期限は、今からキツカリ二十四時間後。それ以内にオレを止める事が出来なければ……このアマは、オレの腹の中さ』

しゅるしゅる、と。

まるでリンゴの皮が剥けていくように、オオカミ化物の体が徐々に徐々に消えていく。

ジャックはそれを見ると、慌てて駆け出す。

「テメエ、待ちやがれ！ 姉ちゃんを返せ！」
『ゲツヒヤヒヤ！ オレの名はフェンリール・ビツツアル。覚えておく事だな！ ゲヒヤツ、ゲヒヤヒヤヒヤヒヤ！』

そうして FM星史上最悪のバケモノは……虚空へと、消え去ったのだった。

動き出した歯車は、もう止まらない

孤島の刑務所。

ここで、殺戮が繰り返されようとしていた。

32 何よりも大切なモノ

無秩序と化した食堂。

等身大の死の恐怖に、囚人も、僅かに生き残った看守たちも、我を失っていた。

闇を生き抜いてきた囚人と、こんなイカれた場所で働くだけの適性を得た看守たちには似つかわしくない状況だ。

そんな中、血だらけの小汚いテーブルの上に腰掛け、ジャックは頭を抱えていた。

フェンリールの挑戦状。

ヤツを見ているだけで、その戦闘能力の凄まじさが伝わってくるほどだった。

現に、あのイカれた電波人間は百戦錬磨の囚人と、プロの訓練を受けた囚人たちを蟲けら同然に扱ってみせたのだ。

その事が、ジャックには堪らなく恐ろしいのだ。

今の自分には、コーヴァスも、電波兵器も、ノイズドカードもない。

ただのザコ　それも、ザコの中でも最低品に値する子供だ。

もはや滑稽すぎて笑えてくる。

このままでは、姉は消える運命だ。

だが、どうしようもない。

そんな状況にジャックは絶望し、頭を抱えていた。

と、その時だ。

悲愴な雰囲気纏い、拒絶を辺りへとばら撒くジャックの服の裾が、ぐいぐいと引っ張られた。

暗い色を宿した瞳をそちらへと向けると　そこにいたのは、推定一二歳程度の少女だった。白い肌、肩まである白い髪、左右で違う、緑と青のオッドアイ。

王族の宝物、といった雰囲気少女だ。

適切な環境を整えてやらないと死んでしまう、高山の花……そんな印象を受ける。

そんな雰囲気吹き飛ばすかのように、少女は天真爛漫な笑みを浮かべてみせるのだった。

「おにーちゃん、元気出しなよ！　ワタクシサマが応援してあげるから！」

「何様のつもりだよ」

「ワタクシサマ」

「……、」

ぐりぐりぐりぐりっ！　と、ジャックの両拳がドリルのような拳動で少女の頭蓋を攻撃する。抗議の声を上げて、少女は転げ回る。それを見たジャックは手を離し、堪忍してやるのだった。

解放された少女はハイテンションな口調で　やはり、見た目とは反比例している　言うのだった。

「ワタクシの名前は、オーゲスト＝ロゲフ……　オーストって呼んでよ。なんかね、『ムー』とかいう文明の末裔なんだって。詳しい事はワタクシにも良く分かんないや」

「……は、ははは……　冗談はよせて。……えーと、オーストそれで、俺に何の用だ？　見ての通り、俺は一人でいたい気分なんだが」

それを聞いていたのか聞いていないのか、オーストは小さな小さな手のひらをジャックに差し出してみせるのだった。

その手に載っているのは……青く輝く、ペンダントだった。血によって青と赤のツートーンが演出されており、ひたすら禍々しい。

間違いない。これは　クインティアのモノだ。そして、『祖国』の国宝だ。

「それ……、姉ちゃんの……」

「もう会えないかもしれないから、って……一時間ぐらい前に、地下でキミのおねーちゃんが、キミに渡すように頼んだんだよ。だから、これをあげるね」

差し出された手から、姉の物だった……そして、もう二度と彼女の物にはならないかもしれない、姉弟で分かち合った宝物を、ジャックは受け取ったのだった。

暫くの間、まるで取り憑かれたかのようにペンダントを見下ろしていたジャック。無感動だった彼の瞳が、揺れ出す。

溢れ出す想いの数々。

心の奥底で沈み切っていた、想い。

『祖国』での思い出。

全てを失った哀しみ。

姉と支え合って生き抜いた、辛く苦しかった日々。

この世界の全てに復習すると誓い合った、あの日。

バカなヤツらと騒いだ、あの日々。

そして。

何よりも大切なモノを教えてくれた、あの『大バカヤロー』

……。

ハッ、となった。

何よりも大切なモノ。
キズナ。

それを教えてくれた『大バカヤロー』は、今の自分を見たら、何
と言っただろうか？

姉弟揃って帰ってきてくれる、とずっと信じ続けているアイツら
は、何と言っただろうか？

そして。

今こそ、大切なモノを守るべき時ではないのか？

出来るかどうかの問題ではない。

意義の問題ではない。

行動こそが問題なのだ。

(……くそっ)

可能性はゼロに近い。

無謀と言ってもいい。

(……ちくしょう……!)

だが、だけれども。

それで、大切なモノを失っていい理由にはならない 必ず、も
う一度笑い合う。

その為に必要なモノはただ一つ。 行動だ。

(……やってやるよ、クソツたれ……その挑戦、引き受けてやる。クソツたれのオオカミヤローめ、天才たるオレの凄さを見せ付けてやるぜ)

ペンダントを握り締め、前方をきりと見つめる。

鎖は全て断ち切ってやる。

その先にある、大切なモノを守り通す為に。

「……必ず、このペンダントをもう一度、姉ちゃんの手握らせる。もう二度と、なんて悲しい事は言わせない。 今度は、俺が奇跡を起こしてやるんだ」

崩れ落ち、ボロボロになった歯車を再び繋ぎ合わせる為。

大切なモノを通して希望を学んだ幼き戦士は、戦場を駆け抜ける。

33 劣等の周波数

刑務所にて、一人の少年が戦う決意を決めた、その頃。

コダマ小学校では、一人の少年が震えていた。

使い古された体育倉庫。埃独特の嫌な臭いが鼻を付くその場所で、少年・音良司おんりょうじカイキは、一体のウィザードと向き合っている。

ヒールウィザードを、数倍厳めしくしたような外見。全身がトゲだらけで、纏う雰囲気は怨霊のそれに近い。

捨てられた、孤独なウィザード。

死にかけだった、孤独なウィザード。

遠い地からの『訪問者』によって生まれ変わった彼は、淡々とした、それでいて圧力のある調子で言うのだった。

『やれよ、カイキ。それがオマエの望みなんだろう？』

「でも、……」

『躊躇ってんじゃねえよ。いいか、これは絶好のチャンスだ。』

ロククマンを始末するには、絶好のチャンスだろうがよ』

「それでも……」

『なんだ？ 星河スバルくんはトモダチだから攻撃できません、ってか？ 甘いね、甘い甘い』

カイキの瞳が揺れる。

動揺の証を見ると、ウィザードは一気に畳み掛けた。

『いいか、カイキ。オレにとっても、これはチャンスなんだ。』

オレは、この世界が憎い』

ウィザードのその言葉の裏には、れっきとした理由がある。

それを知っているカイキは、沈黙した。

持ち主に裏切られ、捨てられたウィザード。

それがどれだけの苦しみののか、カイキには想像も付かない。

『だから、オレたちがロックマンの代わりに世界の頂点に立ってやるうぜ。そうすれば、何もかもオレたちの思い通りだ。オマエだって、周囲の連中に対して劣等感を味わわずに済む』

「……どう、やるのさ……？ フィンデリン、ボクにはどうしようもないよ……」

『オレに、良い考えがある。 その為には、電波変換する必要がある』

「……、」
『手を差し出せ。そして、オレとの協調を望め。そうすれば』

「、、」
『全ては、思い通りだ』

カイキは一度目を瞑り、息を吐き そして目を開く。

同時に、彼の口は自然に、滑らかに動いていた。

「電波変換！ 音良司カイキ、オン・エア！！」

時は、半日ほど遡る。

春休みが終わり、カイキは小学六年生へと進級したのだった。

そして、登校二日目。

自分と同じクラスに、例の星河スバルが在籍しているという事にカイキは初めて気付いた。

コダマ小学校内ではもはや暗黙の了解となつている、地球の英雄・ロツクマンの正体。公言こそされてはいないが、コダマ小学校の生徒たちは薄々ロツクマンの正体が星河スバルであると、勘付いているのだ。

勿論カイキも、そのような噂は耳にしていたし、星河スバル「ロツクマン」という等式にも何だか納得していた。

だからといって、昨日の出来事に対する驚きが減る事は無い。

ロツクマン＝星河スバル。

その等式は、紛れも無くホンモノだったのだ。

『新しいオペレーターよ、ここがオマエの学校か？』

「……カイキでいいよ。 うん、ここがボクの通う学校さ。 えーと、で、キミ……」

『フィンデリンと呼べ』

「 フィンデリン、…… 今日からキミは、ボクのウィザードって事でいいんだよね？」

『多分な。目覚めたらオマエのウィザードになつてたし、いつの間にならこんな姿になつてた。……オレが聞きたいくらいだ』

アンタレス。

その名が、カイキの頭の中に浮かんだ。

正体不明かつ威圧的な、あの電波生命体。

彼が、瀕死だったフィンデリンを『再構成』し、サテラポリスのバトルウィザードを超越するほどの力をフィンデリンに備えさせたのだ。

その意図は分からないが、カイキは星河スバルを救う為に、フィンデリンと電波変換した。 だから、もう引き返す事は出来ない。

フィンデリンは正真正銘カイキのウィザードになったのだから。アンタレスがどのような思惑を抱えていようと、カイキはその手のひらで踊る以外に選択肢が無くなったのだ。

始業のチャイムが鳴る。

もはや学校中に名を轟かせる存在となった、白金ルナ生徒会長とつるんでいた星河スバルや牛島ゴン太なども教室に戻り、着席する間もなくして教卓に教師が立つと、教室は静まり返った。

この時。

カイキの中には、とある感情が芽生え始めていた。

(ロックマン、か……)

休み時間。

音良司カイキの心臓は、最高潮にヒートアップしていた。理由は単純明快。

青春にありがちな理由である。
恋。

少し席の離れた女子生徒へと、意を決してカイキは話しかけようとするのだが、その少女は気付けばそこにおらず、遠く離れた、星河スバルの下へと走っていく最中だった。

「……」

落胆し、へなへなと席に座るカイキ。

訳が分からないといった様子で、ハンターの中のフィンデリンは首を傾げた。

この他にも、カイキが劣等感を持つようになるには、充分すぎる程の要素があった。

それを見かねたフィンデリンは、こう提案したのだった。

『オマエの力を、世界に見せ付けてやれ』と。

これがキツカケで、大事件が起こるとも知らずに

34 不可視から可視へと

ぞわっ、と。

フィンデリン・ゼーツの出現に伴って、ウェーブロードそのものが振動するかのようであった。

圧倒的な周波数が辺りに充満する。

かつてのシリウスやアンタレスには遠く及ばないが、それでもフィンデリン・ゼーツの周波数は脅威に値していた。

無骨な、小さな体躯。体を覆う金属はどこまでも黒く、濁りを見せる。深淵な闇を思わせる程だ。バイザーは赤色に輝き、口元はフェイスで覆われている。

片腕に取り付けられた巨大なキャノンもまた、黒と赤で構成されていた。

B級ハリウッド映画に登場する、地球を救う機械ヒーロー。

フィンデリン・ゼーツの特徴を一言でまとめてしまえば、それだった。

驚嘆からか、カイキはフィンデリン・ゼーツとなった自分の片手を、まじまじと見つめる。フィンデリンはその隣に現れ、動きを急かす。

『カイキ。モタモタしてたら失敗しちまう。さっさと、この世界をオレたちのモノにする為の行動を起こすぞ』

「とは言っても、どうするのさ？」

『そうだな、とりあえず、この辺りでもっとも容量の大きいサイバーエリアを探すとするか。探知を開始するぞ、カイキ。周波数を操作しろ』

日本時刻、午後三時四五分。

四月上旬というだけあって、コダマ小学校の授業内容はまるでお子様向けの物だった。ただし、気付けばそれが難易度高めになっており、恐るべき怪物と化してしまうのが学業の恐ろしい所だというのが、星河の持論だった。

殆ど上の空で国語の授業を受ける。

デスクの上に浮遊したエアディスプレイには最低限の事しか刻まれておらず、星河が授業を何も聞いていない証拠だ。

『、オイ』

『むにやむにや……』

『スバル、オイ……』

『……やめてよー、……むにやむにや』

『いいから目覚ませよ、オイ……』

いつまでも呼びかけに応じない星河に痺れを切らし、ウォーロックは物質化して物理的に叩き起こしてやろうかとも思案する。

だが、それを行うには及ばなかった。

ガーツー！ という異常音と共に、突如として教室内の電灯が全て消灯と同時に、それらのシステムが一斉に暴走を開始したのか、並々ならぬ量のノイズと電波ウィルスの生成が確認された。

「えっ」「なになに!?!」

「世界の終わりだ!?!」

「ちよっ、暗いからって私の体触ってんじゃないわよ変態!」

「よし、この隙にコイツの持ち物を奪って」「聞こえてるぞバカヤロウ」

「そっすいや、カイキまだ帰ってこないぞ」「保健室じゃね?」

好き勝手に騒ぎ立てる生徒たち。どうやら、コダマ小学校の校則は従順に守られているらしかった。

人間達とは違い、ウィザードたちの反応は敏感だった。

ノイズの影響を察知し、怯え始める。

元は純粋な電波生命体であったウォーロックならば、それは尚更の事だ。

「えっ! うわっ、何!?!」

この騒ぎによって、ようやく覚醒した星河。

ウォーロックはそれを確認すると、こう告げた。

『ここら辺の環境周波数が、イカれちまってる! 異常領域の範囲は次々と広がっているみてえだぜ……。ココにいたら気が狂っちゃうぞうだ! ノイズやら電波ウイルスからオレを遠ざける!』

「んなムチャクチャな……」

『ウソだと思っんなら、ビジュライザー掛けてみる!』

「どれどれ……うわっ!?! こりゃ凄いや!」

ウォーロックに促されるままに電波を可視化させてみた所、酷い

光景が広がっていた。ウェーブロードは掻き消されそうなほどに波打っている。ただしそれは電波が消えかかっているのではない。むしろ、その逆だ。ウェーブロードの持つ周波数が、電波以上の電磁波……マイクロウェーブやガンマ線になるうとしているのである。ビジライザーは一定の電磁波のみを可視化させる為、電波より高位の存在に昇格されてしまうと、可視化が不能になるのである。

ノイズたちは互いに結合を果たし、成長を続ける。クリムゾンの予備軍があちこちに点在していた。

ウィルスは、得体の知れない電磁波のホールのような場所から延々と生成されている。異様としか言えない光景だった。

「ど、どうするんだよコレ……」

『とりあえず、学校の外に出るぞ！ 話はそれからだ！』

校長室。

その奥底に鎮座するドデカイ装置は、コダマ小学校の中でも最大容量を誇るサイバリアエリアを内包している。

その中に、フィンデリン・ゼーツは居た。

コダマ小学校の管理サーバーへとアクセスし、一気にデータを書き換えていく。不可視の世界から、可視の世界への干渉。

フィンデリンが提案した作戦は、つまりそれだった。

「コダマ小学校は、殆ど掌握したよ……それで、これからどうするの？」

「次は、範囲を広げるぞ。心配するな、簡単な事だ。オレたちはもう、現実世界の電波環境を書き換える事に成功している。その範囲を広げていけばいいだけだ」

「でも、ボクたちの処理能力じゃ、そんなのは……」
「だからこそ、さ」

そう言って、フィンデリンはニヤリと笑ってみせる。

彼の後ろには 青く、怪しげな渦巻きのようなモノが存在していた。

35 子供の無邪気な夢が、そこにはある。

コダマタウンの隣町。

電波環境の影響が少ない所まで移動してきた星河は、即座にハンターを取り出して相棒の答えを望む。

『ここまで来れば、もう平気だ……。さて、どうしたものかね』

どうやら、あのウォーロックが無い頭を必死に振り絞っているようだ。

それほど恐ろしい事態、という事なのだろうか。

しかし、星河にはいまいち実感が無かった。

彼は電波体ではなく物質から成り立つ生命体なので、当然と言えば当然か。

「……………ねえ、ロック。電波環境の異常って、コダマ小学校の電脳空間が原因なんだよね？」

『ああ、そうだが』

考え事の邪魔をするな、と言いたげな表情をするウォーロック。

しかし、星河は続ける。

「異常が起きているって事は、電磁波の周波数がおかしくなってるって事だよな？」

『さあな。知らん』

「……………まあ、とりあえずそういう事にしておこうよ。楽し」

『オマエ、何だか投げ槍だな……………疲れてんのか？』

「いや、別に」

『いや、何かあるだろ』

「いや、ないから」

『いや、あるだろ』

「あー、もう！ ロックってばうるさいなあ！ どうせキミには分らないよ！ 理科の授業を中断させられた僕の気持ちなんて！」

『そういえば、今日の理科の授業って天文関係だったな……つくづく天文マニアだなコイツは』

「……とにかく。僕は、一つの作戦を提案したいんだよ」

《……強引に話を進めやがった……》

ウォーロックの心中で渦巻く呆れの色など知らず、星河は指を突き立てて提案を試みせる。

「ノイズさ！ ノイズを使うんだよ！」

コダマ小学校。

高エネルギーの電磁波が、そこに満ちていた。

調整された波長域を持つ電磁波は元々あった電波環境に干渉し、歪みを作り出す。

それはまるで、高圧電流の流れる電線の近くでは家電製品が故障するように 電波体へ、壊滅的な被害を与える。

まさしく死の領域と化したその場所に、一つの人影があった。

赤いバイザー。

青い肢体。

そう、シューティングスター・ロックマンだ。
ただし、通常と違う部分の一つだけ。

星の形を象った胸のエンブレムが、強く弱く点滅しているのだ。

エースPGM。

ノイズの制御を可能とした、サテラポリスの技術の結晶。

そして、星河スバルの恩人とも言える、とある人物が遣した物。
それが、ロックマンの周波数を得て稼働しているのだ。

「よし、ロック。試してみるよ」

「上手く行くかどうかは分からないけどな」

「ほんと、キミって良い性格してるよ。盛り上がるね」

「へへっ、ありがとよ」

「……はあ」

最高の相棒が場を盛り上げてくれた。

という訳で、作戦を実行する。

ロックマンは左腕を空高く掲げると、声を張り上げた。

「地の味方たる緑の守護者よ。生の駆動たる赤の守護者よ、」

「なあ、それ要るの？ トランスコードとかもいちいち叫んでるし、
地球人の流行なのかね？」

「ああ、そうだね。そうだったよ。まったくキミは最高だ」

「へへっ、照れるぜ」

「……はあ」

まったくもって最高の相棒だ。

場が炎のように盛り上がる。

さて、盛り上がってきた事だから作戦を再開しよう。

「……スターフォース！ ペガサス！」

「なあ、だからそれ」

「いい加減黙ってくれないか。さっきから何なんだキミは。大人か？ いちいち夢に現実を持ち込む大人か？」

……だがまあ、叫んでみたものの。

ロックマンの体には、何の変化も無かった。
至って普通のロックマンだ。

「やっぱり、AM三賢者との周波数共鳴はもう出来ないのかあ……。そりゃあ、そうだよな。電磁波ですら何年も掛かる距離だもの」
「何グチグチ言ってるんだ、オマエ。周波数は変化してんだから、一応作戦は成功だろ」

「いや、でもね……。これには僕なりのこだわりというもの……。だって、変身だよ、変身！ そそられるじゃないか。最高じゃないか。ロマンじゃないか！ そう思わないかい、ロック！？」

「いや、何言ってるか全然分からん」
「おのれ大人め」

とまあ、不毛な会話はここまでだ。

指先へ、神経を集中させる。

スターフォースとは、キズナリヨクによって自身の周波数を一時的に興奮させ、それをAM三賢者の周波数と共鳴させる事で引き起こされる物だ。

しかし、AM三賢者は遠い宇宙にいる。

いくら光といえど、到達するには数年掛かる。

しかし、だ。

AM三賢者との『共鳴』によって、その周波数はウォーロックの内に眠っているのだ。

スターフォースこそは不可能でも、その力をある程度引き出す事は可能かもしれない。

そして、ウォーロックの言った通り、ロックマンの周波数は爆発的な跳ね上がりを見せていた。

キズナリヨクの影響もあるのだろう。

その周波数の脅威は、かつてのスターフォースに並ぶかどうか、という所にまで到達している。

そして、だ。

より強い電磁波ほど、ノイズを発する。

ここまで言えば、もう分かるだろう。

「ノイズ率、150%……よし、行ける！」

叫び、ロックマンは自身の周波数を空間へ解き放つ。

それに比例する量のノイズが、エースPGMの制御下に収まる。

「おおおおおおおおおおお！！！」

『なあ、だから声出す意味 』

「さっきからうるさいなあキミは！ 黙っててくれないか！」

……過程はどのような物だったにしろ、どうやら作戦は成功したようだ。ノイズは強力な電磁波に打ち勝ち、一つの道を作り出してみせたのだ。

36 からすとじりら であい編

暴徒と化した囚人たちが、騒ぎを起こしていた。

ガンマ線を銃弾として看守たちが騒ぎを鎮めようとするが、囚人たちの余りの暴徒っぷりに、それすらも叶わない。

地獄に等しい光景の中を、一人の少年が走る。

その手の中には、大事なモノが握られている。

そして、少年は大事なモノの為に足を動かす。

全ての障壁を、障害を乗り越えてみせる為に。

だから、少年はひたすらに駆ける。

キズナという、ようやく取り戻せた大切な物を守り抜く為に。

刑務所内にもデータが走っている。

無論、それを集中管理する為の場所もある訳だ。

何せ、特別クラスの荒くれ者達と一緒に閉じ込めてしまうというのだから、集中管理しないと危なくて仕方無いのである。

そして、今。

その集中管理室のモニターは、この施設の責任者達の上役の顔を映していた。

深く刻まれた縦皺が、どこか厳格な父性を連想させる。青ざめた顔色とは対照的に、彼の頭脳はフルに回転していた。古色蒼然たる

瞳が、炯々と光っている。

その瞳に見据えられた所長は、早口に捲くし立てた。年齢とは正反対に、みっともない姿を晒してみせる。

「あ、アクイレさん……！ カ、かつ、かつ、怪物……怪物がッ
！！ ひ、ひひとつ、こっ、ころ …！」

呂律が回っていない。これでは伝わる物も伝わらないだろう。

しかし、回っている回っていない関係無しに、この哀れな所長は救われないのだ。

なぜなら、

ブツッ、

「……、？ お、おいっ！！ 誰だ！ 誰が通信をシャットアウト
しッ」

言葉は、続かなかった。

モニターだけではない。

照明が、次々と消えていく。

具現化物質リアルウェーブだったモノが、打ち消えてノイズや電磁波へと変貌する。

所長の喉が、緊張に打ち鳴らされた。

次の瞬間。

ジバババババババツッ！！ と、高圧電流特有の何かを焦がすような音が響き渡る。無骨なアスファルトで覆われた床が、天井が、壁が、焦げて消える。ドロドロになった溶岩のようなモノと、光り

輝く電離体プラズマがあちこちに見られた。

電磁波を使用した機械や製品が、暴走を起こしているのだと所長が気付いた時には、もう遅かった。

ドアのロックは堅く閉ざされ、もはや脱出が許されなくなる。

ハンターV Gからの操作すら受け付けられない電子機器たちが、次々と電流を発し、爆発し、牙を剥く。

悲鳴が上がった。所長はもはや、恐怖にガツシリと足を掴まれて動けなかった。

そして、情けなく、獣のように口から千切れんばかりの絶叫を張り上げた。

しかし、それは爆音や電流に掻き消され、誰の耳にも届かない。

誰にも。

そう、誰にも。

次々と溶け、焦げ、消えていく仲間たちの前で、所長は、自らの首に掛かる『死』の吐息に、怯えるしかなかった。

もう、自分は死ぬのだと。

無様だった。

怖かった。

死への一直線をひたすらに進むしかないという事実には、狂ってしまっただった。

死は誰にも平等。

その事実を突きつけられ、所長はまるで子供に戻ったかのように衝動的な恐怖を感じる。

頭の片隅に、一つの思い出が蘇った。

それは、若い日の記憶だ。

愛した妻の健康的な肌、声。

愛した息子の無邪気な声、快活さ。

そうして、転落。

仕事でミスを犯してしまった自分は、こんな場所に追いやられてしまった。

そうして、息子と妻はいなくなった。

ああ、自分は死ぬのだと。

その事実を認識した時、真っ先に浮かんだのは、息子と妻の事だった。

一目会いたい。頭を下げたい。

目前に迫った死の鎌に向けて、彼はそう願った。

その願いは

意外な形で、叶えられる事になる。

目前に、高圧電流の手が迫る。

死ぬ。

真っ先にそう思った。

目を瞑る。

妻と息子を想う。

そして、異変が起きた。

爆音。

得体の知れない衝撃波の雪崩が、所長の体を転がした。

喉から絶叫を迸らせ、所長は高圧電流が遠ざかった事を知る。

そうしてから、電子ロックの扉へと

「ひっはは、こりゃ面白い」

極悪犯罪者が、そこに立っていた。

手には赤く輝くペンダントを持って。

皮肉なことに、自分達の閉じ込めていた囚人が、今度は自分達の牢獄を解放してみせたのだ。

そして、黒きカラスは鳴く。

獰猛な爪を突き立てながら。

「丸焼きにしようたって、そうはいかないぜ。オオカミヤロー」

言って、彼が手に持ったのは赤く輝くペンダント。

もう一つ、血に塗れたペンダントがあるが、少年はそちらに傷を付けたくない様子だった。

次の瞬間、床に転がる所長は目を剥く事となる。

赤く輝くペンダントから、これまた紅い球体が三つ飛び出したのだ。

妖しく輝くそれらが、爆発したり高圧電流を発する電子機器に纏わり付く。

ボボボボンッ！！と、やけに軽い音と共に、電子機器の暴走は止まった。

カラスの少年は額に掛けた、オレンジ色の電磁波可視化装置を通して電波環境の数値を測定する。

「……あのオオカミヤロー、どうやら得体の知れない方法を使って、電磁波を遠隔操作してるみてえだな」

つまり、

「あのヤロー……電磁波に関する、特殊技能を持つてるみてえだな」

その言葉を聞いて、所長は目を剥く。

先ほどのシステムエラー……あれは、

「……まさか、ヤツはこの孤島の通信システムを外界からシャットアウトしたのか……!?!」

所長の呟きに、カラスの少年が鋭い瞳を疑問の色に染め上げるが、その言語化は叶わなかった。

何故なら、

「ゲヒヤーツヒヤツヒヤツ!!」

大きなシルエット。膨らんだ腹部。毛むくじやらの腕。

巨体を揺らして、悪漢・五里門次郎がその場に現れたからだ。

ジャツクは溜息を付き、そして言う。

「またオマエか」

「命が惜しけりゃ口を嚙むんだな、クソガキ。俺あガキってヤツが大嫌いっなんだ。うっかりしているとブチ殺しちまう」

「おおー、怖い怖い。流石、アマゾンの王者は言うことが違う」

「ゲヒヤツ、それはともかくだ……話は聞いたぜえ？ システムアウトだってなあ？」

「……盗み聞きかよ、コイツ。つくづく汚いな」
「ありがとう！ ゲヒヤヒヤヒヤ……！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5791k/>

流星の軌道

2011年9月18日19時54分発行